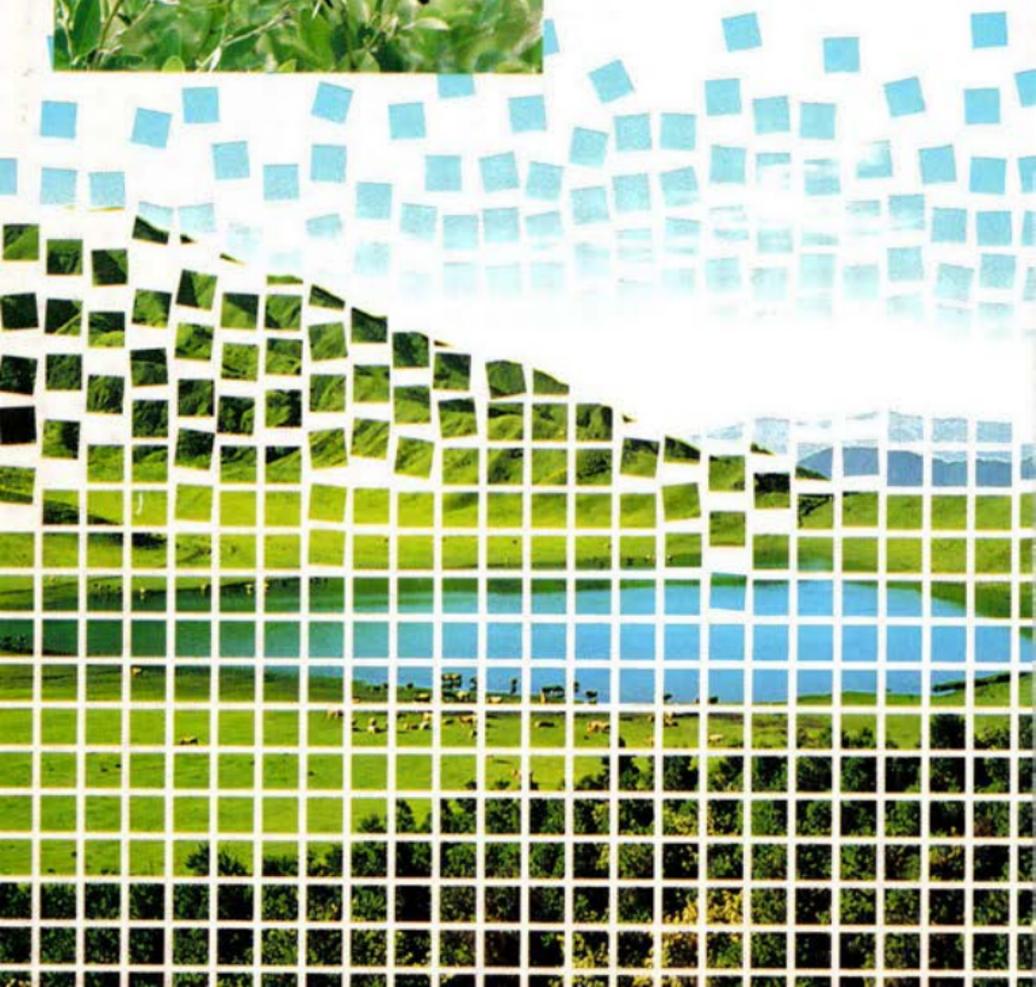


# 日本への回帰

第32集

平成8年 阿蘇合宿レポート









大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

# 日本への回帰

(第三十二集)

— 第四十一回学生青年合宿教室(阿蘇)の記録より —



## はしがき

旧臘十八日、駐ペルー日本大使公邸で発生した極左ゲリラによる占拠人質事件は、わが国が深く内包してゐる思想的混迷を余すところなくさらけ出した。

フジモリ大統領は犯行グループに向つて「武器を捨て人質を解放するなら武力行使を控へよう」と投降することを呼びかけたが、事件発生以来、今日現在まで四十余日、この間、わが国政府はただ「平和的解決をはかる」と繰り返すのみ。人質を楯にして暴力的に政治要求の実現を迫るテロリストに対して「あくまで人命を尊重して平和的決着をはかる」とは、突き詰めて考へるまでもなく、暴力的脅迫の前に膝を屈することの言ひ換へでしかない。

かつての日航機がハイジャックされた時、人質となつた乗客の早期救出を最優先させた当時の福田内閣は、極左グループ日本赤軍の要求するままに獄中にある彼らの仲間の服役囚六人に身代金十五億円余をつけて、乗取り犯ともども世界に解き放つた（昭和五十二年、ダッカ事件）。「人命は地球より重い」とは、事件の矢面に立たされた福田首相の言であつたが、当然に「日本はテロリスト達を活動資金つきで放つた」として、国際社会から不信を買つた。

今回、ペルー人テロリストの要求が直接的には彼らの政府に向けられたことで、「人質の安全」にしか関心がないかの如きわが国政府の無原則なる宥和策は、ペルー政府の非妥協的対応の前に出番が封じられてゐる。しかしながら、毅然としたペルー政府の対応ぶりとは対照的に、わが国のそれが類例他にないほどに及び腰であることを世界は見逃さなかつた。

「平和的決着」しか口にせず、そのためペルー政府の対応策の幅を狭め、結果としてゲリラを強気にさせてゐるわが国について、例へばフランスの有力紙ルモンドは、ダッカ事件を回想しつつ武力解決を回避するのが日本の伝統的態度であると批判し、今回の事件は「日本の平和憲法の再考を課す」と述べたといふ。

世界各国に前例のない「平和的解決」指向は、他に類例なき「非武装憲法」と表裏してゐるとルモンドは言つてゐるのだ。まして、その「平和憲法」と呼ばれる非武装憲法は被占領期から強制された武装解除規定の別名なのだ。しかし、いまや与野党おし並べて「平和憲法」擁護派一色である。第九条の「戦争の放棄・戦力の不保持・交戦権の否認」は前文の「……諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」を受けてゐるが、これに拠ることになれば、自らが自らのために「かくありたい」「かくあるべし」と意志し決断して、主体的に行動することを忌避することになるわけである。

近隣諸国の脅威とならない範囲内で防衛力の整備をはかるとする「専守防衛」、国際協調の見地から配慮を加へるとする教科書検定の際の「近隣諸国条項」等々、策定事情は異つても底流にあつて共通するものは、「平和憲法」から敷衍されてくる「確信の喪失」である。

今もなほ「非武装」こそが終極的な理想であるとして、新聞紙上はもとより国会論議の場でも教室の中でも、金科玉条視されてゐるが、それは必ずしも理想的な国家のあり方を示すものではない。自らに「譲れない最後の一線」「守るべきもの」がないことを告白して、自存努力を否定するに等しいことだからである。非武装願望国家は「確信喪失の国家」の別称であつて侮りを招くばかりである。何故に人質の米国外交官が逸速く解放されたのか。

「確信なきわが国」の現状は、これが並の独立国なのかと思はれるほどに、愈々、惨たる状況を呈してゐる。自国の領土はあくまでも守るとの明確な意志表示さへ出来難くなつてゐる。先般の最大与党自民党の党大会で採択された運動方針には、韓中両国を慮つて「竹島」「尖閣諸島」の名を書き込まなかつた。次代を荷ふ児童生徒の使用する教科書の記述内容までもが他国の顔色を窺ふありさまで、悲しいかな文相の視線は子供らの方にはなく隣国の意向に注がれてゐる。自らの死生観と風習に基づく戦歿者への慰霊追悼さへもが外からの干渉に晒されてゐる（そして、毒ガスによる無差別殺人を実行したオウム真理教への破壊活動防止法の

適用も見送られた。テロリズムに甘い確信なき体質は、ここにも顔をのぞかせてゐる。

ところが、主要マスメディアは「確信なき現状」に警鐘を鳴らすどころか、それに輪を掛けてさらなる「確信の喪失」を迫るばかりである。「日本を見つめるアジアの目」を根拠に、わが日本への「不信感」の存在を言ひ募る。アジア諸国の人々の歴史認識に理解を示せ、それに歩み寄るべきだの旨を手を替へ品を替へ説き続けてゐる（例へば「憲法公布五十年」にちなむ昨十月末から五回に及んだ朝日新聞の社説など）。

平等互恵・内政不干渉といふ外交の基本原則は、どこへ行つてしまつたのか。時代的背景と経緯に何ら顧慮することなく、一時的な感情から情報を操作してゐるとしか思はれない恣意的なメディアと、それに翻弄される「平和外交」「謝罪外交」の不様な姿が浮かび上がつてくるばかりである。社会の木鐸たるはずの、それ故に言論の自由を掲げてゐるはずのメディアの眼が狂つてしまつては、その墮落は停るところを知らない。

「一身独立して一国独立す」と先人は言つた。その逆もまた真なりで、一国自立せずして一身の安寧なし。わが中学生たちが一斉に「従軍慰安婦」なる五文字を読ませられようとしてゐるではないか。経国済民といふが経国が歪んでゐては済民は覺束ない。

なぜペルーの日本大使公邸が襲はれたのか。皮肉なことに、命懸けのテロリスト達には人

命尊重しか口に出来ない日本の弱点がお見通しだったのである。「人命は地球より重い」が本当ならば、政治要求実現の手段に「人命を弄ぶ」犯人へのもつとストレートな怒りの表明があつていいはずだ。いま一度、言はう、一国独立せざれば一身の安寧画餅の如しと。

確信の喪失は「自己への不信」であり「自己喪失」に他ならない。病的なまでに自国意識を見失つた現在ではあるが、自国の歴史と文化の中に国民としての「わが生」の拠りどころを尋ねる学問、即ち自らを掘り下げる学問の本筋が確認されなければならない。海外への旅行者が年間一千五百万人を超えてゐる今日、自国文化に関する認識を欠くために異文化への理解度が浅いレベルに留つてゐるとも言はれてゐる。世界各国の若者たちに伍して心豊かに交流する青年達の輩出を願つて、私共は昨夏も四泊五日の宿泊研修を営んだ。その研修内容を記録したのがこの冊子である。私共の意図するところをお汲みとりいただけたら誠に幸ひである。

最後になつてしまつたが、竹本忠雄先生、伊藤哲夫先生には御講義要旨の掲載をお許しいただいたばかりではなく、御懇切なる御加筆を忝うしたことに衷心から御礼を申し上げます。

平成九年一月三十一日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

# 目次

はしがき

講義

第一日（八月二日）

真の「生きる力」とは何か——歴史を正確に見直さう——

福岡県立門司高等学校教諭 坂口秀俊 : 1

第二日（八月三日）

激動する東アジア情勢と日本——日本国憲法を再点検する——

日本政策研究センター所長 伊藤哲夫 : 21

明恵上人と現代の学問

神奈川県立百合丘高等学校校長 國武忠彦 : 55

吉田松陰に学ぶ

(株)日本興業銀行資本市場部第二課長 小柳志乃夫 : 77

第三日（八月四日）

日本の神聖と現代世界

筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授 竹本忠雄 : 97

第四日（八月五日）

人の心を種として

..... 元日特金属工業(株)常務・(社)国民文化研究会顧問 加納 祐五 : 133

講話

若き友らへ語りかける言葉——「極く当り前の日本人」に私はなりたい——

..... (社)国民文化研究会常務理事兼事務局長 長内 俊平 : 165

先人を偲ぶ営み——慰霊といふこと——

..... 大成建設(株)国際事業本部企画管理室長 山口 秀範 : 189

短歌入門

短歌創作導入講義

..... 山口県立下松高等学校教諭 宝 辺 矢太郎 : 199

創作短歌全体批評

..... 熊本市企画調整局情報企画部情報企画課 折 田 豊 生 : 219

一年の歩み

..... 福岡県立春日高等学校教諭 與 島 誠 央 : 243

合宿教室のあらまし

..... 熊本学園大学商学部四年 喜多村 純 : 255

あとがき

..... 279



講義

真の「生きる力」とは何か

——歴史を正確に見直さう——

福岡県立門司高等学校教諭

坂口秀俊



- 一 第十五期中央教育審議会の第一次答申……〔生きる力〕
- 二 歴史を正確に、複眼的に見よう
- 三 反日的な大学入試問題
- 四 日韓問題を考へる
- 五 真の「生きる」とは何か

一 第十五期中央教育審議会の第一次答申……「生きる力」

今年の七月十九日に第十五期中央教育審議会の第一次答申が出されました。この答申は、平成七年四月二十六日に当時の与謝野文部大臣から「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方について」といふ諮問が行はれたものに対する第一次答申です。第十五期中央教育審議会は、①「今後における教育の在り方及び学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方」、②「一人一人の能力・適性に応じた教育と学校間の接続の改善」、③「国際化、情報化、科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方」を主な検討事項として審議を進めてみますが、第一次答申は、①及び③についての審議の成果としてとりまとめられたものです。

答申では「子供たちの生活の現状等」で、積極面もある一方、受験戦争によるゆとりのない生活、社会性の不足や倫理観の問題、自立の遅れ、健康・体力の問題が存在、家庭と地域社会の教育力低下などの問題点を指摘してゐます。そして、「今後の教育の基本的方向」として、豊かな人間性など時代を越えて変はらない価値のあるものを大切にするとともに、社会の変化に的確かつ迅速に対応する教育が必要である、と指摘してゐます。かういふ考え方

に立つて、これから求められる資質や能力を、次のやうに掲げてゐます。それは、①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考へ、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、②自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思ひやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力、ですが、それをこの答申では「生きる力」と称してゐます。さらに「生きる力」を育むためには、子供たちをはじめ社会全体に「ゆとり」が必要であることを指摘してゐます。

この答申は冒頭に申しましたやうに、「二十一世紀を展望した我が国の教育の在り方について」といふ文部大臣の諮問を受けての答申ですので、我が国の教育全体を見通した答申が出るわけではないのです。従つて、多く対処療法的な内容となつたことは当然であり、それなりによくできた答申であらうと思ひます。しかし、ここで強調され、マスコミでも大きく報道された「生きる力」といふことばが、私にはどうもひつかかるわけです。答申に書かれた「生きる力」が必要であることはいふまでもないことですが、その前提となるものが、欠けてゐるやうに思はれるのです。といふのは、昨年の終戦五十周年国会決議や国務大臣の「我が国は朝鮮を統治するにあつて、よいこともした」云々と発言したことによる更迭など、このところ、明治以降昭和戦前期までの我が国の歴史をすべて断罪する歴史観（東京裁判史観）



が当然のこととしてまかり通つてゐる中で、はたして児童・生徒に本当の意味の「生きる力」を持たせることが可能だらうか、といふ疑問を持つたわけです。

## 二 歴史を正確に、複眼的に見よう

現在小学校・中学校・高等学校で使はれてゐる社会科や地理歴史科の教科書は、その多くが昭和戦前期までは軍国主義の時代で暗く「ファシズム」であり、戦後が民主主義の時代で明るいといふステレオタイプで書かれてゐます。昭和戦前期を「ファシズム」といふのは、東京裁判の判決によるところが大きいわけです。第二次世界大戦を連合国の立場から「ファシズム」対「民主主義」の戦ひとしてイデオロギー化され、正当化されました。ここで、現行の高校用「日本史B」の

教科書をみてみたいと思ひます。

軍部を中心とする国家の国民統制がすみずみまで貫徹され、日本のファシズム体制が確立した。  
(実教出版「日本史B」)

こうして軍部を中心とする政治体制(ファシズム体制)が確立され、議会は完全に無力化された。  
(自由書房「新日本史B」)

これらに代表されるやうに、「ファシズム」といふ用語は、十九冊中十三冊も高校日本史教科書に使はれています。

また、昭和戦前期を暗い「ファシズム」の時代であつたと規定し、その反対に大正期を戦後民主主義の原型である「大正デモクラシー」の時代である、といふとらへかたがあります。この「大正デモクラシー」といふ用語は、信夫清三郎の『大正デモクラシー史』(昭和二十九年(三十四年)以来、一般的に使はれ出したものです。つまり、明治時代は暗く、大正期は明るく、昭和戦前期は暗く、戦後は明るいといふやうに、歴史を単純化して見るといふ安直な発想です。大学受験勉強なら図式化して暗記しやすいでせうが、これでは歴史はわかりま

せん。

昭和戦前期を「ファシズム」と規定することには、大きな問題があります。例へば、昭和十五年に成立した大政翼賛会ですが、「ファシズム」をいふ人は大政翼賛会の成立から「ファシズム」が本格化したといひます。しかし、大政翼賛会には支配の権限はありませんし、それを作らうとした人々の意図は果たされてゐません。そして、我が国には、ヒトラーやムソリーニのやうな独裁者はゐませんでした。治安維持法も毒ガスも日本独特ではありません。歴史は世界の動きと対比させて相対的に見るべきです。無産政党の社会大衆党（麻生久、亀井貫一郎）は国家総動員法を「社会主義の模型」ととらへました。

昭和二十年までを「十五年戦争」といふ人がゐます。この言ひ方は明らかに間違つてゐます。それは昭和八年五月に塘沽停戦協定が結ばれてをり、また、十三年十一月には満州事変の停戦協定も結ばれてゐます。つまり、十五年間連続して我が国が「軍国主義」であり「侵略的」であつたと印象づける「十五年戦争」は、全く根拠のないものなのです。北京郊外の蘆溝橋事件が起こつたのが昭和十二年七月ですから、塘沽停戦協定からも四年ほどあり、その間は平和だつたのです。どうして、このやうなことが起こるのでせうか。

それは、GHQの中の民間情報教育局（CIE）が企画・立案した戦争犯罪宣伝計画（W

ar Guilt Information Program)によつて、戦後の日本人が過去の戦争をすべて「侵略戦争」であると思ひ込まされてしまつたからです。この心理作戦は、極東国際軍事裁判（東京裁判）の開廷以前・開廷中・判決段階の三段階に分けて実施されました。

第一段階（昭和二十年十二月～二十一年五月）では、「太平洋戦争史」（CIE作戦）を新聞に連載したり、「真相はかうだ」のラジオ放送を行ひ、日本人の残虐性を強調しました。そしてこの報道により、南京事件やフィリピンでの残虐行為を知らされ、国民は大きな衝撃を受けました。

第二段階（昭和二十一年六月～二十三年二月）は東京裁判の報道ですが、映画館などでニュース映画や戦争犯罪に関する映画を作成させ上映しました。そして、これに対する批判の声をすべて検閲によつて抹殺されたわけです。

第三段階（昭和二十三年三月～十一月）は、東京裁判の継続中に表面化してきた占領軍による心理作戦の浸透を妨げる動きに対してとられた対抗措置です。例へば、原爆投下に対するアメリカの責任追及の声があがると、日本人の贖罪意識を宣伝することにより、封殺されました。また、東京裁判の主役であつた東條英機が、主席検事キーナンの尋問に対して堂々とわたりあつたことで、国民の中に東條再評価の声が出てきましたが、これに対して検察側の

最終弁論を大々的に報道させるなど、徹底した情報操作を行ひました。

しかし、昭和二十五年六月に朝鮮戦争が始ると、GHQのマックアーサー元帥は、ウェーキ島でのトルーマン大統領との会談で、「東京裁判は誤りであつた」旨の発言をしてゐます。さらに、マックアーサー元帥は戦争処理をめぐつてトルーマン大統領と対立して昭和二十六年四月に解任された後、アメリカ上院において、五月三日に次のやうな証言を行ひました。

潜在的に、日本の擁する労働力は量的にも質的にも、私がこれまでに接したいづれにも劣らぬ優秀なものです。歴史上のどの点においてか、日本の労働力は、人間は怠けてゐる時よりも、働き、生産してゐる時の方がより幸福なのだといふこと、つまり労働の尊厳と呼んでよいやうなものを発見してゐたのです。

これほど巨大な労働能力を持つてゐるといふことは、彼らには何か働くための材料が必要だといふことを意味します。彼らは工場を建設し、労働力を有してゐました。しかし、彼らは手を加へるべき原料を得ることができませんでした。

日本は絹産業以外には、固有の産物は何も無いのです。彼らは、綿が無い、羊毛が無い、石油の産出が無い、錫が無い、ゴムが無い、その他実に多くの原料が欠如してゐる。

そしてそれら一切のものがアジアの海域には存在してゐたのです。

もし、これらの原料の供給を断ち切られたら、一千万から一千二百万の失業者が発生するであらうことを彼らは恐れてゐました。したがつて彼らが戦争に飛び込んでいつた動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだつたのです。

〔東京裁判却下未提出弁護側資料〕八卷)

### 三 反日的な大学入試問題

さきほど、日本史教科書での「東京裁判史観」のことをとりあげましたが、大学入試問題にもそれがそのままあらはれてゐます。この中にも、今年の大学入試センター試験を受けた方が多数をられると思いますが、そのことにつきましては、月刊誌「諸君！」に、本会会員の占部賢志氏の書かれた詳細な論文が載つてゐますので是非読んでいただきたいと思ひます。ここでは、国立大学の個別入試（二次試験）について、一例だけ紹介します。

平成八年度大学入試問題「日本史」より

金沢大学（前期日程） 全一問（原文横書き）

次の文は一九九五年八月一五日の終戦の日の際して村山首相が発表した談話の一部である。「平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有り難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを二度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。特に近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この二つを柱とした平和友好交流事業を展開しております。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後五十周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことでもあります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配の侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。」〔朝日新聞〕一九九五年八月一六日付より引用)

一九三二年以降、一五年にわたる戦争、あるいはそれ以前に日本が国策として行った行為に対するわが国の責任を追究する声は、敗戦から五〇年以上たった今日においても、なお続いている。

〔問一〕 アジアに対する日本による「植民地支配と侵略」はどのような地域にまで及んだのか。またそれはアジア諸国の人々に対してどのような「損害と苦痛」を与えたのか、三〇〇字以内で述べなさい。

〔問二〕 一九五一年九月に調印されたサンフランシスコ平和条約によって、戦争状態は終結し、わが国は独立したとされている。この条約では、わが国の「植民地支配と侵略」に対する賠償と補償の問題はどのように処理されたのか、その内容およびそ

のようになった理由について、四〇〇字以内で述べなさい。

〔問三〕 朝鮮に対するわが国の「植民地支配と侵略」の責任は特に重い。それに対する賠償と補償の問題は今日までどのように処理されてきたのか。日韓基本条約の内容にもふれながら、三〇〇以内で述べなさい。

この三つの設問に対して「東京裁判史観」とらはれない、私なりの解答をしてみませう。まづ「問一」ですが、我が国が加害者であるといふ大前提にたつた問題です。これについて、あまり語られないが、事実在即した解答を紹介します。

大東亜戦争の緒戦で勝利した日本は、米領フィリピン、英領ビルマ・マラヤ、蘭領インドシナなどで軍政を実施しました。開戦直前の昭和十六年十一月、大本営政府連絡会議において我が国は、(1)民心の把握と治安の確立、(2)重要国防資源の確保、(3)作戦軍の自活確保、といふ占領地に対する軍政三大原則(南方占領行政実施要領)を定めてみました。さうした背景から軍政初期にあつては、物資の調達と戦争遂行に日本軍は重点を置き、独立を許さなかつたため、日本軍を歓迎した各地の独立運動家や民族主義者は、日本に対して失望の色を隠しませんでした。また、従来の欧米諸国による植民地政策では、少数民族を利用して多数の現

地人を支配する民族分離政策がとられてみました。日本は軍政開始とともに、マラヤではマレー人、インドネシアではインドネシア人などの現地で多数を占める民族を優遇したため、マレーなどでイギリスに味方してゐた中国系の住民は、反日行動を行ひ、嚴罰に処せられました。

一方、軍政下の東南アジアでは、植民地時代には許されなかつた青年への精神教育や軍事訓練、指導者の政治参加などが実施され、各民族が独立を達成する上での精神的・物理的諸要因が育てられたわけです。

これが日本の軍政とアジア独立の概要ですが、「損害と苦痛」を書けといふ問ひの答へにはならないでせう。どうして、事実をねぢまげてまで、あるいは事実をありのままに見ない、祖国を悪しざまにいふ入試問題を国立大学が出題するのでせうか。腹立たしい限りです。

次に〔問二〕に關してですが、東南アジア諸国や韓国との賠償問題は、全て解決済みです。以下にその資料をあげてみます。

サンフランシスコ講和条約では、第十四条に「日本国は、戦争中に生じさせた損害及び苦痛に対して連合国に賠償を支払ふべきこと。」と書いてあります。同じ敗戦国のイタリアに對しては賠償総額を明記した条約を結びましたが、日本は賠償能力がないとされ、そのかは

りに役務の提供になりました。

国名	賠償協定締結年	内容
ビルマ	一九五四（昭和二九）	十年間にわたつて年平均二千万ドルづつ、二億ドル相当の役務と生産物を供与。経済協力として五千万ドルに相当する日本人の役務と十年間にわたつて日本の生産物を日本とビルマの共同事業に使用。
フィリピン	一九五六（昭和三一）	二十年間に五億五千万ドル支払。経済開発借款（二億五千万ドル）に関する交換公文など。
インドネシア	一九五八（昭和二三）	十二年間に二億二千万ドルの賠償と四億ドルの経済開発借款供与
南ベトナム	一九五九（昭和三四）	五年間に三千九百万ドルの賠償と三年間に七五〇万ドルの借款供与

ラオス	一九五八（昭和三三）	賠償請求権放棄に対し、二一年間に十億円の経済・技術協力
カンボジア	一九五九（昭和三四）	賠償請求権放棄に対し、三年間に十五億円の資材・役務を無償供与

これらの賠償金などは、我が国の外貨準備高が極めて少なかった時代に苦勞して支払つたものです。

〔問三〕については、次の項目でお話しようと思ひます。

#### 四 日韓問題を考へる

日本はサンフランシスコ講和条約で朝鮮の独立を承認し、国と国民の間および国民と国民の間の財産・債権・請求権については、特別な協定を結んで処理することになりました。昭和二十六年秋にアメリカの斡旋で行われた予備会談を皮切に、二十七年の第一回会談から四十年の妥結まで七回にわたつて会談が行はれました。資料として日韓基本条約（昭和四十年

二月)などをあげてみます。

「日韓基本条約」

第二条 千九百十年八月二十二日以前に大日本帝国と大韓帝国との間で締結されたすべての条約及び協定は、もはや無効であることが確認される。

「請求権並びに経済協力に関する協定」

第一条 日本は韓国に無償三億ドル、長期低利の借款二億ドルを十年間にわたって供与する。それ以外に日本から三億ドル以上の民間借款の供与を約束する。

「請求権並びに経済協力に関する協定」の「議事録」

協定第二条に関し、同一条にいう完全かつ最終的に解決されたこととなる両国及びその国民の財産、権利及び利益並びに両国及びその国民の間の請求権に関する問題には、日韓会談において韓国側から提出された「韓国の対日請求権要領」（いわゆる八項目）の範囲に属するすべての請求が含まれており、したがって、同対日請求要領に関しては、いかなる主張もなしえないことが確認された。

この資料で明らかやうに、日韓の補償問題は解決済みです。その証拠に、現在の韓国の孔魯明外相はその就任前には「外交的には解決済みで、補償を要求するなら、韓国政府にすべきである」といふ主旨の発言をしてゐます。韓国政府が得た五億ドルの請求権資金から、すでに三十八億ウォンが韓国政府から韓国人に支払はれてゐるといふ事実を知つて欲しいと思ひます。

## 五 眞の「生きる力」とは何か

現在、国際化社会といはれてゐますが、英語を話すことだけが重要ではありません。世界のいろいろな国々の歴史・伝統・文化を理解するとともに、主張すべきことは主張する、さういふ人間こそが国際化社会の中で必要な人材であります。例へば、ポツダム宣言を受諾して我が国は「無条件降伏」をした、と受け止められてゐますが、それは違ひます。ポツダム宣言の第五条には「我等の条件は左の如し」と書かれ、我が国は国体護持を条件に受諾したわけです。日本国憲法の第一条に「天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は主権の存する日本国民の総意に基く。」とありますが、この「総意」とは、「ます

らをかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」(三井甲之)に代表されるやうに、われわれの父祖が幾千年の永きにわたつて培つてきた日本人の心であり、現在生きてゐる者だけのものではありません。

冒頭に申しました、第十五期中教審第一次答申に書かれてゐる「生きる力」は大切なものではあります。更に我が国の文化・伝統への誇りを持つことこそ、真の「生きる力」になると思ひます。そのために、自国の歴史を正確に見直す努力をしようではありませんか。



講義

激動する東アジア情勢と日本

——日本国憲法を再点検する——

日本政策研究センター所長

伊藤 哲夫



飛行機から出ない河野外相と「従軍慰安婦」？

「日米安保共同宣言」と朝鮮半島有事

二十一世紀に経済大国化した中国は軍事大国

尖閣諸島問題

「中国はナシヨナリズムの仮面を被った軍国主義」

日本人の一面的な戦争認識

勇気を出さう、「日本国憲法」で国は守れない

〈質疑応答〉

飛行機から出ない河野外相と“従軍慰安婦”？

日本は自由な国だといひます。しかし、日本人の言論は本当に自由なのでせうか。少し具體的な例で考へてみたいと思ひます。

二年ほど前に河野外務大臣が、ASEANの会議で東南アジアへ行きました。ところが、飛行機が台湾の上空で台風に遭遇した。これは危ないといふことで、台北に緊急着陸しました。それは当然のことです。そこで三十分間、河野外務大臣は嵐が過ぎ去るのを待つたわけですが、この時台北空港に着陸した飛行機から一步も外へ出なかつた。なぜなら日本はこの台湾と正式な国交を持つてゐない。なぜ持つてゐないかといふと、これは、大陸の共産党政府と国交を持つときに「台湾との関係を切れ」と言はれて、切らざるを得なくなつて断交したからですね。

その台北に着陸して、そこで飛行機から出れば台湾に入国したことになる。さうすると、これは中国が問題にする事になるから飛行機の中でじつとしてゐた。まあ中国政府に氣をつかつたんでせうけれども、何でそんなかたくなな態度を採らなくちやいけないんだらうかと

言ふのが、まづ第一の疑問です。

台湾の方では、「日本の外務大臣がさういふ緊急事態でやつて来た、ぜひお休み下さい」と部屋を用意して何度も何度も誘ひかけてくれた。けれども、「いや私は飛行機の中にあらず」と応じなかつた。そこまではまだ良いんです。そして、その後、嵐が過ぎ去つて飛行機が発、バンコクでのASEANの会議に到着しました。中国の外務大臣と会見した時に、冒頭に河野外務大臣はかう言つたんです。「私は、飛行機でたまたま台風に出会ひまして、そして台湾に着陸しましたけれども、一步も飛行機からは出ませんでした。何とぞご理解のほどを」と。これは独立国の外務大臣の姿なんだらうか。なんでこんなに過剰に中国に気を使はなくちやいけないのかといふことなのです。気を使ふといふよりもまさに従属してゐる感じがすね。

これと同じことは、「従軍慰安婦」と俗に言はれる問題にもあります。わが日本は、あの韓国の女性を奴隷狩りの様に強制連行して慰安婦にしたなんていふやうな例は一つもないんです。ところが、私の友人のある国会議員がこの問題が起こつた時に、政府の担当官を呼びまして「すこし、この従軍慰安婦について説明してほしい、外国はこの従軍慰安婦問題を性的奴隷、セックスレイプといふ様な言葉で呼んでゐるが、本当にそのやうな事実があつたの



か。とりわけ、嫌がる女性を強制的に連行して慰安婦にしたなんていふケースはあつたのか」と聞いたわけなんです。そして、急にこの政府の担当官がオドオドし始め、そして身を乗り出すやうにして声をひそめると、本当にヒソヒソ話をするやうに、「先生、実は強制連行といふ事実は一件もないんです」と、かう言つたといふんですね。

今度はこの国会議員のほうがびつくりしてしまひました。「なんで、あなたそんなに声をひそめて言はななくちやいけないんだ」と。「いえ、かういふことは大声で言ふといろいろ外国との——、外国とは韓国です——、外交関係上問題がございまして」。「問題があるといつても事実は事実ぢやないか」。「いや、事実は実なんでございますけれども、しかし、強制連行的な事があつたと当時の河野官房長官が、さういふことで

で発表して謝罪してをりますので、われわれはその立場を逸脱するわけには参らないのです」と、こんなやりとになつた。

事実を事実と言へない、さういふ問題がある。政府の担当官は、韓国まで出掛けて行つて、「私は従軍慰安婦だつた」と言ふ女性に聴き取り調査までしてゐる。「あなたは本当に強制連行されたんですか」と。さういふ人たちに何人にも会つて、あるいは過去の資料を全部ひつくり返して調べたけれども、そんなケースは一つもなかつたといふことが調査してわかつてゐるわけです。その人が声をひそめて、「実は何もないんです、だけど内密に」と、これがほんとに自由な国の自由な言論なんでせうか。

### 「日米安保共同宣言」と朝鮮半島有事

さて、以上のやうなわが国の不明朗な現状を念頭において、今日わが国が直面してゐる問題を考へて見たいと思ひます。

まづ最初に、今年四月の日米安保共同宣言と朝鮮半島有事といふ問題です。ご存じのやうに北朝鮮は今や大変な末期的な状況に陥つてをります。

この四月に北朝鮮の金光鎮といふ、この方は元帥の次の位、次帥と言ふんですけれども、この北朝鮮の軍幹部が、「戦争が起きるとか起きないとかが問題である時代はもう終はつた。問題なのは、戦争がいつ起きるかだ」と公言しまして、三十八度線を境にして幅二キロづつ合計四キロの非武装地帯が作られてゐる、その非武装地帯の中に兵隊を入れて来まして、そして、重火器で武装して演習を繰り返したわけでありませう。

さういふ動きと同時に、北朝鮮の内部では今、大変な食糧不足が起こつてゐる。最近の報道で知つた範圍だけでも、いはゆる平壤周辺の住民が食物が無くなつて数万人が——移動の自由が禁止されてゐるにも拘らず——平壤に流れ込んで来た。平壤に行けば食べ物にありつけるのではないかと、腹を空かせた住民が首都に流れ込んで来たといふのです。また、百名以上の北朝鮮軍人が中国へ越境して武器を中国国境警備隊に渡したといふ。「この武器を差し上げますから私たちに食べ物下さい」と。

私が最近専門家から直接聞いた話によりますと、北朝鮮と満州の国境の満州側には——今、中国では「東北」と言ひますが、——ここには二百万人ぐらゐの朝鮮族が住んでをります。北朝鮮にゐる人たちとこの人たちには当然縁戚関係の人もゐるわけです。この遠い縁戚を頼りに北朝鮮からどんどん今、難民が出て来てゐる。しかし、ここは外国の政府関係

者や報道関係者にとつて立ち入り禁止区域なので、実際のところよくわからないんです。ところがそこからたされた情報によりますと、すでに万単位の難民が北朝鮮から中国の朝鮮族の住んでゐる居住区に流れ込んで来てゐるらしいといふ。そして、そのうちの約八割は男性といふんです。

その男性といふのも、さらにもう大部分が若者。若者といふのは、ご存じのやうに兵士です。北朝鮮を今、一番支へてゐなくてはならないのがこの兵士です。この兵士が真先になつて逃げ始めてゐる。これはあまり新聞などに報じられてゐないけれども大変な事態だらうと思ふのです。

そして、さういふ難民がもたらす情報によると、飢餓によつて北朝鮮の人たちはどんどん死んでゐる。とりわけ悲惨なのはお母さんが死ぬことなだけです。北朝鮮といふ国は儒教道徳が今なほ厳しく生きてゐます。少ない食べ物が手に入る。もう配給も殆ど無いんださうです。自分でどこかへ行つて見つけて来るしかない。さういふ人たちが食べ物にありつく。その食べ物を買つてお父さんに食べてもらふ。そして、お父さんが食べて残つたものを子供にやる。さうすると子供が食べ終る頃にはもう殆ど残つてゐない。さういふ事を繰り返してゐるうちに、お母さんが栄養失調にかかつて死んでいく。これはもう聞くだに悲惨な状況でこ

ございますが、かういふ現実が今、北朝鮮にあるといふことなんです。

しかしながら、北朝鮮の指導者がやつてゐることは、即刻あの北朝鮮といふ国を開いて、西側からいろいろな援助を貰つてとにかく国民を救ふ、さういふ開放政策を取るのかといふと、さういふわけではありません。たしかに、一方では「食糧不足だから食料を援助してくれ」と言ふのです。ところが一方では、「そんな食料援助なんて頼んだ覚えはない。われわれは乞食ではない。でも、どうしてもわれわれに食料を献上したいと言ふなら受けてやらんこともない」などと、かういふことを言ふわけです。

これは明らかに国家意思が分裂してしまつてゐるといふ他はない。つまり、北朝鮮国内には路線の対立があるといふことなんです。これが今、激しい権力闘争を繰り広げてゐると専門家などは見るわけです。この対立が果たしてどうなるか。軍部の強硬派が優位を占めれば、ジリ貧になる前にイチかバチかの戦争といふこともあり得る。

かういふ問題になつてきたときに、日本はどうするんだといふのが朝鮮半島有事の問題なんです。今年の四月にクリントン大統領が日本へやつてきて、橋本首相と「日米安保共同宣言」といふのを発表しました。この時間問題になつたのが、その時、日本はいつたい何をするのか、何ができるのかといふ問題でありました。

なぜなら、朝鮮半島で起こつた事態といふのはこれは日本に直接響いてきます。例へば北朝鮮は日本に届くミサイルをすでに開発してゐます。このミサイルを日本にある米軍基地めがけて撃つて来るかも知れない。あるいは北朝鮮から武装した難民がやつて来るかも知れない。

さういふことで、日本がなさねばならないことは、沢山あるわけですが、それをどうすべきなのか。一つは、これは誰もが思ひ出す事ですが今、韓国に約二万人の日本人がゐます。この日本人をどうやつて逃げ出させるのか、救出するのかといふ問題です。それから、多分大量の難民が出て来るだらう。この難民を日本側はどうやつて収容するのか。もちろん、みんながおとなしくやつて来るとは限らない、武器を持つてやつて来るかも知れない。その場合どうするか。三番目に、そこで朝鮮半島に米軍が出撃して行く、日本の基地からも出撃して行きます。この米軍に対して「勝手におやんなさい」といふわけにいかないでせう。その場合の支援として何が出来るんだらうか。

そして四番目に、この日本の国内の警備をいかに強化するか、日本をどうやつて守るかといふ事です。この四つが課題となつて出て来る。

ところが、どれを考へても、ご存知の憲法論議が出てくるわけです。全部憲法違反だとい

ふ話になつてしまふ。これはどうにもならないわが国の宿題みたいなものですが、ともかく橋本総理はアメリカに「日本としてはこの朝鮮半島有事にはそれなりの事をします」と約束する他なかつた。そして「その場合、何が出来るかといふ事をこれから研究しませう」と約束したわけです。けれども、これまでの経緯からいへば研究する前から殆どが憲法違反だなんていふことになることはわかつてゐる。そこで橋本総理は、まづ邦人救出、これなら憲法違反だとかなんとか言つてもある程度はクリアできるんぢやないか、人道的な問題でもあるし、といふ事で邦人救出の問題から検討することにした。

ところが皆さん驚くなかれ、この問題だけでも大変なんですね。全部憲法に触れて来る。今、自衛隊は政府専用機といふのを持つてゐます。もちろん他にいろんな輸送機があります。これをソウルへ飛ばします。そして二万人近くの日本人に有事の際ソウルに集まつて貰つて乗せて帰つて来る。さういふことを自衛隊がやれるやうにといふことで行なはれた自衛隊法の改正なんです、その際「さういふ所へ自衛隊機が飛んで行くことは戦争に巻き込まれることになつて憲法違反になる」。かういふことを社会党が言つたのです。そこで「ぢやあ」といふことで、仕方がないから妥協して、「現地の安全が確保された場合に限り」といふ言葉を入れることになつた。

安全だつたら救出に行く必要もないんです。危険だから行くのでせう。当然、救出といふことになれば、米軍とも韓国軍とも連携した共同作戦を展開する他はない。

それでは、さういふアメリカ軍と韓国軍と自衛隊が救出大作戦をやるための検討に入るといふことについてはどうなんだと。さうするとこれは、「三軍共同作戦でありますから、これは集団的自衛権の行使につながるから出来ません」といふことになるんです。もう一步も進まないのです。

「飛行機でだめなら船で行かうぢやないか」と。商船を借り上げて釜山なら釜山へ迎へに行く。しかし、そんな危険なところに民間の商船は行きませんよ。では自衛艦で迎へに行くのか。ところが社会党は「自衛艦は武器を搭載してゐる。軍艦が韓国の国内に入つて行くことはこれは海外派兵になる」と、かう言ふんですね。「だから、自衛艦が救出に行くことは現段階では出来ない。憲法違反である」と言ふことになる。

## 二十一世紀に経済大国化した中国は軍事大国

さて、わが国が現在直面する二番目の問題に入りたいと思ひます。二十一世紀に入ります

ともつと大きな問題がわれわれの前にたちだかります。それは、中国といふ国の存在であります。皆様方、どう思つてをられるか知りませんが、中国は今、大変な勢ひで経済発展してゐる。しかし、この経済発展をただ素晴らしいことだと諸手を挙げて歓迎してゐるだけでよいのかといふ問題があるわけです。

この中国は二十一世紀になると、日本を抜き、アメリカをもGNPで抜いて、世界最大の経済大国になるであらうと、さういふ予測がいろいろと世界のシンクタンクで行はれてゐる。しかし、それと同時に忘れてならないことは、この経済大国は軍事大国にもなるといふことなのです。

今年の四月にロシアのエリツイン大統領が中国へ行きました。江沢民主席と首脳会談をやりました、その後、協定を結びました。その協定が結ばれた後、江沢民主席がかういふ趣旨のことを言つてゐます。いはゆるシベリアの中露国境、ここで両軍は絶対にこれから戦争を起さないと約束をした。「そこで北方の安全が保たれることになつたことによつて、われわれはこれから南に全力を集中することができる」と。あるいは「北方の脅威が取り除かれた今、われわれはアジア・太平洋に海権を確立する時を迎へた」と。

海権といふのは覇権です。「いよいよ海に出て行くことができる」、かう言ふんです。そし

て、さういふ考へ方の背景にあるものとして、今、盛んに強調され始めてゐるのが、「地理的国境から戦略的国境へ」といふ発想です。今までは地理的な国境を守つてゐればすましました。しかしこれからは、中国にとつての「戦略的国境」を軍事力によつて防衛しなくてはならないといふのです。それがアジア・太平洋に海権を確立するといふ事の意味であると。

では「戦略的国境」といふのは何かといふと、具体的に言ひますと、大陸棚の権利、あるいはシーレーンといったものです。あるいはもつと言ひますと、宇宙です。宇宙に対して中国の覇権といふものを確立しなければならぬ。それが核ミサイルの核実験であつたり、といふ事になる訳です。「これを守つてこそ初めて中国の二十一世紀の経済発展は成り立つんだ」と、かういふ事を繰り返し繰り返し公式な場所で表明してをります。

そして、「国家の安全は経済の安全によつて保たれる」「中国海軍は経済外交の使者である」といふわけです。われわれ日本人は経済といふと平和の行為だといふふうに思ひます。「経済、経済と言つてゐる限りは大丈夫だ」と。ところがさうではなくて、中国の場合は経済と軍事が一体なのです。「中国海軍はその経済外交の使者である。そして、南沙諸島は不可欠の民族の生存空間である」と。

なぜ、さういふ事になつたかと言ひますと、この南沙諸島には石油が出るんです。海底油

田があつて、クウェートなみの石油が出ると言はれてゐます。

中国は今までは、大陸から石油が出てゐました。ところがこれがだんだん枯渇し始めて、二年ほど前から石油輸入国に転じてゐます。イランやイラクにミサイルを売り込んで、そして、中国の仲間に引き入れて優先的に石油を売つてもらふ。その石油を運んで来るときにインド洋を通らなくては行けない。その時、マラッカ海峡を守るにはどうしたら良いか。今、中国が全力を挙げてゐるのは空母を造る事だといひます。

さういふ中で問題になつてゐるのが例の南沙諸島の問題ですが、問題はそれだけではない。もう一つはご存じの尖閣諸島です。

日本の領土である尖閣諸島の下にはベルシャ湾に匹敵する石油埋蔵量があると国連の機関が発表してゐます。そこで中国は、「この尖閣諸島はわが国の固有の領土である。日本はそれを勝手に占領してゐるんだ」と、かういふ事を昭和四六年からいひ始めて平成四年には領海法といふ法律を作り、「あそこはわが領土である」と明記してゐる。今、辛うじてわが国はそこを実効支配してゐますが。

## 尖閣諸島問題

この尖閣諸島であります、最近、朝日新聞に『ニューヨークタイムス』の東京支局長であるニコラス・クリストフさん、この人は数年前は北京支局長をした有名な記者であります、その人が朝日新聞に記事を書きまして、「私は五年間、天安門事件を含めて中国の政治をずうつと見てきた。その私の観念から言ふのだけでも、中国人ほど日本人に敵対感を持つてゐる民族はゐない。にも拘らず、日本人はその中国人の日本への反感を全く知らない。これは私にとつてシヨックである」と、かう書きまして「恨」といふ漢字、中国語では「ヘン」といふふうに通音するんださうですが、この「ヘン」といふ漢字をを説明するとき、これは、「われわれ中国人が日本人に抱いてゐるやうな感情である」と説明してゐるといふことを紹介してをりました。

そしてさらに、彼はその事実を踏まへて、「私は、中国は日本から尖閣列島を必ず奪ふと信じてゐる。なぜなら、中国の指導者が合理的に判断すれば、この尖閣列島を日本から取ることほど簡単で、なほかつ中国人民の支持を得られる事はないからだ。台湾を武力で解放す

るなどと言つたつて出来つこない。しかし、尖閣列島を取るのには赤子の手を捻るみたいに限られる。日本は多分反撃できないだらう。そんなことは中国人みんなよく知つてゐる。そして、こんな簡単にこんなに中国人民の心をまとめることのできるテーマはないんだ。だから私は、江沢民は尖閣列島を取るだらうと信じてゐる」と、かういふふうには朝日新聞に書いてゐるわけです。

このクリストフ氏の分析はともあれ、中国はこの尖閣列島に対して最近しきりに発言してをります。そして、昨年の中頃でございませうけれども、初めてスホイ27と言ふ中国の最新鋭の戦闘機ですが、これが尖閣列島上空へ飛んで来ました。沖縄の那覇基地から早速航空自衛隊のスクランブルが飛び立つた。F4ファントムといふ戦闘機です。そして尖閣列島の上空へ行きました、このスホイ27に対して、「ここはわれわれの領土である。即刻退去しなさい」とやつたわけです。この時、中国のスホイ27はなぜかおとなしく引き下がつて帰つて行つた。帰つて行つた後、この自衛隊のパイロットは、もうドツと疲れが出たといふか、まあホツとしたといふか、「良かった」と思つたといふのです。なぜかと言ふと、F4ファントムの油はもうそこで切れかかつてをつた。F4ファントムといふ飛行機は古い飛行機ですが、これの航続距離からいくと、尖閣列島上空にいつたらもうそこに長くは滞在出来ない、すぐに帰

つて来なかつたら那覇基地に帰れない、さういふ航続距離しかないといふんですね。

それで出掛けて行つて、そのところでスホイ27につかまつてしまつたら、このF4ファントムは帰る前に海の中にポツチャンと落ちなくちやいけない。「ああ直ぐ帰つてくれてよかつた」といふわけで、大急ぎで反転してF4ファントムは那覇基地に帰つて来たといふのです。尖閣列島を防衛しなくてはならないF4ファントムが、なんでそんな状況にあるのか。当然、かういふ時、本当はどうするかといふと、空中給油といふのをやるわけです。かうした戦闘機が帰つて来るときに、空中給油機が出迎へに行つて、そこで油を空中で差し込むわけです。そして帰つて来るわけです。これはもう戦争のときはなんでもさうなんです。みんな現場で目一杯戦ふわけです。「もうこれだけで、あんたは油が無くなつから帰つていいよ」なんて言ふはずはないんですから。目一杯戦はなくしてはならない。もうガス欠寸前です。そのときにこつちから空中給油機が出掛けて行つて油を給油するから帰れるわけです。この空中給油といふことを当然どこの軍隊でもやつてゐるわけです。

この空中給油機を導入しようとしたら、社会党が反対して、「それは、日本が海外へ出掛けて行つて攻撃的軍事力になる恐れがあるから、さういふ事は認められない」と。アメリカから買った戦闘機には必ず空中給油の装置が付いてゐる。この装置をわざわざ「取り外せ」

と。いいですか皆さん、「付いてゐるものをそのままにしたら使ふかもしれないから取り外しなさい」といつて取り外してゐるのが自衛隊の現状なのです。かういふ事実を一つ一つ見たときに、はたしてこの二十一世紀に日本は、かういふ大国中国——この中国には明確な一つの国家意思がございます——これに対抗出来るのだらうかと私は思ふわけなんです。

「中国はナシヨナリズムの仮面を被つた軍国主義」

もう一つ皆様方に強調しておきたいのは、この中国といふ国が今、明らかに変はりつつある。それは鄧小平路線といふものが敷かれた頃は、四つの現代化といふことで、とりわけ経済第一主義、「経済、経済、ともかく経済発展すればいいんだ」といふことでやつて来た。ところが、経済発展してみんなが豊かになればなるほど、共産党の影響力はどんどん落ちていくわけです。そこで、この人たちが天安門事件以後考へ初めたのは、「このまま経済発展一辺倒でやつて行つたらいづれ中国の社会主義政権は崩壊してしまふ。これだけは絶対阻止しなくてはならない」といふことでありました。

だとすれば、頼みの綱は人民解放軍です。人民解放軍の力こそが、あるいは人民解放軍の

統率力こそが中国の今の体制を守れる。そこで始めたのが、この人民解放軍と一体となつて中国の統一を守らうといふ現指導部の政策であります。

それをわれわれは、「江沢民路線」と呼ぶわけでございますけれども、とりわけ今年になつて、「中国軍兵士、あるいは共産党員は政治を学べ。今まで経済、経済と言つてゐなければ、政治こそが大切なんだ。政治を学びなさい。政治を学ぶといふことは、要するに社会主義イデオロギーをもう一度勉強し直すことだ」と、かういひ始めたわけです。いかにしたらこの中国をバラバラにしないで統一する事が出来るか、それが「政治を学ぶ」といふこと、「講政治」といふことです。

かういふ軍主導の体制を作らうとする中で大切なのが、いはゆる「海権を確立する」といふ言葉をさきほど言ひましたけれども、そこにもあるやうなナショナリズムなのです。「わが中華民族は、アジア全体を支配してゐた栄光ある歴史を持つてゐるのだ。あの清帝国を見る。帝国の時代、東アジアを全部をわが領土下に置いてをつたぢやないか、台湾だつてわれわれの不可分の領土であつた。琉球列島——沖縄もわれわれの領土であつた」と、かう言つてゐるのです。これを東京外語大学の学長をしてゐる中島嶺雄さんは、「ナショナリズムの仮面を被つた軍国主義」と、かういふ表現をしてをりますけれども、今の中国の政治といふ

ものはかういふ流れの上を走つてゐる。

だとすれば、もしこれが台湾に適用されたらどうなるんだらうか。三月の台湾総統の直接選挙の際は、アメリカの空母二隻が出て行つて中国は残念ながら引き下がらざるを得なかつた。これは大変な屈辱です、中国にとつては。当然彼らは何を考へるかといへば臥薪嘗胆、いつの日かこの屈辱を晴らしてみせるといふことです。「この所は一つ我慢してこの屈辱を腹に収め、いつの日か必ずアメリカの鼻を明かしてやらう」と考へてゐるに違ひない。スホイ27といふ最新鋭の戦闘機をロシアから買つて、三百機の体制を整へると、これはアメリカの空母はもう近づけないといひます。いかにアメリカの軍事力が強いといへども、アメリカの空母が搭載してゐる機数では近づけないんです。さうすると、中国が軍事力で圧倒的に優位になる。といふことは、台湾をある意味で支配することが出来る時代がやつて来るかもしれない。かうなつたらどうなるかといふことなんです。

日本の今日の繁栄は、かうした極東の安全と不可分です。この安全がそこなはれた時に日本はどうなるのか。これまで、かういふわが国の安穩とした平和な状況が保たれてをつたのは、これはアメリカといふ国がこの地域の安全を守つてゐてくれたからです。憲法があつたからでもなんでもないわけです。しかし、このアメリカが、将来的にこのアジアからどんど

ん下がつて行くであらうといふことは間違ひない。こんな十万人以上の兵隊をアジアに張り付けて置くなんていふ経済力は、もうアメリカにはありません。すでにアメリカの国内では「そんな兵隊は引け」といふ声がどんどん上がつてゐるわけです。

### 日本人の一面的な戦争認識

それではどうして、こんな中にあつても、まともな言論がわが国では盛り上つてこないの  
でせうか。私はその原因になつてをるのは、日本人のまさに度外れた「原罪」意識だと思ひ  
ます。要するに、「過去の戦争は日本が一方的に侵略し、一方的にあの大陸の人たちに迷惑  
をかけたんだ」と、かういふ戦争観がマスコミ界、教育界を蹂躪してゐるといふことです。

その結果、戦後の日本には、「日本人が戦争の事を考へなければ世界は平和になる」といふ、  
かういふ驚くべき国際感覚が充満することになりました。さうでせう。「とにかく日本だけ  
が戦争に関はる事をしなければいいんだ」と。だからPKOと言はれても、「ピストルを持  
つて行くのもそれはけしからん」とか、「武器を使用と武力の行使は違ふのだ」とか、「隊長  
が「撃て」と命令したら憲法違反だ」とか、さういふ話が出てくるわけです。「要するに、

さういふ事を日本がやるといふことは世界の平和を乱すことなんだ」と。逆に日本がその武器を使ふ事が世界の平和のためになるんだなんて事は考へても見ない。こんな知的な怠慢があるのでせうか、皆さん。日本が何もしなければ、世界が平和である。国際政治でそんなものでせうか。この事を、皆さんにぜひ考へていただきたい。こんな馬鹿な議論はないですよ。ところが、皆がいろいろな屁理屈を言つて、そのうちにその屁理屈の自家中毒に罹かつてしまつて何も見えなくなつてしまつてゐる。王様は裸であるにも拘らず、「王様、裸だよ」と言ふ素直な心が無くなつてしまつてゐる。「さういふ事を言ふと周囲から危険だと言はれないか」とか。

さういふ中で、「優しさで国を作りませう」などといふ声も最近はお始めてゐる。最近、鳩山由紀夫さんが友情だの愛だのなんていふことを言つてゐますけれども、村山前首相も「人に優しい国づくり」なんていふことを言つてゐました。なんでかう日本人はベタベタベタベタと優しさだとか友情だとかといふ言葉を弄びたがるんでせうか。国際政治といふものをつかり見る事もしないで、言葉でゴマかそうとする。大切なのは、はつきりとした自分の主張も持つことなんぢやないでせうか。

勇気を出さう、「日本国憲法」で国は守れない

オウム真理教の事件が昨年起こりました。あの時、麻原彰晃が何か予言のやうに「新宿駅で何月何日に大変な事態が起こる」といふ様なことを言つたといふので、当日は新宿駅周辺がガラガラになつたといふ事がありました。

その中で、当日、要所要所を機動隊員が守つてみました。改札口では駅員が真剣な表情で自分の持ち場を守つてみました。私はそのとき非常に感動したんですね。かういふ人たちが悪に向かつて立ち向かふ、或いは自分の使命を果たすといふ、勇気のあるかういふ人たちが行動してくれる事によつて、この日本の安全は保たれてゐるんだな、そのお蔭で、われわれはかういふ日でも職場へ行けるんだな、と。私はこの機動隊の方々に対して合掌したいやうな気持ちになりました。

「ありがたう、あなた方が勇気を持つてその職分を守つてくれる事によつて、この日本の平穏は保たれてゐる。平和なこの日本の安全は優しさだけでは絶対に守られないんだ。かうした勇気ある行動によつて守られてゐるんだな」といふ事を思ひました。さういふ勇気ある行

動、それを支へるものは勇氣ある言論であります。勇氣ある言論を支へるのは一人一人の決意であります。決して間違つた事を「正しい」なんていふことは言はない。をかしいと思つたら「それはをかしい」と発言する。周りの世の中の流れがどうあらうとも「大東亜戦争で日本が一方的に悪い事をした」といはれたら、「それはをかしいよ、どう考へても」と反論する。さういふ事を断乎発言する勇氣を持つ、さういふものの積み重ねが、私は、あの自衛隊員の勇氣や警察官の勇氣になり、日本の国の平和になつてゐるんだと思ふのであります。一人一人がこの日本の国をこれからも保つ為に勇氣を持たうではありませんか。その勇氣といふのは、要するに正しいことを「正しい」と発言するといふ第一歩から始まるんぢやないだらうか。そんな氣がしてならない訳でございます。国家は紙に書かれただけの憲法では守れないのです。

### 質疑応答

〔問〕湾岸戦争が起こつたときに、日本は何も出来なかつた。「お金ばつかり出して、實際、動かないぢやないですか」と、もう散々日本のことをアメリカは悪く言ひました。しかし、

GHQによる占領統治の中で、日本人にそのやうな精神を抱かさせた大きな原因の一つである、東京裁判をやつて、自分たちに都合のいい観念を日本人に植え付けたのは君らではないかと、ものすごく僕は頭にきたんですよ。どこまで責任取る気があるんだと。この僕が質問したいのは、われわれは今、アメリカにどのやうなことを訴へていけばよいのかといふことです。

〔答〕「このやうな日本に誰がした。それはアメリカぢやないか」と、かう言ひたいんだといふ事ですが、お気持ちはおわかりますけどね、しかし、もうさういふ占領体制が終はつて四十数年たつわけです。で、確かに今の日本のさういふ事の根本に憲法がありますね。これは皆さん方、この事について初めて聞く方があるかもしれませんが、日本は非武装といふ名の武装解除憲法を押し付けられたわけです。しかし、だとすれば独立した後この憲法を変へればよかつたんです。日本人は変はつていかなかちやならなかつたんですね。しかし、この押し付け憲法が、今度は日本人の意志によつて、「押しいただき憲法」になつてしまつたんですよ。

だけど、なぜ「押しいただき」きたのか。これはまさに日本人の自縄自縛ですね。だか

ら、今日の状況をアメリカのせむだと言ふのは、これは日本人としての責任の放棄だと思ひます。私は「憲法を押し付けられた」といふ事実をはつきりと皆さんに知つていただきたいと思ふ。けれども反米になるのは間違ひだと思ひます。

もう独立して何十年たつんですか。

〔問〕やつぱり今の憲法といふのは平和憲法なわけでせう。それは日本人がいつぺんに受け入れたわけでせう。平和憲法時代の理念といふのもそれなりに正しい理念だと思ふんですね。結局、なんかすべて矛盾してゐる様な気がするんです。だから、やはり憲法を変へればいゝんでせうか。

〔答〕はい、今のご質問、非常に大切なご質問だと思ふのですが、これに完璧にお答へするには少し時間が入ります。

今の憲法を「平和憲法」と言つてをりますが、アメリカはこの憲法を与へる時に、誰も「平和憲法」なんて言つてゐないですね。なぜ憲法の第九条が生まれたか、その背景をアメリカが出してゐる公式文書でたどれば、結論は「武装解除」憲法なんです。日本を武装解除しま

したね、戦争が終はつた後、その武装解除を永久に固定化するために第九条があつたんです。あれを「平和憲法」と呼び替へた時から全ての誤りが始まつてゐる。

言葉といふのは大切なものとして、言葉が独り歩きを始めるんですよ。あれは何も「平和憲法」でもなんでもない。本質は「武装解除憲法」なんです。日本を武装解除する、それを永久化する、それが目的だつた訳です。「武装解除しておとなしくしてゐなさい、何もになりでじつとしてゐなさい、世界の片隅で身を縮めてゐなさい。さうすれば世界が平和になりますよ」といふのが第九条の根底にある思想なんです。

《問》先生のお話をお聞きしながら、特に私が非常に興味を持ちましたのが、その中国に対する認識の甘さといふ所だつたんですけれども、私は大学で環境問題についてかなり勉強してをるんですけれども、特に中国の経済のこれから発展といふのは環境問題に大きくつながつてくると思ふんです。

といふのは、これだけの大きな国が、経済的にも発展し、その食糧事情が良くなつてきますと、世界の食糧のキャパシティを超えてしまふと思ふのです。これからの具体的な中国の発展とともに、その発展に対して日本はどう向き合つて行くのかといふところを先生にも

う少しせひ、お聞かせ願ひたいなといふふうに思つてをります。

〔答〕経済発展がこのまま——軍国主義といふ面に爆発しなくても——順調に進んでも中国が世界の大変な問題になるといふ事もわれわれは明確に見なくてはいけないと思ひます。とりわけ、先ほど石油の話をしましたけれども、中国はその石油よりも石炭をたくさん使つてゐるんです、石炭はどんどん出ますから。今の形でさらに経済発展を続けますと、この石炭を燃やす時に硫化硫黄といふのが出て、これが日本に偏西風で流れてきて酸性雨を降らせる。現に青森県辺りで算出すると、酸性濃度がオレンジジュースくらいの濃度の雨が降ることがあるんださうです。私、そのニュースを聞いてびつくりして、本当に我が目を疑つたんですが、さういふ酸性雨がすでにどんどん降り始めてゐる。この酸性雨といふのは皆さんご存じの様に、木を駄目にするんぢやないんです。土を駄目にするんです。だから苗木を植ゑ替へたつてもう土壤がやられてゐる。木を枯らす程度の濃度だつたらいいんです。土の中にその酸性が染み込んで土が駄目になつたらもうどんなに植ゑても駄目なんです。この緑なす日本列島がこの酸性雨でガタガタにされてしまつたら大変な事になるわけです。この問題一つとつても、中国へ行つて「中国が繁栄することは大変素晴らしい事です。われわれもその

中国の大市場で大いに商売させて貰つて稼がせていただきます」と、こんな単純な話ではない。

これに対して私は明確に「かうすればいい」といふ回答を今、持ち合はせてゐる訳ではございませんけれども、さういふ問題こそ今は皆さん方が本気になつて考へるべきテーマであるはずなんです。ところが、かういふ問題提起をしますと今の外交でいきますと中国政府は「友好的ではない」とものすごく反発してくるわけです。酸性雨の問題一つ明確に中国に対して問題提起できない、日本は。さういふ事を言ふと、「悪質な反中国的な宣伝である」と言ふやうな形で反発してくるわけです。

さういふ意味で、まづいろいろな対策があるでせうけれども、その根本に、現実をきちつと見据ゑるだけの主体性を持たなくちゃいけないと言ふことと、それを正確に相手に、「これは問題ですよ、勿論わが方にはわれわれなりにそれに対して対応する用意もありますよ」といふ形で話を持つていくだけの毅然とした姿勢といふものが絶対に必要だと思ひます。それをまづ確立しない事には問題は一步も進まないといふふうには思ふんですね。

と同時に、中国にはさういふ面でいろいろな問題があるんです。人権問題もさうです。ニコラス・クリストフさんといふ人についてはさき程紹介しましたが、その方の本(『新中国人』)

が最近出まして非常におもしろかった。

チベット人に話しかける、みんなが逃げる。初め何で逃げるのか分からなかった。ある青年を掴まへてインタビューをしようとしたら、その青年が合図をする。ふつと見上げたら、ビルの上から鉄砲を構へた人民解放軍の兵士の姿が見えた。「ああ、この人たちは話せないんだ」と思ったが、それでも彼はさらにあらゆるチャンスを求めて取材を続けるんですね。

そしてある暗いレストランといふか、溜まり場みたいな所があつて、そこに行つてそこに座つてゐる人に話を聞く。「ここでは全く自由はないんです。しかし、このやうに弾圧されてみんなが黙らされてゐるが、いつチベットが爆発するかもわかりません」と、かういふ事を言ふわけですね。話をしてゐるうちに人民解放軍のジープがやつて来て、懐中電灯にパーツと照らされる。その中をチベット人はパーツと逃げて行く。彼は一人取り残されて電灯を当てられるんですね。「これが中国の現実なんだ」といふことを悟つたといふ様な事を書いてるんですね。さういふ中国の一面といふのは、日本の新聞どれを見たつてどこにも出てゐないんです。

しかし、アメリカは一方では「中国と仲良くしませう。援助もしませう」といひます。と同時にもう一方では、この人権問題、「チベット問題を初め、新彊ウイグル自治区、内モン

ゴル、あるいは民主活動家、この人たちの自由はどうなつてゐるんですか」と言ふことを断乎として問題視し指摘するわけです。その中で本当の中国とアメリカの関係を築かうとしてゐる。日本の場合はさうぢやなくて、ただ「経済発展、経済発展」、そして相手が喜ぶ事だけをやって、ジャーナリストもさういふところだけしか取材しないで、別の違ふ中国の面を一向に見ようとしなない。しかし、そこをしつかりと見据ゑなかつたら、これから将来にわたる良好な日中関係なんて絶対に私はあり得ないと思ひます。その一つの例が先程ご質問に出された環境問題だと思ふんです。

《問》自分の歴史を自虐的に見るのがすごく間違つてゐると言ふことは納得したんですけども、もう過ぎ去つた時代のありのままを見るといふ事は果して可能なのかといふ事をお伺ひしたいんです。

《答》はい、いはゆるわれわれが体験してゐない時代を百パーセントそのまま再現することは不可能だと思ひます。しかし、我々はその時代を可能な限りやはり追体験して見る努力は、これはしなくてはならないと思ふんですね。それが後世の者の人間としての義務です。あの

大東亜戦争は要するに国難といふことだつたと思ひます、誰も戦争をしたかつたわけではない。しかし、国家の存立のために、戦はざるを得なかつた。だからこそ、「国民挙げてこの日本の国が直面してゐる国難に対して立ち向かうではないか」と団結できたんですね。あんなに国民が団結した歴史つていふのは、この日本の歴史のみならず世界の歴史にも無いと思ひます。最後の最後まで一人として脱落者はゐなかつたんですから。

この日本がいよいよ攻撃されるといふ時に、皆が考へたのは玉碎といふことだつた。「自分の命が救ははれたい」と言つた人間は誰もゐない。そして、天皇陛下のことをみんなが心配した。むろん、天皇陛下の方は「自分の身はどうなつても、国民を命を救ひたい」と思はれた。こんなに素晴らしい敗戦の仕方をした国は他にはないと私は思ひます。世界の各国の歴史と比べて見て下さい。こんな例は他にあるでせうか。それは国難に対してみんなが団結して立ち向かうといふ姿勢があつたからだと思ふんですね。

要するに、事の本質をにこりのない眼で素直に見ることです。「あれは『武装解除憲法』なんだ」と気付いた瞬間に真実が見えて来るんです。大東亜戦争もさうです。今のご概念の枠は間違つてゐるんです。



講義

明恵上人と現代の学問

神奈川県立百合丘高等学校校長

國武忠彦



学道は火を鑽るが如く

只信ノアルベキ也

耳を切る

島への手紙

あるべきやうわ

虚空の如くなる心

明恵上人と現代の学問

学道は火を鑽るが如く



まづ、次の絵図をご覧下さい。これは京都とがのを梅尾の高山寺にある「明恵上人樹上坐禅図」の

一部です。小林秀雄はこの絵が非常に好きで、「日本一だと言つてい、かも知れません」といつてゐます。

「一面に松林が描かれ、坊様が木の股の恰好なところへチヨコンと

乗つて坐禪を組んでゐる。珠數も香爐も木の枝にぶら下つてゐて、小鳥が飛びかひ、木鼠が遊んでゐる。まことに穏やかな美しい、又異様な精神力が奥の方に隠れてゐる様な繪であります。この繪は空想畫ではないので、上人の傳記を讀むと、ほゞこの通りの坊様であつた事がわかる。この繪は高山寺の裏山を描いたものだが、木の股でも木の空洞でも石の上でも、坐禪をするに恰好なところには、晝でも夜でも坐つてゐた坊様です。」

〔私の人生觀〕

明恵上人（一一七三—一二三三）は鎌倉時代の華嚴宗の僧です。通称は明恵。本名は高弁。紀伊の人で、八歳で母を失ひ、続いて父平重国が源頼朝と戦ひ戦死して孤児となり、翌年叔父の上覚を頼つて京都高雄の神護寺に入ります。

「十三歳の時に、心に思はく、今は早十三はやに成りぬ。既に年老いたり。死なん事近づきぬらん。老少不定ふちやうの習ひに、今まで生きたるこそ不思議なれ。古人も、学道は火を鑽きる（火を打ち出す）が如くなれとこそ云ふに、悠々として過ぐべきに非ずと、自ら鞭を打ちて、昼夜不退に道行（仏道）に励ます。或る時は後の山うしろの、木の空うつほに木の葉深く

積れる上に常に行きて座し、或る時は見解（人生観）おこる様、かゝる五蘊（肉体と精神）の身の有ればこそ、若干の煩ひ苦しきも有れ。帰寂（死ぬこと）したらんには如かずと思ひて、何なる狗狼（犬・おほかみ）・野干（きつね）にも食はれんと思ひ、三枚原（墓）へ行きて臥したるに、夜深けて犬共多く来りて、傍なる死人などを食ふ音してからめけども、我をば能々嗅ぎて見て、食ふもせずして、犬共帰りぬ。恐ろしさは限り無し。此の様を見るに、さては何に身を捨てんと思ふとも、定業（定まつてゐる運命）ならずは死すまじき事にて有りけりと知りて、其の後は思ひ止まりぬ」（『伝記』）

十三歳の若さで、「既に年老いたり」と嘆き、これまでの安穩な修行を悔ひて自殺を圖つてゐます。このことは、釈迦の「捨身飼虎」の話を想起させ、釈迦がかつて衆生に身命を捧げたといふ前生の修行を信じ、その釈迦に直接還ろうとする強い願望を想はせます。

それにしても十三歳で、「既に年老いたり」とは。明恵十三歳の年は、文治元年（一一八五）壇の浦で平家が滅亡した年です。入山してからの五年間は、平家が滅び源氏の世となり、親子・兄弟・友人が敵味方となつて戦ひ、戦火や餓死するものも多く、仏教でいふ正に「無常」の世であり、このやうな安穩な修行なら「生きても何かせん」といふ氣持を起こさせたので

せうか。「仏法修行とは、けきたなき心在るまじきなり。武士などは、けきたなき振舞ひしては、生きても何かせん」〔遺訓〕。明恵には武士の血が流れてをり、命を賭けた若き日の懺悔求道の激しい修行を偲ばせてくれます。

### 只信ノアルベキ也

二十三歳になると、神護寺を出て生れ故郷の紀州に向ひます。戒を破り名利を求めて行動する、当時の世俗的な僧たちから離れたかつたのでせうか。湯浅の白上の峯に草庵を立てて住み、遙か淡路島を望みながら、坐禅に寢食を忘れます。「或る時は仏像に向ひて、在世の昔を恋慕し、或る時は聖教に対して、説法の古をうらやむ」〔伝記〕。釈迦在世の昔をひたすら恋ひ慕ひ、釈迦が直接説法した昔をうらやましく思ひました。

「只信ノアルベキ也。誠まことこころアリテ行ハシシテキタラバ、ユガマヌ事ニテアラムズル也。

利根聡明ニシテ、心理ノホカニアソブトテ、信ナキ智ハ仏教ニ順ゼザルノミアラス、カヘリテ仏教ノアダトナル也。信心ヲ地ニシテノウヘニ、知恵モアルベキ也」〔却廢忘記〕



ただ釈迦を心から信ずることが大事である。そのことに誠（まごころ）をもつてひたすら努めてゆけば、心が歪んでしまふことにはならぬ。いかに能力に秀れてゐるからといって、釈迦の心を思ふことを外にして「心理ノホカニアソブ」ならば、その知識は仏法に應はしくないばかりか却つて仏法の害となるでせう。釈迦を信ずる心。その上にはじめて真の知恵も生まれるのである。

明恵の心は、釈迦の心が自分の心の中にいかに一杯になるかに努めた。現代の学問のやうに、「科学的」立場とか、「心理的」立場に立つて、観察し解釈する学問とはちがふ。いかに自分の心が釈迦の心に入りこむか。感応するかにあつた。

「ワレハ天竺ナドニ生うまれマシカバ、何事モセザラマシ。只五竺処々ノ御遺跡巡礼シテ、心ハユシテハ、如来ヲミタテマツル心地シテ、学問行モヨモセジトオボユ」〔却廢忘記〕

わたしがいन्दの国にも生まれをれば、きつと何事もしなかつたでせう。只、いन्दの五ヶ所にのこる釈迦の遺跡を巡礼して、そのことで心は楽しく、釈迦に直接お会いしてゐるかのやうな気持がして、学問などしなかつたでせう。

釈迦の体験を共にする。「如来ヲミタテマツル心持」がする。その喜びを体験するが明恵の「仏教」であり「学問」であつた。

「志を堅くして如来の跡を踏まん事を思ふ。然るに、眼をくじらば、聖教を見ざる歎きあり。鼻を切らば則ち、涕洟垂りて聖教を汚さん。手を切らば、印を結ばんに煩ひあらん。耳を切ると云ふとも、聞えざるに非ず。(略)志を堅くして、仏眼如来の御前にして、念誦の次ついでに、自ら剃刀を取りて右の耳を切る。余りて走り散る血、本尊并に仏具・聖教等に懸かる。其の血本所に未だ失せず」と云云。(「伝記」)

## 耳を切る

仏教は、戒律を守ることに厳しい宗教でした。釈迦もその点は厳しかつた。しかし、当時の僧たちは隠れては戒を破り、名利を求めて行動するのが普通となつてゐた。彼が修行した東大寺は、華嚴宗の最高の学府でありながら、僧たちは釈迦の心を忘れ、煩瑣な仏教哲学に陥り、政争に介入してゐた。そして、平家の焼打ちにあひ、灰燼に帰した。これは明恵には堪へられないことであつたと思ふ。

釈迦の歩んだ道を自分も体験する。聖教の通りに修行に専念する。聖教の通りに修行とは、釈迦の歩んだ道をそのままに自分も体験することであつた。釈迦に日夜接する。自分も釈迦と共通の体験をする。それは坐禪であり、悟りであつた。そして一日も早く釈迦にお目にかかりたい。釈迦が亡くなつてもう数百年も経過してゐる。実際に目のあたりにお姿を拝したこともなく、立派な説教も聴いてゐない。インド各地の釈迦の遺跡も参拝してゐない。何と悲しいことか。ただ食べては寝るだけで、時はいたずらに過ぎてゆく。完全な悟りもできないでゐる。あゝ、胸は張り裂けさうである。さうだ。もつともつと仏道への志の確乎とした

ものにしなければ。

二十四歳のとき、つひに釈迦を想ふ気持は辛抱しきれなくて、仏眼如来像の前で右の耳を切つた。凄まじい行為です。仏眼は一切の仏を生む母といはれた。明恵は、この仏母像を母のやうに慕ひ、「南無母御前く」「無耳法師の母御前也」と書き記してゐる。

「一、同廿五日、釈迦大師の御前に於いて無想観を修す。空中に文殊大聖現形す。金色にして、獅子王に坐す。其の長、一肘量許り也」。(「夢記」)

耳を切つた翌日、耳の痛いのもこらへて、泣く泣く『華嚴經』を誦へてみると、釈迦の大集会の方が現はれ、そこで説法する釈迦のご尊顔を直接拝見したやうな気持になつた。喜びになほも誦へ続けると、急に眼の前が光り輝いて、今度は空中に文殊菩薩が現はれた。前身金色に輝き獅子に乗つてゐらつしやる。文殊菩薩は、『華嚴經』において重要な方です。「歓喜勝計スベカラズ」と『却廢忘記』に記してゐます。この体験は明恵にとつて画期的なものとなつた。金色に輝く華麗なお姿を拝むことができた。その嬉しさは、たとへやうのないものであつたと、その喜びを語つてゐます。

島への手紙

「其の後何条の御事候哉。(略) 涙眼に浮かびて、昔見し月日遙かに隔たりぬれば、磯に遊び嶋に戯れし事を思ひ出されて忘れず、恋慕の心を催しながら、見参する期なく過ぎ候こそ、本意に非ず候へ。又、其に候ひし大桜こそ思ひ出されて、恋しう候へ。消息など遣りて、何事か有る候など申したき時も候へども、物いはね桜の許へ文やる物狂ひ有りなんどいはれぬべき事にて候へば、非分の世間(道理に合わぬ世間)の振舞ひに同ずる程に、思ひながらつゝみて候也。然れども所詮は物狂はしく思はん人は、友達になせそかし(友達にはしない)。(略) 傍の友人(隣にゐる島殿)の心を守らずは、衆生を摂護する心なきに似たり。凡そは咎にて咎ならぬ事にて候也。取り敢へず候。併ら後信を期し候。恐惶敬白(恐れつつしみ申し上げます)。

某月 日 高弁状す 嶋殿へ」

これは明恵が紀州の荊磨島に書いた手紙の一部である。島だけではない。ある時は、神護

寺の釈迦如来に、またある時は十六羅漢にも、「あまりにもこひしくこそおもひまゐらせ候へ」  
〔行状〕と書いてみます。

明恵にとつて、島であらうが石であらうが木であらうが区別はなかつた。島は仏の身体の一部であり、大切な国土である。物いはぬ桜の木にお手紙を差し上げて、世間の人に狂気だと思はれはしないかと気にしてゐたが、しかし狂気だと思ふやうな人はもう友達にはしない。「傍の友」、鳥殿の心を大切にしないやうでは、「衆生を撰護する」身でありながら、その「心なきに似たり」。

ここには、国土も草木も神仏も一体となり融け合つて生きてゐる。伊邪那岐命・伊邪那美命がこの日本の国土や山川草木の全てを生み給ふたといふ思想は、神も仏もなく互ひに融け合つてゐる。

「凡そ此の上人、蟻・螻・犬・烏・田夫・野人に至るまで、皆是、仏性を備へて甚深の法を行ずる者也、賤しみ思ふべからずとて、犬の臥したる傍にても馬・牛の前を過ぎ給ふとても、さるべき人に向へるが如く問訊し、腰を屈めなどしてぞ通り給ひける。(略) 貴賤違順、敢て差異なし。悪人猶隠れたる徳あり、況んや一善の人に於いてをや」〔伝

記)

明恵上人は、蟻やオケラ、犬や烏、百姓に至るまで、皆仏になりうる性質をもっており、奥深い仏法修行をしてゐる者だから、賤しんではいけないといつて、犬が寝てゐても、馬や牛の前を通り過ぎるときでも、立派な人に向かはれるやうに挨拶をし、腰をかがめるなどして通られた。貴いと賤いと、逆境順境に関係なく、悪人にすらも隠れた徳がある、まして一つの善を行つた人はなおさら徳があるとおつしやつた。

馬で想ひ出すのは、『徒然草』の次の有名な一節です。

「梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男をのこ、『あし、あし』といひければ、上人立ちどまりて、『あなたふとや、宿執開發の人かな。何字々と唱ふるぞや。如何なる人の御馬ぞ、あまりにたふとく覚ゆるは』と尋ね給ひければ、『府生殿ふしやうの御馬に候』と答へけり。『こはめでたき事かな。阿字本不生あしほんぶしやうにこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな』とて、感涙をのこはれけるとぞ」(『徒然草』)

上人が通りすぎると、河で馬を洗ふ男が「足、足」といふのが聞えた。しかし、上人には「阿字」と聞えた。梵字の第一にある一切諸法不生不滅を現はす「阿字」と聞えた。「何と尊いことか。善根功德の人とみえて阿字阿字と真言を唱へてゐる。どなたさまのお馬でせうか。あまりに尊く思はれるので」と尋ねると、「府生殿の御馬です」と答へた。府生とは下級役人の役職名だが、明恵には不生不滅の「不生」に聞へた。不生は、常住不滅の涅槃の境地をいふ。「これはめでたき事かな。阿字本不生とは。うれしい法縁にめぐりあへました」といつて、感涙を拭つたといふ。

この逸話には、明恵上人の面目躍如たるものがあります。そして、兼好法師のこの高僧へのたまらない愛情を窮はせませす。さてしかし、この深い信仰に生きた明恵上人は、夢みるようにこの現実を生きたのでせうか。そんなことはありません。

あるべきやうわ

「或る時、上人語りて曰く、我に一の明言あり。我は後生資たすからんとは申さず。只現世

に有るべき様にて有らんと申す也。聖教の中にも、行すべき様に行じ、振舞ふべき様に振舞へとこそ説き置かれたれ。現世には左之右之とてまかくてもあれ、後生計り資かれと説かれたる聖教は無きなり。仏も、戒を破りて我を見て何の益かあると説き給へり。仍りて、阿留あるべ辺へ幾夜きやうわ宇和と云ふ七字を持つべし」(「伝記」)

ある時、上人はおつしやつた。私に一つはつきり言へることがある。私は死後極楽について助かりたいとはいわぬ。たゞこの世にあるべき姿でありたい。釈迦の教へにも、修行すべきやうに修行し、振舞ふべきやうに振舞へと説かれてゐる。現世はどうであれ、死後ばかりは極楽に行けると説かれた經典はない。釈迦も、戒律を破つてゐながら私に助けを求めても何の益があるだらうと説いていらつしやる。だから、「あるべきやうわ」といふ七字を持つて生きるべきである。

明恵には、この世とあの世の区別はなかつた。この世とあの世は一続きの世界であつたと思ふ。だから現世を一生懸命に生きやうとする。どんなに苦しむ世の中であつても、この世は「厭離穢土」ではなく、「末法」の世でもない。この世を捨てて、たゞ安易にあの世で救はれたいといふ生き方は嫌ひだつた。「奇蹟」や「神秘」も嫌ひだつた。この現実のなかで、

それ／＼が自分の「あるべき姿」を求めて生きてゆく。そして、この世こそ浄土と思つて感謝して生きてゆく。そこに、理想の社会を実現するのが願ひだつたと思ふ。

「人間は阿留辺あるべきやうわ幾夜やうわ和と云ふ七文字を持つべきなり。僧は僧のあるべき様、俗は俗のあるべき様なり。乃至、帝王は帝王のあるべき様、臣下は臣下のあるべき様なり。此のあるべき様に背く故に、一切悪わるきなり。

我は後世ごせたすからんと云ふ者に非ず。たゞ現世に、先づあるべきやうにてあらんと云ふ者なり」。(「伝記」)

現実の中に身をおいて、自分の「あるべき姿」を求めて生きてゆく。私の「あるべき姿」とは何なのか。私はここで自問自答してしまふ。学生にとつて、学生の「あるべきやうわ」は何でせうか。父親は、父親としての「あるべきやうわ」は何でせうか。家族の「あるべきやうわ」は何だろう。

明恵にとつて、「あるべきやうわ」の基本は「まごころ」にあつた。ただあるがままに生活するのではなく、「まごころ」をこめて生きることだつた。「タッコ、ロノジツホウ(実法)

ニ実アルフルマヒハ、オノズカラ戒法ニ付合スベキ也」(「却魔忘記」)といつてゐるやうに、「まごころ」をこめた振舞ひが、おのづから戒法にかなふ。戒法とはむつかしいものではない、堅苦しいものではない。「まごころ」をこめて、いかに生きるか。そして常に自分の「あるべきやうわ」何なのかを問うて生きることが大切だといふことでせう。これがまた、明恵の「学問」だつたと思ひます。

### 虚空の如くなる心

明恵は、十八歳のときに西行に会つてゐます。西行は七十二歳(建久元年・一一九〇)でしたが、この年に亡くなつてゐます。

「西行法師常に来りて物語して行はく、『我歌を読むは、遙かに尋常に異なり。華・郭公・月・雪、都て万物の興に向ひても、凡そ所有相皆是虚妄なる事、眼に遮り耳に満てり。又読み出す所の言句は、皆是真言に非ずや。華を読めども実に華と思ふ事なく、月を詠ずれども実に月と思はず。只此の如くして縁に随ひ興に随ひ読み置く処なり。」

紅虹こうこうたなびけば虚空色どれるに似たり。白日か、やけば虚空明かなるに似たり。然けれども虚空は本、明かなる物にも非ず、又色どれる物にも非ず。我又此の虚空の如くなる心の上において、種々の風情を色どると云へども、更に蹤跡なし。此の歌即ち是如来の真の形躰也。去れば一首読み出でては一躰の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひ続けては秘密の真言を唱ふるに同じ。我此の歌によりて法を得る事あり。若しこ、に至らずして妄みだりに人此の道を学ばば、邪路に入るべし」と云々。さて読みける、

山深くさこそ心はかよふともすまで哀れはしらん物かは

喜海其の座の末に在りて聞き及びしま、之を注す。」〔伝記〕

虹にじがかかれば大空は赤く彩られ、太陽が輝けば大空は白く明るくなるが、しかし本来大空は白いものでも赤いものでもない。私もこの大空のやうな心の上に、種々の風情を詠んでゆすが、少しも跡を残しません。この歌が、即ち釈迦如来の本当の姿です。だから歌を一首詠み出すことは一体の仏像を造る思ひです。

西行のいふ「虚空の如くなる心」とは、大空のやうな曇りない心をいふのでせうか。大空のやうな、とらはれのない心。これは明恵の求めた心でもありました。「山深く」の歌も、

山深い生活にどんなに心が通ひあつても、「すまで」は、住んでみなければ、即ち一緒に体験してみなければこの哀れはわからないでせう。この「すまで」には、心が清んでゐなければといふ意味にもとれます。心が清く澄んでゐなければわからない、といふ意味にも取れません。

「同元仁元年十二月十二の夜、天曇り月暗きに、花宮殿に入りて坐禅す。やうやく中夜（真夜中）に至りて出観の後（坐禅を終へて）、峯の房（花宮殿）を出でて下房へ帰る時、月雲間より出でて光雪にか、やく。狼の谷にほゆるも、月を友としていとおそろしからず。下房に入りて後又立ち出でたれば、月又曇りにけり。かくしつ、後夜の鐘（四時ごろ）の音聞ゆれば、又峯の房へ登るに、月も又雲より出でて道を送る。峯に至りて禅堂に入らむとする時、月又雲を追ひ来て向の峯に隠れなむとするよそほひ、人知れず月の我にともなふかと見ゆれば、二首

雲を出でて我にともなふ冬の月 風や身にしむ雪やつめたき

山のはに傾くを見おきて、一峯の禪堂に至る時

山のはにわれも入りなむ月も入れ　よなく／＼ごとにまた友とせむ

くまもなく澄める心のか、やけば　わが光とや月思ふらむ」〔伝記〕

元仁元年（一一二四）五二歳のとき、高山寺裏山の花宮殿で坐禅したときの歌である。花宮殿とは、釈迦をご招待申し上げるために建てたといふ故事にちなんで建てた禪堂です。明恵は冬はここに籠り、真夜中から朝まで観想と勤行に務めました。

禪堂を出れば、月が雲間より出てきて暗い足元を照してくれる。下房に入つて休むと月は雲に隠れて休む。月はまるで私の心がわかつてくれる友のやうだ。「雲を出でて」私に付き従ふ月よ、風が身にしみないか、雪は冷めたくないか。山の端はに入らうとしてゐる月よ、山の端に入つて休みなさい。私も禪堂に入るから。又明日の夜会はう、親しい友よ。次の歌は、私の心が隅々まで澄んで輝いてゐるので、月は私の心を自分の光だと思つてゐないか。ここでは、明恵の心は月と一体となつてゐます。

## 明恵上人と現代の学問

私の大学時代は、学問といへば社会科学を意味してゐました。史的唯物論の立場から書かれた『昭和史』（遠山茂樹・昭和三十年）では、歴史とは支配者と被支配者との階級闘争であり、被支配者の立場に立つて歴史ははじめて「客観的」なものになる。それは変革の立場、民衆の立場、共産党の立場だから正しいといふものでした。

昭和三十五年（一九六〇）に「安保闘争」が起こると、この考へ方は頂点に達した。まもなく絶対平和の時代がくる。それは社会主義・共産主義の時代である。これは歴史的必然であり、「客観的」な真理であると、多くの学生が真面目に信じたのです。

この物質を観察するやうに学問する態度。「科学的」とか「客観的」といふ立場に立つて、観察し解釈する学問の風潮に対し、小林秀雄は早くからこれを批判してゐました。私は、小林秀雄の『私の人生観』で明恵上人のことを知り、西洋に根ざした学問とは全くちがった学問が日本の伝統としてあることを知りました。

明恵は、美しい心をもつた釈迦を信じた。そして、経典を詠むだけでは満足できなかつた。

釈迦をいかに自分の心の中に迎へ入れるか。釈迦に直接接してゐるやうに、釈迦を心中に蘇がへらせることにあつた。釈迦が目の前にはつきりと存在する。釈迦が自分に呼びかける声がかきこえる。それに応へなければならぬ。その喜びが常に感じられるのが明恵の学問だつた。明恵は、観察とか解剖・分析は知らなかつたが、釈迦といふ人間をしつかり掴んでゐた。尊敬と愛情によつて掴んでゐた。

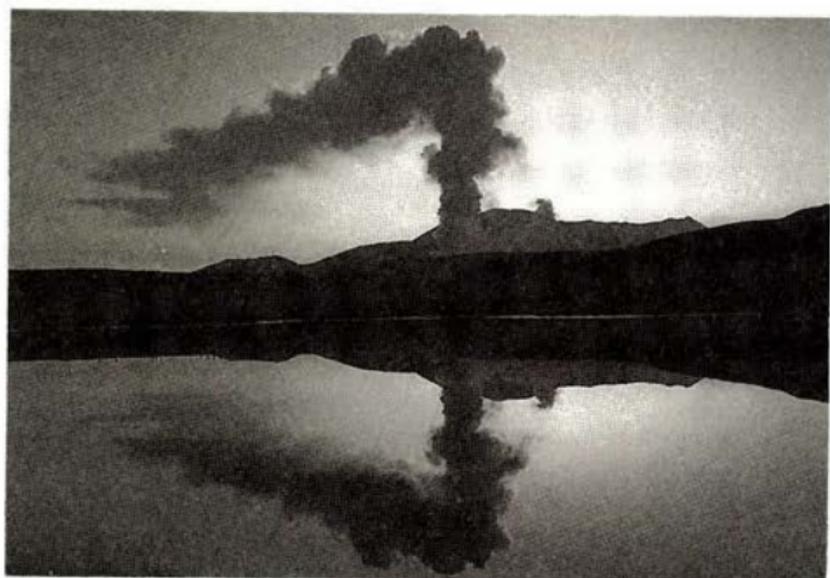
日本人は、昔から月を友とし自然と一体となる心をもつてゐました。特別な工夫もなく、自然と共鳴共感できる心をもつてゐます。西洋の学問が、客観的な物質の真理・法則を求めてゆく科学にあるとすれば、日本人は客観を忘れ、ある立場に立つて物を考へるといふのではなく、自分の内面を見つめいかに対象と一体になり得るかを求めてきたと思ふ。これが日本人の学問の基礎であり、日本文化の伝統であつたと思ひます。明恵上人はその点で一つの典型であり、理想であつたと私は思つてゐます。

講義

吉田松陰に学ぶ

(株)日本興業銀行資本市場部第二課長

小柳志乃夫



艱を涉り阻を跋み奇を探らんと欲す——若き日の松陰——

何ぞ国脈を培養せざらん——下田踏海前後——

其の楽しみ如何と為す——松陰の教育活動——

ステイヴァンソンの松陰像

## 艱を涉り阻を踏み奇を探らんと欲す——若き日の松陰——

今日は、幕末の志士、吉田松陰の文章を取り上げて、輪読の導入としたいと思います。

松陰は天保元年（一八三〇年）に毛利藩士杉百合之助の二男として今の山口県の萩郊外の松本村に生まれました。六歳のとき、叔父の吉田大助が亡くなり、松陰は山鹿流の兵学師範の家柄である吉田家を継ぎます。二十歳の頃には、藩主の信頼の厚い兵学の先生として吉田大次郎の名が萩城下に知れ渡るやうになつてゐたさうです。

嘉永三年、二十一歳の夏、松陰は九州に遊学に出ますが、これ以降、松陰の残り十年の人生は、旅をしてゐるか、囚人として獄中或いは謹慎生活にあるかのいづれかといふ、波瀾の人生を送ります。翌嘉永四年には、兵学研究のため江戸に往き、当時の一流の学者を訪ねて猛烈な勉強を開始します。しかし、なかなか志の高い、人生の師と仰ぐやうな人物は得られない。さうした不満を持つたとき、前年、熊本で知りあつた宮部鼎蔵と出会ひます。二人は、心を開いて国のことを語り合ひ、天下の形勢を知らうと東北旅行を計画しました。これに兄の仇討ちを企図してゐた盛岡出身の江幡五郎も加はり、仇討ちで有名な忠臣蔵の討ち入りが

十二月十四日なので、皆でその日に出発することになった。ところがその約束の日が近づいても、松陰が旅行するために必要な藩からの証明書が下りない。しかし、松陰は友達との約束を守ることが大切だと考へ、思ひ切つて藩の許可なしで亡命して東北旅行に出発しました。最初に訪れたのは水戸で、会沢正志齋等から水戸学を学びます。水戸では松陰ら三人の宿を訪ねる人も多く、話こんで明け方を迎へるといふこともありました。一月に水戸を出発し、途中、江幡と別れて、真冬の東北の豪雪の中を旅します。会津から新潟に迎ふ道中の漢詩をご紹介します。

吾れ北越に遊ぶまさに雪時、艱かんを涉わたり阻そを跋ふみ奇を探らんと欲す。

八田・福島・諏訪の嶺、土人雪を称して最も推す所なり。

八田・福島は吾れ懼おそれず、雪や深しと雖いへども地勢夷たひらなり。

独り難なやむ諏訪高くして雲を凌しのぎ、峻嶺しゅんれい萬仞ばんじん欽きん巖がんを攀よづ。

僵うる偻るして登れば腰折れんとし、胸喘あへぎ膚汗し脚また疲る。

時あつて驚風空を掠かすめて起り、髭ひげを染め面を搏うち冷肌を皴さす。

時あつて日脚雲を射てつんざき、返照眼へんせうがんを眩くらし光陸離りくりたり。



辛苦して乃ち最も高き處を極め、四顧して快と  
称し始めて頤を解く。

奥野越山天に連なつて白く、平川一条走りて青嶺  
のごとし。

雪の深さ幾丈測るべからず、老樹埋没して枝なか  
らんと欲す。

吾れ山陽より東海に抵り、一雨一晴喜び又悲しむ。  
艱阻未だかくの如く甚しきはあらず、艱阻愈々甚  
だしくして奇もまた随ふ。

土人漫りに雪中の艱を称するも、艱中奇を知る果  
して是れ誰れぞ。

〔東北遊日記〕「二月八日」抄・嘉永五年二月八日

難しい漢字ばかりで一読して意味不明かもしれませ  
んが、詩の活き活きとしたリズムを感じていただきた

いと思ひます。松陰は「艱を涉り阻を跋み奇を探らんと欲す」と、雪の厳しい季節の中で、その土地の人でさへ難儀する場所を自ら踏み入るのです。その難儀の末に「辛苦して乃ち最も高き處を極め、四顧して快と称し始めて頤を解く」。頤を解くとは大いに笑ふといふ意味です。大きな難所を乗り越えた青年の哄笑が響いてくるやうです。そのとき頂きから見た景色は「奥野越山天に連なつて白く、平川一条走りて青螭（螭は竜のこと）のごとし」といふ実に爽快、雄大な光景でした。このやうに、自ら艱難を求め、その中に日常の生活で得難いものを求めていきたいといふ気持ちは、多かれ少なかれ、現代の若い皆さんにもきつと息づいてゐるのではないでせうか。

松陰にとつてかうした旅は珍しい経験をするといふ意味に止まるものではありませんでした。次の文章は、後年、松陰が『孟子』を講義した記録である『講孟餘話』の一節です。

「静処に於て本心を認むる固より善し。又動処に於て本心を認むる、更に善し。或いは書を読みて意中の人に遇ひ、意中の事を見るか、同志の人を会し、劇談豪論するか、或いは風雪を冒し、山野を跋涉するの類、都て吾が心氣力を発動せしめたる後は、必ず浩浩勃勃、勇往銳進の勢、禦くべからざる者あり、此の処より本心を認め、漸々長養するも、

亦是一種の手段なり。実験して其の妙を悟るべし。」（『講孟餘話』告子上第八章）

「静処に於て本心を認むる固より善し」とは孟子の考へです。騒々しい生活の中で、ともすれば人間はその本性に備はつてゐるもとの美しい心を失なつてしまふ。そのもとの心とはどうやつて見出せばよいのか。それは夜明けの静寂な一時に清々しさを覚えるその心だ、と孟子は考へるわけです。そのやうに静かな所で本心を認めるのは勿論いい。しかし、松陰は同時に「又動処に於て本心認むる、更に善し」といふのです。それは若き日の松陰が生きた姿そのものです。「或いは書を読みて意中の人に遇ひ、意中の事を見るか」、歴史書を学んでは楠木正成といった歴史上の英雄たちに共感し、「同志の人を会し、劇談豪論するか」、宮部鼎蔵や水戸の同志たちと交はり、「或いは風雪を冒し、山野を跋涉する」、真冬の東北の山々を歩き回つた。かういふ経験は「都て吾が心氣力を発動せしめたる後は、必ず浩々勃々勇往鋭進の勢、禦ぐべからざる者」であると、松陰は自身実験し、体得したところを述べます。松陰にとつての旅とは「本心を認める」、外物を捨て去つた本当の自分自身を見つけ、奮ひ立たせる旅だつたのです。

東北旅行の後、松陰は萩で謹慎生活に入り、翌嘉永六年一月に諸国遊学の旅に出ます。六月に再び江戸に着きますが、丁度このときペリーが浦賀に来航します。松陰は直ちに浦賀に行き、佐久間象山などと事情を探ります。象山は洋式砲術の大家であり、人物・識見とも非常に優れた人物で、松陰は探し求めてきた人生の師をやうやく得ることになりました。松陰は勉学に励み、象山門下に吉田寅次郎あり、と知られるやうになります。それまで松陰が学んできた兵学は日本流の兵学でしたが、それでは西洋列強を相手とするには足りない。孫子に「彼を知りて己を知らば百戦して殆ふからず」といふ言葉がありますが、まづ相手たる西洋の事情を知らねばならない。一方、象山も松陰のやうな有為な青年を海外に出して各国の事情を見聞させるべきと考へて、幕府に働きかけたのですが、結局実現されない。松陰は幕府が動かないのであれば——そこが松陰の偉いところですが——自分自身の責任で海外に出国しようと、機会を求めます。

翌安政元年一月に黒船が再来し、前年の和親通商条約締結要求に対する回答を求めます。

幕府は慌てます。前年ペリーが来たときには来春になつたら回答する、その時には長崎に来るやうにと言つてありました。ところが幕府は何千里も離れたところから再び来ることは容易であるまい、と踏んでゐたやうです。まさに「彼を知りて己を知らば百戦して殆ふからず」の「彼を知らない」のが幕府でした。

次の手紙は、安政元年正月二十七日に萩にゐる父杉百合之助に宛てたものです。欠けた部分もありますが、その当時の雰囲気がよく伝はつてきます。

「十四日已来黒船一条にて東奔西走仕り候へども□□奏し難く、天下の□□□□今日に窮まり申し候。江戸を去る□十二里、金澤に居然きよぜん（ゐすわつて動かない）□□夷舶七隻碇を並べ居り候状態、実に切齒（ひどく残念がる）に堪へず、且つ日を逐ひて猖獗しやうけつ（猛獸がたけり狂ふ）の形を顕はし、測量上陸、言語道断の趣に御座候。穩便穩便の聲天下に満ち、人心土崩瓦解、皆々太平を楽しみ居る中にも、有志の輩は相對して悲泣するのみに御座候。」

当時の幕府の姿勢は海外に対しても国内に対しても「穩便穩便」といふ姿勢でした。政治

上・外交上の決断を回避し、目前の問題を取り繕ふうちに次第に幕府自身、身動きが取れなくなつていくのです。当時主戦論を唱へた水戸の老公斉昭は「我に戦ふの決心あつて和するはすなはち和なり、その決心なくして和するは和に非ずしてこれ降なり」といふ態度でした。穩便穩便といふのは後者の態度にはかなりません。一方、幕府の旗本の大部分や町民の生活は太平を楽しんで、「人心土崩瓦解」国民の心は一つになることなく、崩れてしまつてゐる。余談になりますが、近年の日本の政治・外交情勢は、まさに「穩便穩便の聲天下に満ち、人心土崩瓦解」といふ状況と思へてなりません。

次の文章は、松陰が密航直前に、宮部鼎蔵などの友人たちに自分の計画を明かした時の記録です。当時の「有志の輩が相對して悲泣する」様子が窺へる文章です。

「来原・赤川・坪井・白井・宮部・佐々・松田来り集まる。同寓永鳥と同じく寓を出で、京橋傍の伊勢本といふ酒樓に大会し、予が策を語り且つ諸子の論を請ふ。初めは深く然りとするもの永鳥一人のみ、已にして衆皆之れに同ず。只だ宮部云はく、『是れ危計なり』と。意甚だ痛惜す。衆皆宮部を駁す。来原・永鳥默然云はず。久しうして来原突然曰く、『夷情を探問するは務むべき所か』。宮部曰く、『固よりなり』。来原云はく、『実に然ら

ば事の当に為すべきをなす、何ぞ成敗をとはん、一いってつ跌首を梟する（首をさらす）、吾れ寅二に於て憾みとなさず」と。又久しうして永鳥徐ろに曰く、『勇銳力前は吉田君の長所なり緝密（緞密）持重を以て是れを止めんと欲す、吾れ其の事を成すことなきを知る』と。余乃ち毫ふてを揮ふるひて曰く、『丈夫見る所あり、意を決して之れを為す。富嶽ふがく（富士山）崩ると雖も、刀水（利根川）竭くと雖も、亦誰れか之れを移易いへきせんや』と。宮部其の留意なきを知り遂に之に同ず。佐々つうこくりゆうてい痛哭流涕して曰く、『神州の陸沈りくちん（沈み滅びる、甚だしく世が乱れる喩へ）此に至る、君其れ何の術を以て是れを維持せんと欲する』と。余も亦覚えず流涕、遂に共に誓つて曰く、『寅巳に断然危計を行ふ、固より自ら期す、一跌して鈴森すずがもりに首を梟することを。然れども諸君今日より各々一事を成して国に酬いば、其の間成敗なきに非ずと云ふとも、何ぞ国脈を培養せざらん、如何々々』と。衆皆之れを然りとす。』（「回顧録」「五日」抄、安政二年三月）

松陰の密航を制止しようとした宮部の心には、松陰に対する深い友情があつたのでせう。それに対して、松陰は「寅巳に断然危計を行ふ」といふ。この「断然」といふ表現は松陰の文章にしばしば登場します。人生には様々な局面で決断を求められることがあります、松

陰の場合、先の東北旅行のときの亡命もさうであつたやうに、自ら信じたことに対しては自分の迷ひを振り切るやうに捨て身になつて事を行ふ。そこに新たな展開が開けていく。さういふ人生を歩んだのです。「断然」とは松陰の生き方そのものを示す言葉でもあります。さらに、「諸君今日より各々一事を成して国に酬いば、其の間成敗なきに非ずと云ふとも、何ぞ国脈を培養せざらん」といふ言葉も強い言葉です。「国脈」といふ言葉は我々にとつて死語となつてゐますが、国の命脈といふ意味であり、生命体としての国に対する思ひが込められた言葉だと思ひます。松陰は、各々が今日から一つの事をなして国に酬いば、それが仮に失敗したとしてもそれは犬死ではなく、後世において国の生命力の源になる、そこに志を定めようと、涙ながらに友達と誓ひ合ふのです。

かうして友人と別れを告げ、金子重輔とともに米艦に投じ海外に出ようと江戸を出発します。二人は苦勞の末やうやくチャンスを見つけ、三月二十七日の夜に下田沖に碇泊中の黒船に乗艦して、渡航を懇願しますが、乗船を拒否され、翌日自首することになります（下田踏海事件）。幕府の裁決によつて自藩幽閉を命ぜられた松陰は、十月萩に着き、野山獄に入ります。

其の楽しみ如何と為す——松陰の教育活動——

獄に入つた松陰を支へたものに家族の深い愛情がありました。松陰が国禁を犯して密航しようとしたことで、兄は役職を解かれ、父は謹慎生活をしてゐました。それにも拘らず、愚痴一つなく、杉家の人々は実に温かく松陰を励ますのです。兄の梅太郎は、連日、手紙を出し、或いは獄に顔を出して、食べ物、薬、本などを差し入れたり、獄内の湿気がひどいと聞いては、お母さんが作つた敷物などを用意する。妹の千代は既に嫁いでゐましたが、同じやうに松陰の身の上を思つて心を尽します。次の文章は妹からの差し入れとそれに添へられた手紙に対する松陰の返事の冒頭部分です。

「十一月二十七日と日づけ御座候御手紙、并なぞに九ねぶなぞ（九年母、柑橘類の果物）・三かん・かつをぶしともに、昨ばん相とどき、かこひの内はともしくらく候へども、大がい相わかり候まま、そもじの心の中をさつしやり、なみだが出てやみかね、夜着をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね、又起きて御文くりかへし見候て、いよいよ涙にむせ

び、つひに夫れなりに寐入り候へども、まなくめがさめ、よもすがらね入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候。わもじは、父母様の御かけにて、きものもあたたかに、給物もたべものゆたかに、あまつさえ筆かみ書もつまで何一つふそくこれなく、寒きにもきけ申さず候間、御安心成さるべく候……」(書簡「妹千代宛」抄 安政元年十二月三日)

深夜の獄中の寢床の中で、妹の心を思ふて泣く松陰の姿が偲ばれる、心にしみとほるやうな文章です。自分を本当に親身に思つてくれる父母・兄妹に囲まれた幸せを松陰を如何に思つたことでせう。「色々なる事思ひ出し申し候」と記してゐますが、妹と共に過ごした幼少の日々のことがまざまざと蘇つたことでせう。この手紙を貰つた妹にもその言葉一つで同じ思ひ出が広がってくるやうなことではなかつたか。

かうして一家の深い愛情に支へられて、松陰は獄中で勉学に励みます。当時、野山獄には十一人の囚人がゐました。最年長は七十六歳で既に四十九年間獄にゐる人、一番若い人でも三十六歳で在獄四年です。かうした囚人は必ずしも何か罪を犯した人ではなく、それぞれの家で折り合ひが悪くて親戚の願ひで牢に入った人の方が多い。従つて再び外に出られるといふ望みはなく、獄内は自暴自棄で絶望的な気分が漂つてゐました。さうした中に青年松陰が

入つてくる。松陰は絶望的どころか、学問の喜びを知つてゐて、一年で五百冊の本を読むといふ勢ひです。その姿に囚人は次第に感化されていきます。松陰は家から食べ物が送つてくると囚人皆で食べて味はふ。俳句の得意な囚人に俳句を学び、獄中に句会を催す。松陰自身も囚人に「孟子」の講義を行ひます。そのやうにして囚人たちは次第に生きる喜びを見出し、いく。次の文章はその頃、松陰が桂小五郎に宛てた手紙の一部です。

「僕、幽囚せられて、永く世の棄物となれども、猶ほ同囚すこふと頗る経義けいぎを修む。昨、孟子を講じて、滕とうの文公齊楚つかに事ふることを問ふの章に至りしに、同囚皆扼腕やくわんせつし切齒、文公の用ふること能はざりしを惜しまざるはなかりき。史を読み経を講じ、楽しみ以て身を没せんとし、その他を知らず。足下に非ずんば、其れ誰れか之れを諒せん。」（野山獄文稿）「桂小五郎に与ふる書」抄、安政二年五月六日）

「文公の用ふること能はざりし」とは、滕の王様の文公が両隣の大国齊・楚のいづれに付くべきかと孟子に問ふたのに対し、孟子は、滕の防備を固くして、民とともに城を守り、文公がたとへ死んでも民が滕の国を去らないようにできるならば、それが唯一できることだと応

へるのですが、文公がこの孟子の言葉を用ひることができなかつた、といふことを指します。松陰の「史を読み経を講じ、楽しみ……」とは、単に好きな歴史を講じる楽しみではない。「同囚皆扼腕切齒」といふ獄の囚人との共感の世界が生まれたときに、「楽しみ以て身を没せんとし、その他を知らず」といふ実に深い喜びの言葉が生まれるのです。まさに輪読が目指すべき世界がここにあるやうに思ひます。しかもその扼腕切齒とは当時のわが国の状況を憂ふる思ひに繋がつてゐたと思はれます。といひますのは、この箇所について講孟餘話では松陰は文公の態度を痛烈に批判するとともに、文公の態度に重ねて当時の幕府の姿勢に言及してゐるのです。

松陰はその年の暮れに杉家に帰され、謹慎を命ぜられます。この頃から暫くは松陰の生涯で最も平穩な時期で、松下村塾の教育活動に専念します。昔からの同志や兵学門下、さらに近所の少年たちと、身分や年齢に関係なく色々な人が来て議論をし、教へを請ひ、門人となつていく。松陰は単なる学者ではなく、時代の問題に正面から取り組んでゐる志士で、しかも当代一流の人物たちと交流してきた人ですから魅力もあつたことせう。高杉晋作など有為の人材が次々と塾に入つてきます。その頃の文章を一つ紹介します。

「当今天步艱難（天運が開けず、時勢が難しいこと）にして国事困蹶（苦しむまづく）し、有志の士、蓋し憂へざるはなし。然れども悲愁嗟嘆徒然（漫然）以て憂へ、事に益なき者、滔々として皆是れなり。是れ真に憂ふる者に非ず。真に憂ふる者は必ず為す所あり、為す所あらば必ず楽しむ所あり。然らば即ち当今の世、悠然として以て楽しむ者は、真に我と憂を同じうする者なり。然らざるは、皆我が徒に非ざるなり。僕幽囚の状、碌々（役に立たないさま）として道ふに足るものなし。然れども富永有隣なる者を得て、一邑を鼓舞す。一邑の人、貴賤となく長少となく、駸々（物事の速く進むさま）として学に向ふ、倦むなきこと之れを久しうせば、即ち邑中或は一一の解事（事をさとる）の人を生ぜん、其の楽しみ如何と為す。」（『丁巳幽室文稿』「口羽徳祐に復する書」抄、安政四年十月二十八日）

漫然と日本の国を憂ふるばかりで、具体的な実行を伴はない者は実に多い。さうした人間は「真に憂ふる者に非ず」と松陰は断言します。私自身にとつて、日常を振り返へさせられる非常に厳しい言葉です。松陰は「真に憂ふる者は必ず為す所あり、為す所あらば必ず楽しむ所あり」と確信に満ちた言を述べます。松陰はさきほどの「断然」といふ言葉にもあつた

とほり、常に実行を大切にしてきた人でした。実行のある所には必ず楽しむ所があるとは松陰の経験です。謹慎生活の中で松陰にとつてできる行為は学問と教育でした。その教育の中で一二の解事の人どころでなく、多くの志士を育てていく。「国脈の培養」の具体的な手応へがそこにあるのです。「其の楽しみ如何と為す」とは実に喜びに満ち溢れた表現ではないでせうか。

### ステイーヴンソンの松陰像

時間がなくなつてしまひましたので、最後に『宝島』で有名なステイーヴンソンの文章を紹介したいと思います。ステイーヴンソンは明治時代になつて日本の留学生から松陰の話を聞いて感動し、「ヨシダ・トラジロー」といふ文章を書きます。次はその一節です。

「軍事専門家、勇敢な旅行者（少なくとも願望において）、詩人、愛国者、教師、学問の友、改革の殉教者——七十で死んだ人物でも、かうした数々の性格においてその国に仕へた人は多くはない。彼（松陰）は思想が賢明ですぐれてゐたばかりではない、彼は迫害

を受けた英雄の中の最も熱情的な人物であつた。彼の指導力（それは彼の同獄の囚人たちをも服せしめた）、彼の熱い、撓まぬ熱情、あるいは敗北に決して屈しない意志——そのどれが最も顕著なのか、言ふことはむづかしい。彼は企てた計画のどれにも失敗した。しかも我々はいま彼の国を見るだけで、彼の成功が全体としてどんなに完全であるかを見ることができる。彼の友人と弟子たちが、いま約十二歳になつた（明治十二年）革命（維新）に指導者の大多数を占めたのである。

そして、つけ加へておくが、これは一人の英雄的人物の話ではなく、英雄的民族の話である。……われわれがこのやうな志の大きい紳士たちと同時代に生きてゐることは、欲ばしいことである。（R・L・ステイヴンソン、「ヨシダ・トラジロー」——夜久正雄「詩と政治」、河上徹太郎「吉田松陰」より——）

松陰の本質を見事に捉へた文章であり、ステイヴンソンの感動が伝はつてきます。そして、我々の先輩である幕末・明治の日本が、英国の作家の眼に「英雄的民族」として「このやうな志の大きい紳士たちと同時代に生きてゐることは欲ばしいこと」と映じてゐたと思ふとき、私の胸には熱いものがこみ上げてきます。幕末・明治の時代には、松陰に限らず、

凄い生き方をした人物が続々と登場します。その先人の遺した言葉を通して、日本の素晴らしい歴史の中に、皆さん、是非、踏み入って頂きたいと思ひます。

講義

# 日本の神聖と現代世界

筑波大学名誉教授

(社)倫理研究所客員教授

竹本忠雄



はじめに——「神聖」の存在と進歩主義の幻想——

日本人には日本人の神聖観がある

フランスの「神聖」の系譜

フランス革命が葬り去つたもの

死者の霊を祀ることは神聖な行為

天皇の御存在と日本人の使命

《質疑・応答》

## はじめに——「神聖」の存在と進歩主義の幻想——

本日は大へん大きな題名を付けましたが、この題名を付けた元になつてゐることは何か、といふところから入つていきたいと思ひます。

私どもの生きてゐる「現代」といふのは、近代のわづか二、三百年間に主流となつた思想、「進歩」を信仰する上に成り立つてきた時代史にすぎません。人々は、歴史が先に行けば行くほど人智が進み、より確実に平和と幸福が近づいてくるといふ、漠然たる夢を抱いて生きてきました。とくに二十世紀は、そのやうな夢が途方もなく大きくふくれあがつた時代です。ところが、一九九一年をもつて、さうした虹のやうな夢を培つてくれた総本山のソ連が崩壊しました。単に二十世紀のみならず、人類史上最大の事件の一つが起こつたわけです。その直後の時代として、われわれの現下の時代はまづ位置づけられなければなりません。

現在の状況なるものは、したがつて、巨大なピラミッドが崩れ落ちたやうな、このソ連崩壊といふありえない出来事が起こつたその直後の時代であるといふことを抜きにしては、まづ語れないであらうと思はれます。

ここから状況の変化が起こつてきました。とくに昨年は終戦五十周年といふこともあり、これをきつかけに、ソ連が織りあげた虹の夢に同調してきた人々はいつたい責任を取つたのかといふことが検証されるやうになりました。日本の世論はかなり変はつてきました。いまだに古い社会主義体質の言論機関は温存されてをりますが、非常な批判も起こつてきて、昨日までスーパースター格だつた言論界の王者たちが次々に失脚させられるやうな風潮ともなつてきた。やうやく……といつたところです。なにしろ日本人は、大へんに立ち上がりの遅い民族と言はれてゐますから。日本人の心、メンタリティを表すのに、雪が降り積もつた竹の枝になぞらへることがあります。雪が積もつてきても竹の枝はすぐには反動しない。ものすごくしなひますね。時には折れてしまふこともあるが、しかし必ずゆつくりゆつくりと雪を撥ねのけて立ちなほつてきますね。これが日本人の姿なんだよと、ある国際会議の席上で美術家から聞かされて、なるほどと思つたことがあります。

さて、歴史は先きに行けば行くだけ進歩するといふ幻想が、そもそもいつごろから起こつたかといひますと、十九世紀からです。といふことは、ダーウィンの進化論（一八五九年）からといふことで、ただし当初は、猿から人間へ、アミーバから動物へといふ生物学上の考へにすぎなかつた。これがのちにマルクス（『資本論』一八六七年）とレーニンの社会・経済・



政治思想と結びつき、恐るべき強力な武器となつて、人々の幻想を織りあげていつたわけです。そしてこの考へに従はない人間はすべて「保守的」であるとして断罪されるに至つた。この「保守」といふことに宗教を結びつけて考へる思想がさらに強力となつていつた裏に、やはり何といつてもフランス革命があづかつて力があつたといふべきでせう。この時に初めて人間にとつて「神聖なもの」とは神ではない、それは人間そのものであるといふ思想が生まれた。いはゆる「人権宣言」です。一七八九年七月十四日、フランス革命の起こつた月の翌八月に行はれたこの人権宣言によつて、「神聖」をめぐる人類史の大転換点が起こつたとみることができませう。

それならば、それ以前の時代の諸文明においては「神聖なもの」とは何であつたか、それと人間とのかかは

りはどうであつたか、といふ視点で歴史を見る必要があるとなつてまゐります。私どもの学校教育において馴れつことなつた進歩段階的な歴史観とは別に、この「神聖」とのかかはりにおける人類史の展開といつた見方もあるはずで、私はその方がずっと古い、深い、そしていまなほ有効な見方であらうかと思ふのです。この見方にもとづいて、日本の神聖とは何か、これと現代とのかかはりはどうか、二十一世紀文明はどうなるのか、この点を一瞥したいといふのが、本日の私の話に臨んでの基本的な姿勢であります。

#### 日本人には日本人の神聖観がある

「神聖」といふと、皆さんは大へん難しい感じを受けてをられるかもしれません。しかし、人間誰しも「神聖なもの」を持つてゐるのです。大東亜戦争の最中に出撃していつた神風特別攻撃隊のパイロットをはじめ、二百二十万の英霊となつた人々。かういふ私どものお父さん、兄さんたちは、軍国主義などのために戦ひに行つたではありません。自分が愛する、命を賭しても守りたい同胞、そしてこれと一体化した祖国を守らんがために出撃して行つたのであります。ここに守るべくしてあつたものが「神聖」といふものです。人間といふもの

は、「神聖なもの」のために死ぬこともできる。死んでも守りたい、それが穢されれば、いつそ死を選ぶ、かういつたものが「神聖」といふことであります。

かう考へればこれは何も日本人に限つたものではありません。アメリカにはアメリカの、フランスにはフランスの、「神聖」があります。多くの場合、そこから發揮されるものが、「魂」、「精神」と呼ばれてゐます。大和魂、ヤンキー魂、ゴローワ精神、みなさうです。そして日本人には日本人の神聖観といふものがある、ここが大事なところであります。日本は、他の文明とはかなり異なる神聖の特徴を持つてゐる——これは文化・歴史的にまつたく明らかたところでありまして、私たちはさう主張するうへに何の憚るところもありません。

ルネッサンス——いみじくも「人間中心主義」<sup>ヒューマニズム</sup>の發生の文芸復興運動——以後、たかだか三百年間の欧州近世・近代史を除いては、世界の諸文明は、すべて本質的に宗教文明でありました。エジプト、古代アメリカ、インダス河流域のインド、中国の漢、漢に先立つ周、さらに殷、メソポタミアのバビロニア、アッシリア、ひいてはユダ王国……。全人類が神、あるいは神々の回りを旋回してゐたのが人類史の大半であつたといへませう。

逆に、「神聖なるもの」がはつきりしてゐればこそ、これを中核として諸文明はあつたとさへ申せませう。そのなかで特に三つの宗教が、神の姿・形を絵に描いたり彫刻にしたりし

て表さない特徴をもつ点において共通であつたことに注目したいと思ひます。その三つとは、ユダヤ・キリスト教、イスラム教、そして日本の神道です。このうち、キリスト教だけは、今日に至るまで世界的発展をとげる過程において、キリストとマリア、聖人聖女など数限りなく像に刻んで、いはゆる「聖芸術」を發達させてきましたが、これはギリシア、エジプトなどの地中海周辺の諸文明の影響によるものとされてゐます。しかし元はといへば、キリスト教の淵源たるユダヤ教においては、モーゼがシナイの山から十戒の板をたづさへて下りてきたときに、彼の留守中に民衆が狂氣のごとくなつて黄金の子牛の神輿を担ぎまはつてゐる光景を見て激怒し、十戒の板を投げつけたと聖書の物語にありますやうに、偶像崇拜を厳しく禁じた宗教であつたといふことです。これに対して、もつと厳格なのがイスラム教です。イスラム教の世界では絶対に神を姿・形に表してはならない。それはいまだに厳しく守られつづけてゐます。アラアの神はおろか、マホメットの姿や、動物一匹さへ表してはなりません。このイスラム思想の厳格さが今日、イスラム原理主義と結びついて、大變なテロ行為を伴つて全世界を揺すぶつてゐることは、皆様ご承知のとほりであります。

そして三番目に、私どもの日本の神道が来ます。神道の凶象忌諱の性格は、天孫降臨のときに天照大神が瓊瓊杵尊（にぎのみこと）に向かつて「我を崇むることくにこの鏡を崇めよ」と仰しやつて

御神鏡の八咫やたの鏡をお渡しになつたことそのものに象徴的に表はされてゐる事柄でありまして、このことが連綿と守られてきたことから、本来的には神の形も人の形も凶像に表はされるといふことがありません。そのやうな日本が神道の神々を像に刻みはじめたのは十世紀のことからで、弘法大師の密教の影響によるものです。

日本の「神聖」の至高のシンボルは鏡に尽きものでこのことは、朝鮮半島などに比べて日本列島の考古学的発掘品には異常に多くの鏡が含まれてゐることからも推察しうるところであります。熊野の速玉神社のやうに、外来形の異形の人像を御神体として刻んだものとは別に、本来の日本の精神性は、伊勢の内宮外宮をはじめ、どこの神社空間、ご本殿の内部をいくら探しまはつても、ぜつたいに神像の存在を許すものではありません。あの簡潔な空間そのものが日本の神聖を守り、表はす世界となつてきたのでありまして、またそれが実に素晴らしい建築でありますから、心ある世界中の人々の絶えざる驚嘆の的となつてきたのであります。このやうに「神聖なるもの」の表はれ方といふのは文明によつて非常に異なるわけでありまして、日本では何よりも神道と結びつき、つまり天皇の存在と結びついてその「神聖」が守り伝へられてきたことの意義を改めて顧みるべきであらうと思ひます。

今度の戦争が我々の敗北に終はつたときに、アメリカ占領軍としては是非とも日本を完膚

なきまでに叩きのめし、二度と日本が日本たりえないやうにといふことを考へ、そしてそれは敵ながら実に見事に効を奏したのでしたが、一番の根源のところでは成功したとは言ひがたいわけでありまして、それといふのも、最後の点で日本の神聖は守られたからであります。そこにこそ、日本の神聖のオリジナリテイのある秘密があるからにほかなりません。そこには、いくらこれを毀さうと思つても毀すことのできない、ある秘密がある。それは、日本の「神聖」に対する日本人の感じかたの背後に独特の自然観がはたらいてゐるといふことで、「海山のあはひ」といはれる敷島の国大和には無数の山々があり川々があり、神々はこれと不離一体であるといふことであります。たとへ戦ひに破れても山々は残り、川々は残る。そしてそのかぎり、日本人はそれを神として齋きまつり、そのかぎり、神州は不滅であるといふことであります。ここに、私は、日本文明の独自性、恒久性、偉大性があると考へざるを得ないのであります。

ひるがへつて西洋を見てみますと、西洋はまつたく事情を異にしてをります。先に申しましたやうにフランス大革命が起こり、ここから自由・平等・博愛と人権の思想が生まれ、そして神聖なるものは人間であり、神ではないといふ思想の百八十度転回となりました。王制がくつがへつて共和国になつたといふことは、神聖をめぐつてそのやうな価値転換が起こつ

たといふことです。「共和国」といふのは、元々は西暦五〇九年に「レス・プブリカ」——つまり「リパブリック」——といふ名で生まれた小さなローマ共和国の意味にすぎなかつたのが、十八世紀のフランス大革命において圧倒的な近代的意義をもつた国家となるに至つた。それまでのフランスは「王制」でした。フランスの王制がいつ始まつたかといふと、西暦四九六年、フランスの神武天皇にあたるクロヴィスの即位をもつて始まつてゐます。この即位といふことが大へん大事なことなのです。大司教、法王である聖レミーが、シャンパーニュ地方のランス大聖堂でクロヴィス王にバプテスマ（洗礼）を授けたときをもつて、フランスの建国となつたのであります。フランスで最強の武将の長が、素裸になつて、水を張つた桶の中に入つて合掌し、その額に聖人が香油を塗る（これを塗油＝オンクシオンと言ひます）。この塗油の行爲をもつてクロヴィスは初代のフランス王となりました。

日本の場合は、橿原の宮におきまして神武天皇が即位式を挙げられた。戦後の歴史家たちは、神武天皇はゐなかつたと言ひはります。では、初代の天皇はをられなかつたのでせうか。初代の天皇が神武天皇なのであります。同じやうな議論が禅宗の世界においてもなされたことがあります。達磨なんてゐなかつた。おもに中国の学者が言ひ張つてゐました。そのときに、我が鈴木大拙先生は、「達磨大師がゐなかつたら誰が禅宗をインドから中国へと伝へ

たのか。伝へた人が達磨大師なのです、初祖なのですよ」と言はれた。これまで否定できる歴史家はゐないでありませう。

最初の日本の天皇が厳かに神々との交はりを結ばれ日本国を築かれたことは事実であります。これを西暦紀元前六六〇年の神武天皇の即位として伝へてゐるのです。同様に、紀元四九六年、フランス大聖堂で厳かにキリスト教の儀式によつて一人のガリア国の君主が王となつた。これがフランス王国（フランク王国）の始めであり、以後、その歴史は十八世紀まで連綿と続いてきました。どういふ点で続いてきたかと申しますと、キリスト教徒でない王はゐないといふ一事に秘密があります。

### フランスの「神聖」の系譜

ところで、「王」と「君主」とでは違ひます。王は「キング」ですね。フランス語では「ロワ」(Roi)と言ひます。一方、君主は「モナーク」です。キングはモナークではなく、モナークはキングではない。現代でも「モナーク」君主」はゐますよ。北朝鮮の金正日などは、モナークです、しかも絶対君主です。しかし、神々との絆は一切ありません。従つてこれは王

ではない。王といふものは、西洋にあつては、キリスト教世界の神との絆を失つたら最後、王ではなくなるといふことです。

クロヴィスの後を継いでフランスには何人も王が現はれました。有名な王のなかには十字軍のときに、最後に軍を率ゐてエルサレムに攻めこんだ聖王ルイや、英仏百年戦争のときのシャルル七世などがをります。シャルル七世は、皆さん良くご存じのジャンヌ・ダルクが仕へた王ですが、元々は、自他ともにまつたく王になる見込みのない、自信喪失した万年皇太子にすぎなかつた。当時のフランスはイギリスに国の半分は征服され、オルレアンにはイギリスの旗が翻り、オルレアン城主シャルル・ドルレアンは捕虜となつてイギリスに何年間も拉致されたままといふやうな絶望的状态でした。歴史に冠たるジャンヌ・ダルクの役割とは、まづオルレアンを開放し、自信のないシャルル皇太子を、彼こそ正当な王家の血筋であると説き伏せて、ランス大聖堂で即位式を挙げさせることにあつたのです。彼女のおかげでフランスは国体を取り戻すことができました。そして、そのときも、塗油の行為をもつて、つまり「神聖」を帯びることによつて王は王たることを得たといふわけです。

それと、フランスには、われわれの国にはない一つの大へん珍しい風習がありました。王が神聖の体現者であることを証する風習でありまして、何かといへば、病人に触つてこれを

癒すといふ行為です。フランスには、瘰癧るいれきといふ病気がありまして、現代では頸腺結核といふやうですが、首が結核で腫れあがる苦しい病気にかかる人が多かつた。王が即位の式を挙げますと、この瘰癧患者に触らなければならぬ。なぜなら、即位して王が王になるといふことは、ゴッド（フランス語ではディュー）の力によつて神癒力をあたへられることにほかなりません。ですから、即位と聞くとかうした患者がどつとやつてくるわけです。大革命でギロチンにかけられたルイ十六世は二千六百人の瘰癧患者にタッチしたといはれてゐます。その前のルイ十五世は二千人でした。ところが、革命が至るや、そのやうな神靈力を王が授かつてゐる、それによつて神と人民との絆を結ぶ仲介項であるといふ、そのやうな王の役割そのものが否定されてゆくわけです。ですから、フランスが大革命によつて王制から共和国に変はつたといふことは、とりもなほさず、神と人間の絆を絶ち切つたといふことにほかなりません。これこそはまさに革命の革命たるの意義であつたといふことにほかなりません。

ルイ十六世は、善良すぎるといはれた人です。趣味で錠前屋のやうなことをしてトンカチやつてゐるのが好きといふ人でしたが、けつして暗愚ではありませんでした。王妃であるマリー・アントワネットを愛し、一家の良き父親であり、国民を愛してゐました。ところがここに、王と王妃を、何万、何十万といふ貴族・僧侶を死へ追ひやらねばならないとする急

進思想の先導者たちがゐました。「啓蒙家」と呼ばれた、わが日本の「進歩的文化人」の走り、であります。

### フランス革命が葬り去つたもの

これらフランスの進歩的文化人——ヴォルテールを頂点とする——が、まづ王様の即位を妨げやうとしたことは、したがつて当然のことでした。王が靈癒力をもつて病人を治すなどといふことは、もつとも許しがたいペテンでありますから、最後のブルボン朝の王たちのかうした事蹟は記録から全部抹殺してしまつてゐます。そしてルイ十六世と王妃、王の妹であるエリザベット内親王をギロチンへと送り、血祭に挙げたことから革命の暴力が吹き荒れることとなります。

かねがね私は、あれほどのフランス王国がどのやうに失墜するに至つたのか、その運命の転回点を知りたくて、この五月に、ある現場に赴いて調べてまゐりました。現場とは、ルイ十六世一家が捕へられた、史上名高き「ヴァレンヌ」といふ名の寒村であります。一七九一年六月のある夜、ルーヴルのテュイルリー宮殿からひつそりと二台の大型馬車に乗りこんだ

王の家族が、ベルギーの国境のかなたに亡命しようとしたが、これを追ふ革命派の面々と追ひつ追はれつの手汗握るやうな逃避行のなかで、途中で何度か見破られながらも辛くも逃げおほせてゐたところ、つひにその運命の村ヴァレンヌで捕まつてパリに連れ戻される結果になります。

これが歴史の運命といふのでせうか、その時までには、逃亡の先々のリレー地点で替へ馬を用意させておき、これと巧く連絡がついてゐたのですね。ところが、あと数キロで国境といふヴァレンヌに馬車を疾駆させて着いてみると、約束の場所に人もなければ馬もありません。二百年も昔のことですから、村はづれは文目あやめも分からぬ真の闇。その間、待つてゐるべき家臣たちはどこにゐたのかと云ひますと、その名も「グランモナルクⅡ大王館」といふ旅館がありました——そこに私も旅装をといたのですが——何を勘ちがひしたのか、そこで待つてゐた。王様一行はエーヌ川といふ小さな川にかかる橋の向かう、わづか百メートルばかりの所まで、鳴りをひそめて近づいてきたのですが、落ち合ふことはできない。といふのも、闇につつまれた村のなかを進んでいきますと、がつんと馬車が何かに突き当たつた。小さなイギリス型の馬車で逃げるはずだつたのに、実際は大型ベルリン型のを作らせて、なかには財宝はもちろん。グルメな王様のこととてワインの特製だの何だのを詰めこんでゐた。そのた

めに、村の道の上にアーチ型に迫り出てゐた時計台に当たつて動けなくなつてしまつたので、やむなく馬車を下りてアーチの下をくぐつて行つたところに一軒家がありました。食料品店で、主人の名は皮肉にも、ソース。これがしつかり者で、村長のやうな役柄だつた。そのときには国民政府からお触れが回つてゐて、王を見つけたら必ず捕まへよ、さもなければ命はないと脅かされてゐた。ソースは、てつきりこれこそルイ十六世一家に違ひないと思ひ、夜つびて話を交はしながら王を引き止めようとする。王は何度も逃げる機会があつたのですが、国民を思ふ心から、それを見切ります。そのうちに松明をかざした多勢の人々が集まつてくる。王の近衛兵たちは、隙を突いて奪回しようとして群衆のなかから狙つてゐるので、もはや万事休す。ついに群衆の嘲罵を浴びながら屈辱のパリ帰還をとげます。その翌々年の一月にルイ十六世はギロチンにかけられ、さらに半年後に王妃が処刑されます。王妃は、ヴァレンヌに行つて帰つてくるまでの一夜に髪が真つ白になつたといひます。

さて、今年の夏の一日、私はそこに佇んで、歴史の非情といふものをしみじみ思つたのです。しがたない食料品店の主は一躍国民的英雄となつて、大きなポートルートが村の記念館の入口に飾られてゐました。もはやその家はなく、王一族が捕らへられた場所には、苔むす貧弱な小さな石碑が立つてゐるだけです。その前に二列に野菜がちよぼちよぼと植ゑられてゐ

るのも哀れを誘ふばかりです。二日間、何度も通りましたが、つひにただ一人の観光客にも遭ひませんでした。これが歴史といふものなのでせう。

しかし、歴史の真相、あるいは深層の歴史といふものもあるのです。深層の歴史とは、書かれたものだけではないといふことです。その後フランス国民はどう見たかと言ひますと、王を殺す必要はなかつた、われわれは王を殺すことで神聖なる何かを殺してしまつた、と言つてゐるのであります。

われわれは歴史の真相を見る目を養はなければならぬではありませんまいか。我が祖国・日本に対しても全く同様のことです。私がヴァレンヌで考へたのはむしろそのことでした。かうして今皆さんにお話しするにあたり、いちばん胸に甦つてくるのは、あの苔むした小さな石碑の姿です。しかし、フランス人にも良心があります。首切り役人は、ルイ十六世の首にギロチンの刃を落としたあと、苦悩のあまり病氣になり、半年後に死にました。「ここに永代供養料をお納め致しますので、このお金でぜひ国王陛下の菩提を弔つてください」と言ひ遣して死んだのです。

そもそもフランスで「王」といふことは、即位式を通して、ユダヤ・キリスト教世界において最も尊敬されてゐる往古の王ダビデの後継者になるといふことです。しかるに、歴史と

は奇妙なものでして、王をギロチンにかけることでこの連綿たる「神聖」の絆を断ち切り、人間こそ神聖であると宣言したフランス人が、それからわづか数年後にナポレオンの登場を許してしまふこととなつたのです。しかも、ナポレオンは、なんと、キングどころか、今度はエンペラーになつてしまつた。同じ大革命の民が瞬く間に帝国の到来を許してしまつた。これは何故でありませうか。

一介の砲兵士官にすぎなかつたボナパルトが、イタリア、エジプトへと遠征し、着々と天才的成功を収めます。そしてローマ法王をノートルダム大聖堂に呼んで、王冠をかぶせて貰ふのではなく自分で自分の頭にかぶつてみせ、周囲を驚かせた。このエンペラー、皇帝になつたことの意味は何かと言ひますと、こんどはキリスト教世界ではなく、古代ローマ帝国の継承者になつたといふことです。言ひかへれば、「シーザーの継承者」になるといふことです。王になることはキリスト教世界のダビデの継承者となり、皇帝になるとは古代ローマ帝国のシーザーの継承者になるといふことです。片方は神聖世界、一方は世俗世界の最大の統轄者になることを意味しました。

そもそも「エンペラー」とは何であるかといへば、これは「インペラートル」から来てゐます。そのインペラートルの最大のモデルがシーザーでした。シーザーは、紀元前一世紀、

当時の世界最大のローマ帝国の末期に現れ、自分を神として敬はせた。これに対して、フランスは「ガリア道」と呼ばれる僻州の国の一つにすぎなかつた。「王」とは、地方のカントリーカミの首長を中央の首長が認めるときの呼称でもあつたことを忘れるわけにはいきません。たとへば、中国首脳にとつて、日本の天皇は「日本道」の王にすぎないとも考へられてゐる。ですから、天皇が中国にお出かけになつたといふことは、自ら中国から印綬をさづかつて王様にしてもらふことを認めるやうなものである。われわれは猛反対しましたが、残念ながらそれは既に行はれてしまひました。さういふところに気づかない日本の政治家の歴史観の欠如なるものは罪万死に値するであらうと思ひます。

ともあれ、ヨーロッパでは、皇帝といへばインペラートルであり、最大の見本は「カエサル」(シーザー)でした。ドイツではウイルヘルム二世は、「カイザー」と呼ばれ、ロシアではニコライ二世は、「ツァー」(ツァーザリー、カエサルのロシア語発音)と呼ばれました。ことにドイツのカイザー、ウイルヘルム二世は大変な帝王でありまして、明治の日本人はすくなく尊敬してゐました。陸軍はそれまでフランスを手本としてゐたのに、途中で全部ドイツ式に切り替へたほどです。森鷗外や乃木將軍もみなこのドイツに引かれて留学してゐます。乃木さんは、ウイルヘルム二世のもとで最大の戦略家とされたモルトケ將軍に会つて、その指

導を受け、これを実戦に応用して日露戦争であれだけの戦ひをやつてのけることとなります。

しかしそのカイザーも第一次大戦に敗れて、一九一八年のドイツ革命によつて退位させられ、ロシアのツァーのニコライⅡ世も、一九一七年、ロシア革命によつて王座を追はれるに至りました。だいたい、西洋では敗れた王をも帝王をも許さない風習があります。ここが日本と異なる一つの点でありまして、大東亜戦争に我れ敗れたりと言言された昭和天皇を、だからといつて退位せよと迫つた日本人が一人でもゐたでせうか。

ともあれ、一方においてキリスト教の王の精神的世界、他方において古代ローマ帝国の包括的世界は、それぞれヨーロッパ諸民族の壮大な夢を織りあげ、今日に至つてゐます。いまだ——にです。(注)

フランス人はいまや、日本人以上に愛国心が強い国民といへます。(愛国心パトリオチズム)といふ言葉は必ずしも好まれてゐませんが)。その基はどこにあるかといふと、使命感を持つてゐるところにあります。「自分たちはかつてキリスト教世界に君臨し、つぎはローマ帝国の継承者となつた。自分たちがもたらした自由・平等・博愛・人權の概念は世界の宝である。自分たちはそれを拡げる使命ミッションを持つてゐるのだ」といふことです。なにゆゑナポレオンが、王制をギロチンをもつて終はらせたフランス民族の上に皇帝として君臨し、あれほどまでに人心の収

攬に成功したかといへば、このフランス人の使命感に訴へたからにほかなりません。ナポレオンはかう兵士らに信じさせたのです。「我々の血をもつて獲得した素晴らしい使命を全世界に伝へよう」と。したがつて、一七九二年にフランス初代共和国が出現したときに、この思想をヨーロッパの周りの国に伝えることこそ共和国の崇高な使命とされたのです。「共和国二年の軍隊」といふ言葉がフランスでは今でも誇りを持つて伝へられてをります。当時、フランスの軍隊は約百万人でしたが、彼れらは襤褸ぼんぼをまとひ、履くものもなく、ほとんど素足でした。周りの国々はこぞつて、革命で麻と乱れたフランスに襲おそひかかつてこようとしてゐた。とくに、隣の神聖ローマ帝国のレオポルトⅡ世。これはギロチンにかけられたマリー・アントワネット王妃の兄さんで、仇を打たうとして進撃してくる。四面楚歌です。そのとき、初めてフランスに愛国心なるものが生まれたのです。そのなかで歌はれた「ラ・マルセイエール」が、フランス国歌として、いまもつて生き生きとその感情を伝えてゐます。「革命暦二年の軍隊」は、永遠に栄光をもつて彼らの心を通りすぎていくといへませう。

一つの国は、単に始まりがあり、進展があり、現在があるといふだけではありません。その国でなければ、その国民でなければならぬ使命といふものがあります。フランス人は実によくこの事を知つてゐるやうに思ひます。私はフランスで長いあひだ生活して彼らと関は

りを持ち、その間に一番考へたのはこのことでした。当然、わが日本と比較せざるを得ません。私はフランス人の持つこの使命感に最も打たれてをります。

現在の「EU（ヨーロッパ連合）」も古代ローマ帝国の夢の再現といへませう。ヴィクトール・ユーゴーは既に「ヨーロッパ合衆国」と言つてゐます。ある意味からして、つひにそれが可能となつたといふわけです。しかもフランスはその中心になりたい。自信満々といつたところです。

さて、ここに「キング」といふものがあり、「エンペラー」があり、日本には「天皇」があります。天皇はエンペラーと訳されますが本質的には同じではありません。なぜなら、いまお話したやうに、エンペラーはインペラトルといふのは古代ローマ帝国を夢に見たことであり、その元首はシーザーたらんとするといふことです。もつと大事なことは軍隊の最高指揮官を兼ねるといふことです。天皇はさういふ立場ではない。軍隊の最高指揮官でない場合はインペラトルとは呼ばないのです。

もつとも、今次大戦中に天皇を大元帥陛下とお呼びしてゐたことはありました。しかし、いまでは大元帥は消え、それでも天皇は残つてゐます。天皇といふご存在自体に変わりはありません。この点を我々は先づインペラトルとの違ひといふことで認識すべきであらうと思

ひます。そしてカイザーが、ツァーが、ナポレオンが、あるいは神聖ローマ帝国の皇帝たちがかつてのシーザーたらんとした。そしてそれによつてローマの神々の子孫たらんとしたやうに、日本の天皇は歴代天皇の神々つまり天照大神の子孫にあたるといふことであります。これを除いて天皇はありません。

フランス革命の犠牲者の数は龐大でした。発明されたギロチンで首を切られた人間は一万七千人、ほかに全国津々浦々で起こつた反革命の運動を革命政府が抹殺した数知れない人々があり、パリで投獄された人間は五十万人にのほつたと言はれます。しかしその後、この革命思想が世界中に飛び火して、スターリンのもとでどれくらゐの人々が殺されたか、中国の文化大革命でどれくらゐ殺されたかと考へたら、実に微々たるものであつたと言はざるを得ません。

我々の歴史に対する見方とは、やれルネッサンスのつぎには近世が来、ついで近代の進歩の時代、そして二十世紀といふやうな直線的、進歩段階の見方となつてゐますが、歴史の深層から見ればそんなものではありません。人間と神々との絆こそ神聖なものであり、人類史の大半はこの絆の上に織りなされてきたといふことであります。わづか二百年ほどの間にさうした絆は否定され破壊されたやうにみえますけれども、人間のなかに「これは神聖だ、そ

のためには命も捨てる」との感慨が生きつづけるかぎり神聖は生きつづけるでありませう。逆に、この神聖感が失はれたときに一つの国は亡国の運命をたどること必定であつて、かう考へれば我が日本が如何にいま危い一線に立つてゐるか明瞭であらうと思はれます。

### 死者の靈を祀ることは神聖な行為

ほかのどの国よりも日本は、この神聖が見えなくなつた国とはいへないでせうか。いふところの「情報化」の時代にもかかはらず、国民的なメンタリテイ、もしくは傾向とでもいひませうか、事態を真直ぐ見てとることができなくなつてゐるやうに思はれる節があります。情報化と言ひましたが、じつはそこにこそ問題があるのではないか。「情報」の名において、実際に行はれてゐるのは「イントクシケーション」にすぎないことがしばしばだからです。イントクシケーションとは、毒を盛る行為、ひいては「害毒化情宣活動」といつた意味の言葉です。主に社会主義圏の隣国から日本に干渉して政治と民意を変へさせようとして繰りかへし仕掛けてくる活動がそれで、軽信的傾向の強い日本人は一般にそれをマスコミをつうじて「情報」と受けとり、害毒の作用に気づいてゐないのがほとんどです。一種のマインドコ

ントロール的なものであつて、このコントロールをとくとき、目覚めるといふことは非常に難しい。それといふのも、この「毒」には「平和」といふ美名のレッテルが貼つてあるからです。江藤淳さんの言はれる「言語空間」といふ、目にみえないこの毒は、敗戦国日本を永久に抑えておかうといふ占領国側の鉄輪となつて我々をいまなほ締めつけてゐます。そのため、我々は事態を真直ぐ見ることができなくなつてゐるといふことです。

ある国が本当に自由で独立国であるためには、憲法でそれを保証したり平和条約を締結するだけでは足りません。少なくとも三つのことをもつてこの自由独立が保証されなければならぬ。まづ第一に、我々の子弟を我々が教育したいやうに教育する権利と自由を持つといふことです。それから、我々固有の祈りの場をとほして先祖を祀る、戦死者を祀る、それを我々の長い風習に従つて行ふといふことです。これは文化の独自性を保つといふ問題とつながつてきます。そして第三が——まつさきに置かれるべきかしれませんが——国防の自由といふことです。要するに、教育、祭祀、国防の三つのどれにおいても、我々は自由ではないのです。我々は決して独立国ではない。我々が真の独立国たらしめることを妨げようとする多くの力が依然働きつづけてゐることを思はなければなりません。

私としては、しばしば現代的視点から忘れさられてゐる「神聖」の名において訴へたいも

のがあるといふわけです。とくに戦死者の霊を祀ることはどこの国においても第一義的に重要な行為とされてをり、断じて諸外国の干渉に屈してはならないところです。フランスにおいてこの慰霊の風習がはつきりと芽生えたのは普仏戦争のとき、ついで第一次世界大戦のときでした。一九一四——一九一八年のこの戦ひにおいて、日本の人口の半分にも満たないフランス国民のなかで百五十万人が戦死し、その倍の三百万人が負傷しました。これは大変な数で、他の国だつたら国そのものがもたなかつただらうと言はれてゐます。つまりそれほど、意外にもフランス軍の抵抗は強かつたといふことで、これには一番の敵であつたドイツ人が驚き、また世界中が驚いた。この点が分らなければ今度の第二次大戦におけるレジスタンス活動の理由も分からないでせう。敵を軽く見ることは戦時においてもつとも慎むべきことですが、フランスはうんと軽く見られてゐた。ドイツ人は相手がこんなに抵抗するとは思つてゐなかつた。この第一次大戦で五年間の百五十万人の戦死者は、ほとんど最初の一年、二年で亡くなつてゐます。といふことは、いかに身を張つて戦つたといふことです。「ヴェイルダンの戦ひ」といふ西部戦線の有名な戦ひの跡は、いまなほ縹渺として見渡すかぎりの墓地となつてゐます。あまりの數に、フランス政府は、戦争が終はるや毎年何百台と特別列車を仕立ててそこにフランス全土から遺族を送つたほどでした。かうして彼らの新しい信仰が生

まれるに至りました。死者に対する信仰であり、「死者は聖者である」と。当時のクレマンソー首相は「死者は生者に対する権利を持つてゐる」と宣言し、これは多くのフランス国民を感動せしめました。第二次大戦をへて更にこの英霊信仰は強化され、今日に至つてゐます。

一方、これと我々の国を見比べますと、あまりにも多くの点で本質的に異なる面があることを悲しいことながら認めざるを得ません。私はずいぶんと両国の間に立つて考へてきました。フランスは戦勝国であり、日本は敗戦国である。しかし、だからといつて、我々の国の情けなさ、だらしなさといふものを、全部それをもつて片付けるわけにはいかない。戦後五十年たつて、昨年以來、はつきりと私どもが悟つたことは、日本は二度負けた。最初はアメリカに負け、つぎは我々自身に負けたといふことであります。あまりにも腑甲斐なかつた。いまこそ目覚めなければこれからの日本はありません。

### 天皇の御存在と日本人の使命

今後、どうなるであらうか、文明論的に——つまり前述のごとき非進歩主義的歴史観の上から——申せば革命と共和国の時代をへて再び神聖の復権の時代が到来するであらうと思ひ

ます。循環の法則といつた力がはたらいてさうなるでありませうが、しかし、それは必ずしも往古のごとき宗教的なものの再現といふことにはならないでありませう。むしろ、宗教と科学を二にして二でないやうなものたらしめる新しい文明的傾向がきつと生まれるのではなからうかと思はれるのであります。

すでにして二十年来、かうした傾向は世界的に広がりつつあり、科学者の間からも宗教家ないし文化・芸術家の間からも相互的歩み寄りの動きが顕著になつてきてゐます。非常な親日家でもありましたかつての文化大臣アンドレ・マルローが、いまから二十年前に那智の滝と伊勢神宮である種の天啓を得て、二、三の大著のなかでそのことを語り、いまやそれが欧米の研究者に大きな影響を及ぼしつつあることなど、その一例と申せませう。何を彼が感じたのかといひますと、那智の滝で心から感動したあと、つぎに伊勢の内宮で「伊勢とアインシュタインの相対性理論の世界とは収斂する（フランス語でコンヴェルジェ、英語でコンヴァージ）」と言つたのです。つまり伊勢にあるものは宗教的なものだけではない。また、アインシュタインの相対論的宇宙は人間精神の超越性を排除するものではない、それらは一になりうるものである。言ひかへれば、科学は神秘を許容する、その逆もまた真なり、といつた意味であらうかと思はれます。しかも、この発言をほかのどのサンクチュアリー（至聖所）、たと

へばエルサレムとかベナレスで得たのでもなく、日本で得たといふことの意味は限りなく大きいであらうと思はれるのであります。

日本と違ひましてフランスは、国民の父ともいふべき王をギロチンの犠牲にすることによって自由を獲得した国であるゆゑに、ここから後悔は深い刺としてフランス国民の胸に突き刺さつてきました。何がいつたい起こつたのか。なるほど自由・平等・博愛の精神は世界に伝へえたかもしれない。しかし、そこには、何かしら、父親殺しによつて自分の生命を贖つたといふ罪障、喪失感が憑きまとふ結果となつたのです。王を殺すことで実は神を殺したのだ、そして神を殺さうとも神聖への深い渴望は残る。これの渴望を如何に癒すか——これが以後、文化社会的な大問題となつていくからです。これはプロテスタント圏でも同様でありまして、ニーチェの哲学的命題——「価値転換」は深くこれと結びついてゐます。また、二十世紀における新興の大国、アメリカの社会においても、「父親を探す世代」は深刻な病状として文学や映画に反映する結果となつていきます。誰でも知つてゐる例として、『エデンの東』一つを挙げれば十分でせう。

かつては王の体に触ることによつて病まで癒さうとした国民が、その神秘力を失つたとき、いまや何によつて心の病を癒すことができるのでせうか。

これにひきかへ、日本はどうでせうか。この点、我々は、実に幸せであると言はざるをえません。関西の大地震のときに、天皇陛下と皇后陛下が被災地にお出かけになり、ひざまづいて一人々々の被災者の手をとつておいでになられましたね。被災者は深く感動し、これを伝へ聞いた国民も感動した。これに対して村山首相は逆に哀れでした。新聞は何を言つたかといふと「なぜ首相はああいふ風に突立つてゐたのか。両陛下はひざまづいてをられたの」と。

もつとも村山首相では癒しの力はありませんよ。最も尊いところにをられる天皇が私どもに触れてくださるがゆゑに私どもの心は癒されるといふことであります。これが非常にありますがたい天皇の御存在の意味といふものです。遠い八世紀の昔、悲田院を造つて貧民を救はれた光明皇后は、癩者の膿をも吸はれたと伝へられてゐます。昭和天皇は、「朕の身は如何なりとも……」とおつしやつて、敵国最高司令官マッカーサーのまへに捨身飼虎のお姿をおとりになつた。神聖とは、元来、無限の高みにあつて輝いてゐるものですが、このやうに俗世に下つて光を四方に放つ瞬間といふものが歴史のなかにあるものです。ある意味からすると、私は、敗戦による日本国民の不幸は、この一瞬の天皇の行為によつて浄化されたときへ信じてをります。イエスは、もし十字架にかけられなかつたら「キリスト救世主」にはな

らなかつたでありませう。そして、もともと、キリストは、「額に塗油された者」の意で、さうであるがゆゑに、未来において民を救ふ靈力をもつた「イスラエルの王」を意味してゐたのです。

フランスにもはや王はなく、イギリスは王……女王はあれども、もはや王室は尊敬されません。チャールズ皇太子とダイアナ王妃の「離婚」を認めたことで、これを認めないといふ社会による神聖の絆は、ぶつくり切れたといふことなのです。

フランスの王が瘰癧患者に触つたやり方とは違ひますが、日本の天皇は代々、少なくとも二つの道をとほして国民の心を癒してこられました。一つは和歌です。「重波」の寄する国、この大和の国の心は歌といふことで、宮廷は何よりも「歌どころ」とされてゐます。しかも連綿として二千年も続いてゐることで世界で唯一の国です。

もう一つは昭和天皇がお始めになられた全国御巡幸であらうと思ひます。これだけ多くの国民と接した元首は世界史に類がありません。私どもは、天皇の御存在を非常に忝けないと感じてゐますが、一つにはそれは天皇御自身が身を潔斎してをられるといふことから来てゐます。最大の潔斎は十一月二十三日の新嘗祭です。これは日本人の智恵だと思ふのですが、どんな天皇様の後光であらうとも一年の間に擦すり切れてゆき、冬が近づくと効力が失はれ

る。それを神人共食といふ形で、採れたばかりの五穀を御神殿で召し上がることによつて、神より靈力を再び授かる。よみがへるわけであります。よみがへることにより、天皇が再び天皇となられたことによつて国民と接してくださればこそ、ありがたいとされるのであります。それが最も徹底した形で行はれるのが大嘗祭といふことになります。進歩的文化人やそれに同調するプレス妨害にもかかはらず、六年前(平成二年)に大嘗祭が立派に執り行はれ、新帝が即位されたことは、私どもの記憶に新しいところです。全世界の元首がそこに馳せ参じました。

天皇は、「人間宣言」といふあの変な呼び名の出来事にも関はず、依然として人間でなく天皇として留まつてをられます。このことは厳として変はることはありません。さうであることをむしろ世界の大半が望んでゐるのです。望んでゐないのは、もはや日本人ではない日本人と、彼らを焚きつけ、謀略によつて日本を貶めようとする第三国です。「神聖なもの」と日本人の絆を断ち切つて、それによつて革命を達成しようとする人々であります。

社会党の人々は、表面はおとなしくしてをりますけれども、政權を握つたらいづれ皇室は亡きものにならうと考へてゐる点では一貫して変はることはありません。彼ら社会主義者にとつて、理想とは、革命といふ名の神聖の抹殺であり、神聖の保持者たる王制ないしは天皇

制を覆して彼らの考へる「平等」と「平和」の理想郷を実現しようといふことです。その結果がどういふことになるかは、わづか五年前の「現代史」(ソ連崩壊)がそれを証明したばかりであるにもかかはらず——です。

私どもは、二度とさういふことに騙されてはなりません。誰が何と言はうとも、日本人の本当に宝とするものをここで再認識し、いまの日本人にいちばん欠けてゐる愛国心の根拠を取りもどすことです。この根拠とは、一に使命感、二に統一感、この二つであります。いかにしたらこれら二つを再び見出しうるか。その手がかりとなる考へ方を本日のお話のなかで述べたいと望んだ次第です。

### 質疑応答

〔問〕革命の本質が、神と人との絆を絶つものだといふお話をお聞きして、非常に驚きました。さういふ革命の思想が日本にどういふ影響をあたへてゐるのでせうか。

〔答〕革命の実行は、たしかに、神聖破壊と不可分です。フランス革命では、まづ、初代王

クロヴィス王の建てた聖堂パジリカを破壊し、さらにパリのノートルダム大聖堂に大事にされてきた聖なるアンプール（王の額に塗油するときの聖なる香油入れ）を破壊してゐます。

敗戦直後、日本の共産党と結託した米軍当局は、当初、伊勢神宮の破壊を考へてゐました。しかし、天皇の玉音放送によつて血涙を呑んで敗北を受け入れた日本人も、伊勢が破壊されたら総決起するだらうと分かつて、実行の拳に出ることを放棄したのです。

一つの国を攻め滅ぼすときは、まづその寺院から破壊します。逆に、国の再建は、寺院の復興から始まるのです。イスラエルがさうです。ソ連全盛の時代に破壊されたギリシア正教寺院は、ソ連崩壊後、いま、凄まじい勢ひで復興され、おびただしい信徒を集めてゐます。そのやうなものです。

そもそも共産主義思想は、十六世紀のトーマス・モアのユートピア思想に一つの元型があり、また、民主主義思想の元型となるとギリシア・ローマ時代に遡ります。それが、これほどの徹底した神聖破壊の活動と結びつくに至つたのはフランス革命以後のことで、それに先立つて宗教改革の運動があつたからです。さらに宗教を阿片とするソ連の第三インターナショナルの世界的指令が下され、日本をターゲットにするに及んで、ナイーヴな共産党員たちは天皇制を諸悪の根源と考へるやうになりました。ソ連崩壊や中共の変質にもかかはらず、

この思想はいまなほ生きつづけ、隙あらばと窺つてゐるわけです。

しかし、日本のこの連中の考へは非常に遅れてゐます。依然として彼らは、神聖なるものは迷信であり、そこから解き放つことが人民の解放であると信じてゐますが、現代の西欧世界が発見したことは、民主主義は神聖の維持と些かも矛盾しないといふことです。この考えは、イギリスよりもフランスの方が強いやうです。カトリックの国フランスは、王政は覆りましたが、この感覚は非常に強いといつていいでせう。

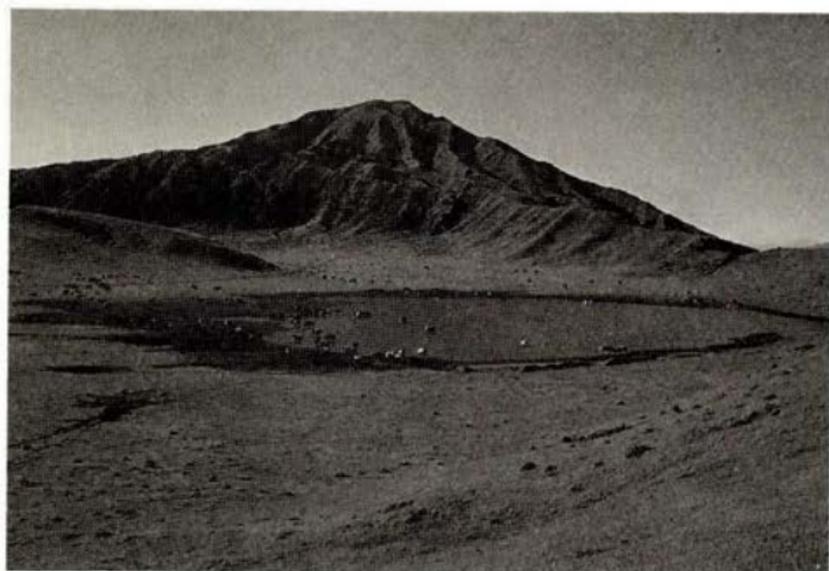
(注) 古代ローマ帝国は消えたが、その壮大な夢は驚くほど現代西欧の人々の心ふかくに残つてゐる。私自身、いま、その生ける証拠を目の当たりにしようとしてゐる。この講義記録を読みなほしつつある現在、パリの「パンテオン」万神殿にアンドレ・マルローを奉祀するフランスの国家行事に列席すべく、同政府から招待されて旅立たうとしてゐるからである。パンテオンはローマに始まつた。国の最高の偉人を神として祀るローマ以来の伝統が、かうして二十世紀末のこんにち、フランスで生きてゐるのである。日本では、東郷元帥や乃木將軍を神社に祀つたやうな風習はおろか、靖国神社で自国の英靈を拝することさへまならないといふのに——(平成八年十一月)。

講義

人の心を種として

元 日特金屬工業(株)常務  
(社)国民文化研究会 顧問

加納 祐五



はじめに

「心」について——クラークの所説に関連して——

古今集仮名序について

聖徳太子の御事業と和歌の伝統

歴代天皇の御製について

明き心を皇方に

むすび

はじめに

皆さん、お早うございます。今日は合宿も四日目でお疲れのことと思ひますが、しばらくご清聴をお願ひ致します。本日の演題は「人の心を種として」と致しましたが、これは我国最初の勅撰和歌集『古今集』に撰者紀貫之が書きました「仮名序」からとつたものです。昨日、長内俊平先生のお話の中にも「むらぎものところをたねのをしへ草おひしげらせよ和しまねに」といふ明治天皇の御製がございましたが、これも恐らくこの序文の言葉からおとりになつたものでせう。日本のをしへ、これを広く解すれば日本の文化、伝統といふことにもなりません。それは「心」を種としてゐるのだといふお示しでせう。仮名序の冒頭は「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。(中略)この歌、天地のひらけ初まりける時より出できにけり」となつてをります。これは、日本歴史の始源、神代から伝へられた和歌は、人の心を種として、様々の言葉となつて伝へられたものだといふことを端的に言ひ現してゐます。貫之は、この和歌の道の永久に相続されることを心から希つたのでしたが、明治天皇の御製に「ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の

道」とあります様に、この和歌は人生そのものの姿の様に「ひろくなり狭くなりつつ」時には栄え、時には衰へながらも絶えることなく日本歴史の上に、その伝統の中心として伝へられて来ました。その「心」とは抑々何か、それはどの様にして伝へられて来たか、その様にして伝へられて来た日本の心と伝統の現代における意味は何か、その様な事について私の考へを述べたいといふのが本日の主題です。

「心」について——クラークの所説に関連して——

この合宿での基本的な心得は「心を働かせること」であるといふことを諸君は最初に聞かれたことと思ひます。それがどういふ意味であるか理解出来なかつたかも知れませんが、四日目となつた今日では、おぼろげながらも解つて来たのではないでせうか。心を働かせるとは他者ひとの心を知らうとする心でもあります。この合宿で昨日まで全く知らなかつた人達と今日は心おきなく話すことが出来るのは、心の働きによつて心が通じ合つたからでせう。心が通じ合つたとき、お互の間に信頼が生まれます。信じ合つた者同士が隔意なく言葉を交はすときに感じる生き生きとした感触、それはそこにいのちが生まれ、いのちを感じることに



出来たからだと思ひます。信じる、とかい、のち、とかいふものは何かと問はれば、説明するのは難かしいですが、それはこの様な経験のうちに実感されるものであつてそれを感じるものが「心」だといふわけです。この合宿は昭和三十一年に始つて以来、毎年欠かすことなく今年は四十一回目を迎へましたが、その始源に遡れば、遠く昭和四年、少壮篤学の士、黒上正一郎先生により、聖徳太子の御教へに導かれて第一高等学校に創立された「一高昭信会」といふことになります。私は縁あつて昭和五年に昭信会に入りましたから、以来既に六十数年になりますが、その間、私達が一貫してやつて来たことは何であつたかといふことを顧みてみますと、それはやはり、心を守り心を育てるといふ一事でありました。それは一面、戦前、戦中、戦後を通じて、「心」が如何に蔑ろにされて来たかといふこと

を示してゐるのですが、その事情について述べることは今は差しおいて、その様な「心」とは、どういふ性質のものであるかについて、私としては教へられるところ大きかつたクラークスの所説をご紹介します。クラークスと言つても御存じの方は少ないでせうが、彼は一九五六年、八十四才で亡くなつたドイツの学者で、様々の學問を修めましたがそれらは總合されて人間學とでも言つたらよい様なものに到達しました。彼の所説の中心は、人間は肉體のほか心 (Seele) と精神 (Geist) を持つてゐると言ひます。私達は普通に、肉體 (物質) と精神といふ二分法に馴れてゐますが、それが思ひ違ひをするもとなのだと彼は言ふ。一般に精神と概括されてゐるものの中には、心情 (魂) と理知 (ロゴス) といふ異なる働きをする二つのものがあつて、何れも人間にとつては極めて大切なものだが、両者は時に抗争し、時に協力する關係にあり、歴史の流れの上から言へば、古代には心が優勢であつたが漸次精神が強大となつて心を圧倒するに至つた、これが特に西欧文明衰退の原因だと言ふのです。それでは心と精神はどういふ働きをするのでせうか。一言で言ふなら、心とは他者 (人間その他の生物のみではなく無生物としての自然も含めて) の心を感じてこれと親しく交はる能力であり、一方、精神とは、他者に一定の距離をおいて対象としてこれを捉へ、論理的に整理して明確な形として把握する能力です。心は宗教的芸術的表現を志向し、精神は科学的技術的

進歩に傾斜するものだとも言へるでせう。古代人は森羅万象の心を受受することが出来、宇宙のいのちにしつかりと結ばれてゐた性情豊かな人達でした。そのことを彼は太古の神話や祝祭の遺蹟や言ひ伝へを觀照し解釈することによつて信知することが出来ました。一方、文明の進歩は必然的に精神の強大化が無くては達成できません。ですから両者のよき協力は極めて大切な事ですが、問題は心の衰退を招いたといふことです。つまり人は皆「心なき人」、人間らしい暖かさ親しさを失つて万事を理屈で割り切つて済ます様な人になつてしまつたことが、西欧文明としての近代文明の末路であると警告して心の復権の急務を説いたのでした。

### 古今集仮名序について

ここで一般的な人間論から日本の伝統へと話題を移しますが、『古今集』はご承知の様に醍醐天皇の勅によつて紀貫之が主となつて編纂しましたが、その仮名序の冒頭は次の通りです。

やまと歌は、人の心を種として、よろづ言の葉とぞなれりける。世の中にある人、こ

とわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり。この歌、天地のひらけ初まりける時より出できにけり。

ここでまづ一番肝心のことは、和歌の種は「人の心」にあるといふことです。心についてのクラゲスの説を思ひうかべながら考へてみませう。人は見るもの聞くもの、様々の経験のうち、心に感受したところを言葉にするが、その感受するところのものは何かと言へば、他人ひとであれ、その他の生きものであれ、或いは山川草木といふ自然界であれ、それら万象の持つ心です。花に鳴く鶯も水にすむ蛙も、生きとし生けるものは皆歌をうたつてゐるではないか、といふのはその事をよく言ひ現してゐます。この様にして和歌は、人であれ自然であれ、万象からの呼びかけに対して応答する言葉なのです。かうして心の通ふところこそ相互に親しみ和らぐ世界があり、いのちを生きたといふ直接の経験があるのだと言へるでせう。天地も動かし、死者、祖先の魂をも感動させ、男女の間を味はひ深いものにするといふのは、

この事を言つてゐるのです。猛きもののふの心をも慰めるといふのには、先の大戦でも、死地に赴く勇士の多くが、尽きせぬ思ひを綴つた遺書の最後を和歌をもつて結んだことが思ひおこされて痛切なものがありません。もう一つ、此処で落すことの出来ないのは「力をも入れずして」の一句です。クラージュスが、心の働きの有り様は「受動的なもの」だと言つてゐることとよく照応してゐるのですが、その言はんとする処は決して所謂「消極的」といふことではなくて、はしいまま恣はしいままな作意を差挟まないことを意味してゐます。我々は皆、宇宙万象のいのちにつながることによつて生かされてゐるのだといふことを感得する謙虚な態度を言つてゐるのです。相手が人であれ自然であれ、それを動かすものは勝手気儘の考へや判断ではなくて、人間のあるべきものと、真心であることを忘れてはなりません。「この歌、天地ひらけ初まりける時より出できにけり」といふ天地の開闢は、伊耶那岐、伊耶那美両神の国生みのみこときことを指してゐるのですが、日本の歌の源流は、神ごころの表出にあつたことを明らかにした大切なところですから。それはやがて神と人、人と人、君と民との心をつなぐことが和歌の本質であることを明らかにしたのでした。

古今集に先だつて万葉集といふ我々にとつて最大最高の歌集があるのはご承知の通りです。万葉集の成立と古今集の編纂との間には百数十年の隔たりがありますが、その間、盛ん

な大陸文化の流入があつて、殊に平安朝の初期あたりからは宮中における公の言語は殆んど漢詩漢文で占められ、大和言葉は日陰者の地位に追ひやられてゐました。万葉の時代は「言霊の幸ふ国」といふ言ひ伝へのままを信じて、人々はその直情そのままを大らかに歌ひはらせば事足りた時代でしたが、新たに歌集を編纂して唐文化の圧迫下に逼塞した和歌を再び舞台上に引戻すためには、どうしてもやまと歌とは抑々何かといふことを明らかにする必要がありました。それがこの「仮名序」ですが、貫之は醍醐天皇の勅を奉じて勅撰集編纂の業に奉仕することによつて、日本国史を貫く精神を日本の自然と人情の風雅のうちに確かめ、歴史護持の感慨を述べたのでした。さうしてこの「序」は次のやうに結ばれてゐます。

人麿亡くなりたれど、歌の事とどまれるかな。たとひ、時移り、事去り、たのしび、かなしび、行きかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずして、正木の葛長く伝はり、鳥の跡久しくとどまれらば、歌のさまをも知り、ことこの心を得たらむ人は、おほぞらの月を見るがごとくに、いにしへを仰ぎていまを恋ひざらめかも。

貫之は、人麿を我国第一の歌聖と尊敬してゐましたが、その人麿も亡くなつて久しく、その間、悲喜さまざまの交代の中に時代の変遷はあつたが、歌の事は絶えることなく続いてゐるのではないか。かうして文字にうつして歌が永く伝へられてゐるからには、歌の本来の意味を知り歌の心を心得てゐる人々は、どうして古い時代の歴史や古人の事蹟を貴び、いまの時代にあつてもその美しい心ばへを懐しく恋ひ慕ひ大切にしないことがあらうか、と言つてゐるのです。貫之は、かうして和歌の本質を明らかにした上で、その伝統の永続を心から希つたのでしたが、その願ひは、その後の歴史の上にとの様に実現されたのでせうか。古今集につづいて二十一もの勅撰和歌集が、いづれも天皇を中心として撰ばれて来たやうに、和歌の伝統は常に皇室を中心として相続せられ、日本歴史の骨格を形成して来たのです。これから御歴代の天皇方の御製の幾つかを拝誦することによつて、その趣を幾分なりともうかがひたいと考へてをりますますが、その前に、聖徳太子について一言だけ触れておきたいと思ひます。

### 聖徳太子の御事業と和歌の伝統

先にも申しましたとおり、私達のいとなみの抑々の始まりは、優勢な大陸文化との交流接

触の時代に、これを撰取融化して日本文化の基礎を創られた聖徳太子の御精神を学ぶことにありました。太子は、古今集編纂の時より約三百年も前の方ですが、今日、その御歌として長歌一首（『日本書紀』）短歌二首（『万葉集』）及び『上宮聖徳法王帝説』に各一首）が伝へられてゐます。夜久正雄先生の御研究によれば、これら三首の御歌は、いづれも万葉集の先蹤をなすものだとしてゐます。今はそれについて述べる余裕がありませんが、和歌の伝統と太子の日本文化創業の基底との深い関連を思はずにはゐられません。先に申しました様に、貫之によつて明らかにされた和歌の本質は「人の心を種として」心を開き、他者の心と交流融和することでした。和歌といふ名称は恐らく「やまと（大和）歌」といふことに由来してゐるのでせうが、それは同時に「和らぐ」といふ意味合ひを含んだものであることも疑へません。抑々、日本の国を「大和」とか「和国」と言ふのも同様の趣旨だつたと思ひます。ところで太子の有名な「十七条憲法」の第一条は、これも亦人口に膾炙した「和を以て貴しと為す」の一句を以て始まり、これは十七条全体を一貫する基本の心得とも言ふべきものです。けれども「和」といふのは漢字です。漢字はその性質として抽象的な概念を含蓄してゐますので、その内容を具体的に誤りなく伝へるためには続いて意味の解明が必要です。そこで第一条の全文を読んでみませう。

一、に曰く、和を以て貴しと為し忤ふこと無きを宗となす。人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。

言ふまでもなく太子の頃にはまだ和字も和文もありませんからすべて漢文で書かれてゐます。その漢文に日本の心をうつすには大変な御苦労があつたと思ひますが、少しばかり注釈を加へます。「人皆黨あり」から「乍ち隣里に違ふ」までは偽らぬ人間性をありのままに述べられたものですが、この様に深い自己省察の上に立つならば、無反省に理想型を空想して冷たい倫理法則を押しつけても問題の解決しないことは明らかです。道は「上和らぎ下睦びて事を論ふに諧」ふ他はありません。「諧ふ」とは「共に和らぐ」ことですが、単に仲良しクラブを作るといふことではありません。その前提には他人の心を感じ受して心の通じ合ふことが必要です。太子のもう一つの御著作、大陸仏教批判撰取のお心をのべられた『三経義疏』の中にも「自他の二境を等しくする」とか「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化す」といふ様に、他の心を心とすることの大切さを述べられた御言葉が沢山あります。かう見て

きますと、心を種とする和歌の伝説を明らかにすることによつて、圧倒的な大陸文化に対する国風を宣揚した貫之は、三百年前に、同じ様に大陸文化の批判摂取のために苦闘された聖徳太子の御心に一筋につながつてゐる様に思はれてなりません。

### 歴代天皇の御製について

和歌の道は皇室を中心として守り伝えられて来たと前に申しましたが、その実情なり意味なりを代々の天皇方の御歌を拝誦することによつて些かなりとも感じとりたいと思ひますが、限られた時間の中では極く僅かなものしか取り上げることが出来ません。そこで此処には後鳥羽天皇以降の御数方の御歌についてお話いたしますが、それには次の様な考へもありました。

万葉時代は、嬉しいにつけ悲しいにつけ、その直情をそのままにうたひはらせば事足りた時代だったが、やがて外来文化の浸透によつてそれでは済まなくなつて生まれたのが『古今集』であり、和歌の本質の反省と自覚であつたとは前に申した通りですが「やまとごころ」といふ言葉の生れたのもこの時代でした。やまと歌の種となる「心」とは「やまと心」であ

るとされる様になつたのもこの自覚の現れでせう。本居宣長によれば「やまとごころ」とは「神代上代の、もろもろの事跡のうへに備りた」る「皇国の道」「人の道」を体した心といふ意味である、と小林秀雄先生は言つてをられます。ところで「敷島の道」といふ言葉が生まれたのは、漸く後鳥羽天皇の時代となつてからですが、それにはどういふ意味があるのでせうか。平和であつた平安時代はやがて騒然たる末期を迎へます。政権は鎌倉に移りますが、源氏が朝令により征夷大將軍として振舞つた時代はまだ兎も角として、実権が北条氏の執権の手に移る様になれば、愈々武家が専権を振ふ時代の到来は目に見えてゐたでせう。少くとも後鳥羽天皇御自身には、はつきりとした御予感があり、「やまと心」を種とする和歌の道は、来るべき武家専権の時代には、断乎として日本本来の姿を守るべき道であるとの御自覚を愈々深くせられたのではないかと拝察されます。天皇御親みづからの筆とも伝へられる『新古今集』序文にも、歌は「世ををさめ民をやはらぐる道とせり」とあります。「やまと心」の自覚から、「世ををさめる道」としての「敷島の道」の自覚へと更に一步を進める、時代はもうそこまで来てゐたのです。新たに和歌所を設置せられ、『新古今集』の撰定には親ら筆を加へられたのもその御自覚の現れでせうが、その御歌「おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ」には、その危機感とそれに対処せられようとする御志を痛い程に拝するこ

とが出来ます。以後歴代の天皇方は、よくその御遺志を継承されて「敷島の道」の中核としての御役目を果たされたのでした。爾後の御製には、殊に神祇の御歌、敷島の道、言の葉の道、世ををさむる道などについての御製を多く拝することが出来ます。これから後鳥羽天皇以降の御歌をとりあげるのは、さういふ考へからでした。

千早振神ぞ知るらむふしておもひおきてかぞふる萬代のおく（後鳥羽天皇）

夜を寒み聞のふすまのさゆるにもわら屋の風をおもひこそやれ（同前）

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治めがたきを（後醍醐天皇）

世をさまり民安かれと祈るこそわが身に盡きぬおもひなりけれ（同前）

いそくなる秋の砧の音にこそ夜寒の民の心をも知れ（同前）

御二方の天皇は、皇憲恢復のお志を、北条足利両氏のため挫折せられた方々です。政治の根本義としての民の心を治め和らげることの如何に難しいことであるかを御痛感遊ばされるにつけても、日夜の間なく求められたものは万代のおくの神ごころでした。それは偏に、夜寒には民の労苦を思ひ、ただ民安かれと祈られるお心につながつてゐるのです。

次は徳川時代に移ります。徳川は江戸に幕府を開いて以来、武家専権の基礎を一層固くするため「禁中方御条目十七箇条」といふものを定めました。その第一には「天子御芸能之事。第一御学問也」とあつて、「貞観政要」などを挙げ「群書治要を誦習す可し」といつた僭越極まるものです。学問第一とは御為ごかしで、要は政治向きのことには口を出すなどいふことでせう。次は和歌についてですが「和歌は光孝天皇より未だ絶えず。綺語たりと雖も我國の習俗なり。棄て置く可からず」といふのですが、和歌をお勧めするのはよいとしても、和歌の歴史や本質については全く無知の見当違ひをしてゐるのです。徳川の僭越の振舞いに当面された後水尾天皇は御教訓書を出されましたが、それには「今の世にては、和歌第一に御心にかげられ、御稽古あるべき事にや」と仰せられ、更に「武家は権威ほしきままなる時節の事に候へば、仰おほせにしたがひ候はぬも、ことほりとも申すべく候歟か」と歎かれ、続けて「一、御短慮又深くつつしまるべき事也」「一、いかにも御柔ねん奕あにあり度事候」「一、敬神は第一にあそばし候事条、努ゆめゆめ々おろそかになるまじく候」と仰せられました。氣に染まぬことは数々あるが、今は心をやはらかくして堪忍し、敬神と和歌の道を第一として精進せよと、皇子さまたちをお諭しになつたのでした。その御製

絶えせじなその神代より人の世にうけてただしき敷島のみち

まもれなほ世にすみよしの神ならばこの敷島の道のまことを

つくづくとふみにむかへばいにしへの心ごころの見えてかしこき

「世にすみよし」とかかる「すみよしの神」は和歌の神ですが、敷島の道を重んぜられ、さうすることによつて見えてくる「いにしへの心ごころ」を畏まれるお気持をひしひしと感じます。その御論しを身をもつて服膺せられたその後の朝廷の御学問や和歌の道への御精進が、幕府の浅慮僭越な意図とは裏腹に、明治維新の根柢を培ふ原動力となつたのは皮肉の結果といふ外はありません。次は幕末に至る天皇方の中、御四方の御歌を挙げます。

あふげなほ我が国なかにありとある道のはじめの大和言の葉（靈元天皇）

世ををさめ民をやはらぐ国の風吹きつたへたる道のかしこさ（同前）

おこたらず祈る手向の言の葉はおろかなるをも神やうくらむ（同前）

なべて世ををさむる道も言の葉のほかにもとめずいのる神垣（同前）

おどろかす鳥の初音におきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと（桜町天皇）

神代より世世にかはらで君と民の道すなほなる国はわが国（桃園天皇）

おろかなる心ながらに国民のなほやすかれとおもふあけくれ（後桜町天皇）

「世ををさめ民をやはらく」と、後鳥羽天皇の『新古今集』序文そのままのお言葉を受けて詠んでられますが、この言の葉の道こそ「ありとある道のはじめ」即ちわが国風の基本の道であり、その言の葉を神に手向けて怠ることなく祈られたのです。この、「言の葉」を生み出すものが、種としての「心」であつたこと、そしてこの「言の葉」が君と民、民と民の心をつなぐものであつたことをもう一度思ひおこして下さい。その様な国が「君と民の道すなほなる国」といふことでせう。武家が政権を恣にする時代にあつても、天皇様は人知れず夜深くひとりお目覚めになつて、世のため人のための朝まつりごとに急がれたのです。これらの御歌を拝誦しますと、いかに武家専権の時代にあつても、民の心を治めるといふ本当の高い意味の政治を絶えることなく行はれたのは、歴代の天皇方であつたことを信ぜずにはられません。かうして愈々幕末が到来します。

幕末から明治、大正、昭和と続く時代は、世界的にも大変動の時代で、その中にあつて日本も、特に明治維新の前と大東亜戦争の末期とは明日の運命も知れぬ様な動乱の中にあつて日

した。その様な中にあつて各天皇方は、どの様なお気持でその難局に当られたのでせうか。  
まづ、孝明天皇の御歌

人しらずわが身ひとつに思ひつくす心の雲のはるるをぞまつ

むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥

ねがはくは朝な朝なの言の葉をあはれみうけよ神ならば神

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民おもふため

天が下人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろず国民

文字通り国の運命を御一身に担はれた御衷情を、その直情の流露するままにお詠みになつたこれらの御歌は、いづれもが絶唱とも申し上ぐべきものです。遺された御宸翰によれば、宮中においてさへ「虚談謀説半ばに過ぐ」といふ状況の中で、勤王佐幕、攘夷開港の諸説混乱の余波を受けて輔弼の任に当るべき関白、大臣すら御役辞退を申し出る有様で「此の節にては、私一本立ち、相談相手もこれ無く、心細く、大義あやまりあるかと実に目まひ候事に

候」とまで仰せられる様な状態でありました。「人しらずわが身ひとつに思ひつくす」とは実に痛切なご述懐です。それ故にこそ、池の面に鳴く水鳥にも語りかけずにはをられず、また神に祈られては「神ならば神」と切迫した御心境を率直にお詠みにならずにはをられませんでした。国と民の上を思はれて或いは泣き或いは笑ひつつ語り合はれ、人といふ人すべて心を合せよと仰せられた沈痛のお志が、国民の心琴に触れぬわけはありません。幕末志士の沢山の歌がうたはれました。思ひつくままに二、三御紹介しませう。

大君の憂き心をやよそにのみかくて見つつも忍ぶべきかは（有馬新七）

かたらはむ人しあらねば大君は雲井にひとりものおほすらむ（平野国臣）

かくばかりなやめる君の御心をやすめまつれや四方の国民（同前）

君臣唱和といふ和歌の本道を美事に映してあるではありませんか。然し、孝明天皇は、維新の功いまだ成らざるうちに「心の雲のはるる」こともないままにお隠れになりました。御述懐の通り、国民をにごすこと無き様にとの御一心の故に「澄ましえぬ水に」御身を沈められたのだと思はずにはをられません。明治維新は偏にこの様な天皇の捨身の御行業の上にな

就しました。明治といふ時代は、日清、日露の戦役にも見られる様に国の独立の為に存亡を賭けた戦をしなければならぬ大変な時代でした。国民が皆、興国の意気に燃えてゐた良き時代である一方には、独立の為の圧倒的な近代化の必要と国の伝統との狭間にあつてその相克の舵取りの難かしい時代でもありました。この時代に當つて、明治天皇御自身、十萬首にものぼる御製をものされ、斯道興隆のため御精進遊ばしたことの意義は測り知ることが出来ません。天皇は、万葉以来の古今、新古今の伝統と、御鳥羽天皇につづく天皇方の御志操のすべてを取り統べて敷島の道の本道を明らかにされ、その様な意味での思想詩とも申し上げべき様な御歌も沢山残されました。御歌を幾つかあげませう。

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

とほければあらしのおとはきこえねどたかねの雲のうごきそめたる

たちちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

敷島のやまとしまねのをしへ草神代のたねののこるなりけり

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまとことばの高きしらべを

「生きとしいけるもののおもひ」は無論のこと、無心の「雲のうごき」にも心を通はせられて、宇宙の生命を感じた古へ人の豊かな性情をさながらに、その直接の御経験をお詠みになりました。人倫の基本としての「親につかへるまめ心」のお示しも、処世の常径としての「ゆたかなるべき人の心」の御教も、道德法則の御命令ではなく、心温まる御心懐をお述べになつたことの意味を思はねばなりません。近代文明の先端にありながら、一方、古い伝統を失はぬ日本の姿は、屢々世界の人達の驚きと羨望の的ですが、そこに果した和歌の役割は否定することの出来ないことです。「開くべき道はひらき」ながら「上つ代の国のすがたを忘れ」ないことが歴史のあるべき姿なら、歴史が永遠である限り、敷島の道も亦完結する時は無いのでせう。「やまとことばの高きしらべ」を「ききしるはいつの世ならむ」と詠はれたのは、その事を暗示せられるものの様に思はれてなりません。

昭和の御世は、その御治世のはじめから、内には思想の混乱、景気の低迷、外には列強の圧迫といふ騒然たる時代でしたが、遂には大東亜戦争の敗戦といふ我が歴史上未曾有の事態に直面しました。昭和天皇の御歌。

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ（昭和六年歌会始）

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに（昭和十五年歌会始）

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて（終戦時）

国がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり（同前）

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ（災害地視察）

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ（同前）

をちこちの民のまゐきてうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ（皇居内勤勞奉仕者）

戦にやぶれし後の今日もなほ民のよりきてここに草とる（同前）

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ（七十歳となりて）

はじめの二首は、満州事変勃発の年と支那事変解決の目途もなく米英との関係も逼迫しつつあつた時の御歌です。明治天皇にも明治三十七年に「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」といふ御歌がありますが、日露戦争も大東亜戦争も真実にはこの様な大御心の下に戦はれた戦争であり、また戦はるべき戦争であつたことを、篤と心にとど

めておいていただきたい。次の二首は終戦時のもの、御一身にも代へてとの御決断は、偏に国民と国体とを守らむがための御決意でした。敗北は国体の変革をもたらすのではないかと多くの人が危惧を持ったのは十分に理由のあることでしたが、陛下には国体護持の御確信があつた。それは何に由来するのでせうか。歴代の御製に拝しました様に、御祖の神に祈り、ひたすら民の上を思はれる皇室の御傳統を自らもお履みになることによる御確信であり、やがては民に対する篤い御信賴の他にはありません。次の御歌は敗戦後全国御巡幸の折のもの二首と皇居内清掃の勤勞奉仕者にお會ひになつた時のもの二首ですが、何と美事に国体は顕現してゐることとせう。国体とは理論や概念ではなく、まして単なる体制ではなく、君臣の間の心のつながりの他にはその在るべき場所はありません。戦後は、その浮薄な風潮によつて蔽はれつくした様に見えますが、国体は敗戦によつても素朴な一般国民の心から失はれることはなく、よく陛下の御信賴にお応へすることが出来たのでした。

次は今上陛下の御歌ですが、時間もなくなりましたのでここには父祖の天皇方の御心を継がせられるお氣持のよく現れたもの二首をご紹介しませう。

父君のにひなめまつりしのびつつ我がおほにへのまつり行ふ

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

新帝の御位に即かれる大嘗祭を奉祀されるに当つても御父天皇の新嘗祭の折のことを深くお  
偲びになりました。「新年歌会始」の御歌は「千万の民のことばを年ごとにすすめさせても  
みるぞたのしき」といふ明治天皇の御歌の御心をさながらに御心とされつつ、献進の歌の調  
べの静かに流れる中に、国民の日々の暮らしの上を深く偲んでをられる御様子が目に浮びま  
すが、そこには、天皇の御治世といふものの深い意味合ひを彷彿として目のあたりにする思  
ひがいたします。

### 明き心を皇方に

以上、歴代天皇の御歌の幾つかについて思ふところを申し上げましたが、皇室が、和歌の  
伝統を如何なる時代にあつてもその中枢にあつて守り伝へられた事実と意味について、少  
でも感じ取つただけなら幸ひです。万葉集を集成して日本の心を後世にのこした大伴  
家持は、天孫降臨この方、弓矢の道をもつて皇室にお仕へした祖先以来の経歴を回顧してそ

の感慨を「大君の辺にこそ死なめ」と言立て「あか明き心すめらへを皇方に極めつくして」と詠ひました。何といふ懐しい表現でせうか。「大君のため」といふ倫理的義務感ではなくて、ただただ大君のお近くにといふ心情であり、「皇方に」といふのも、天皇のお近くにあつて真心を捧げたいといふ親しみの心の表白です。この天真の真心は、天皇の御統治と表裏一体となつて今日まで守り伝えられました。ここで思ひ出すのは、松吉正資さんのお歌です。松吉さんは戦時中、私達と一緒に勉強した仲間の一人で、学徒出陣して昭和二十年五月沖繩特攻隊員として出撃、享年二十三才を以て戦死されました。お歌は愈々故郷を後にして出征される際に、私が葉書で頂戴したのですが、日付は昭和十八年十二月となつてゐます。

ゆく身にはひとしくしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや

うつそみはよし碎くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

戦死されるまで約一年半の間がありますが、既にお心は定つてをられたのでせう。これが最後のお歌となりました。取りたてて大仰なことも勇壮なことも仰しやつてゐませんが、ふ

るさと心をつなぐ暖い心、その懐しさ親しさと「うつそ身はよし砕くとも」といふいさかきよ潔さとは一つのものでした。それが日本の心です。

### むすび

今日の話の主題は以上で終わりますが、最後に小林秀雄さんの文章を一つご紹介します。

二宮尊徳は思想といふ言葉は使つてゐない、大道と言つてをりますが、大道は譬へば水の様なもので、世の中を潤沢して、滞る処のないものだが、書物になつて了へば水が凍つた様なものだ、その書物の注釈といふものに至つては、氷に氷柱つららがぶら下つた様なものだ。「氷を解かすべき温気胸中になくして、氷の儘にて用ひて用をなす物と思ふは愚の至なり」と言つてをります。大切なのは、この胸中の温気なのである。空想の世界の広大さにくらべて、確実な己れの生活の狭さを知れとは、この胸中の温気の熱さを知れといふ事に他なりません。正義を言ひ人道を言ひ日本の大使命を言ふ、併しさういふ言葉も、氷に過ぎず、氷からぶら下つた氷柱に過ぎぬかも知れないではないか。自分の

胸がさういふ氷を解かすほど熱いかどうか知るがよいのだ。そんな事はとうに知つてゐる、温気ぐらゐ誰の胸中にもあるのだ、自分はもつと先をゆく、それがもう間違ひだ。間違ひの一步を踏出す事でありませぬ。成る程、己れの世界は狭いものだ、貧しく弱く不完全なものであるがその不完全なものからひと筋に工夫を凝らすといふのが、ものを本當に考へる道なのである。(「文学と自分」)

じつくりと読んで下さい。特に難かしい文章ではないので、別に注解を加へないでもよくお解りでせう。思ふに「胸中の温気」とは、いまお話した「心」そのもののことであつて、心を働かすことによつて氷は解けるのでせう。クラীগスも同じ様な事をこんな風に言つてゐます。「精神といふものは、彫刻家の使ふ鑿のみの様なものだ、心で感得した物の姿が胸の中にあつてこそ、鑿を振へばその姿を美しく彫り出すことが出来るが、心無き精神だけで鑿を使へば、大理石をただ粉々にしてしまふだけだ」と。このごろの世相を見てみれば、思ひ当ることが多いではありませんか。世の中に美辞麗句は溢れてゐます。人權、正義、平等、平和等々と挙げれば際限がありません。が、それらは心のこもる温かさ、親しさのかけらも感じられない氷か氷柱に過ぎないのではありませんか。若し、こんな冷たい鑿で世の中を改革

しようとするのなら、そこにはただ破壊だけしかないことは目に見えてゐます。

ところで、諸君はこの合宿で何を体験されたのでせうか。心を働かすことによつて、お互にその心を信ずることが出来る様になつた、たとへ意見は違つてゐても、その意見を心おきなく交換することが出来る様になつた、さういふ体験ではなかつたかと思ふのですが、若しさうであるなら、それこそ、小さいながらもあるべき国民生活のモデルではないでせうか。

若し、さういふ世界を拓げてゆくことが出来るなら、それは考へ得る限りの理想の国家生活です。聖徳太子は、十七条憲法第九条に「群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは万事悉く敗る」と言つてをられます。信ある世界とは、心ある、温気ある世界ではないか。先に申しました、上下和諧すれば「何事か成らざらむ」といふ憲法第一条の和の世界と相通するものです。合宿での生活は成る程狭いものであるかも知れませんが。然しそこで得たものは断片的な知識やイデオロギーではなくて、心によつて感得し得た総合的な直接経験の世界であつて、これこそが小林さんの言はれた温気ある「己れの世界」なのです。この合宿では二十一世紀の理想図を語つたり、そのための具体策を提言したりすることは余りありませんが、それは確かな「己の世界」なくしてその様なことを語ることの空しさをよく承知してゐるからです。この合宿で得た体験を大切に育て、そこから一と筋に工夫を凝らす

ことによつて、はじめて二十一世紀に相応しい、伝統に即した創造が生まれるのだと信じてゐます。

日本の現状はまことに目を蔽ふばかりの有様ですが、決して悲観ばかりしてゐるわけではありません。この長い歴史に育まれた日本人から、さう簡単に伝統が消えるとは考へられませんが、また実際に目を凝らせば、日常生活のあちこちに日本の心ばえを見ることが出来ます。然し、何よりもそれを信ずる一番の根拠は和歌の歴史がそれを証明してゐるからです。武家専権の時代にも、皇室を中心として、その御堪忍と御精進によつて此の道は一と筋に伝へられ、国民も亦、時あつてこれにお応へして来たことは、及ばずながら只今お話してきたとおりです。しかもこの道は、日本に独自に伝へられたものではあつても決して孤独のものではありません。宇宙大地の生命をさながらに生きて古代人の本来の人間性を失ふことなく現代に守り伝へたといふ意味で、これを失つた西欧人の憧憬的になりつつあるのは三日目の竹本忠雄先生のお話に御指摘のとほりです。本居宣長が「皇国にのみまことの道はそなはれり」と言つたのは、自尊ではなく真実を伝えてゐます。これが今、世界の求めてゐる本当の意味でのヒューマニティといふものでせう。御清聴有難うございました。



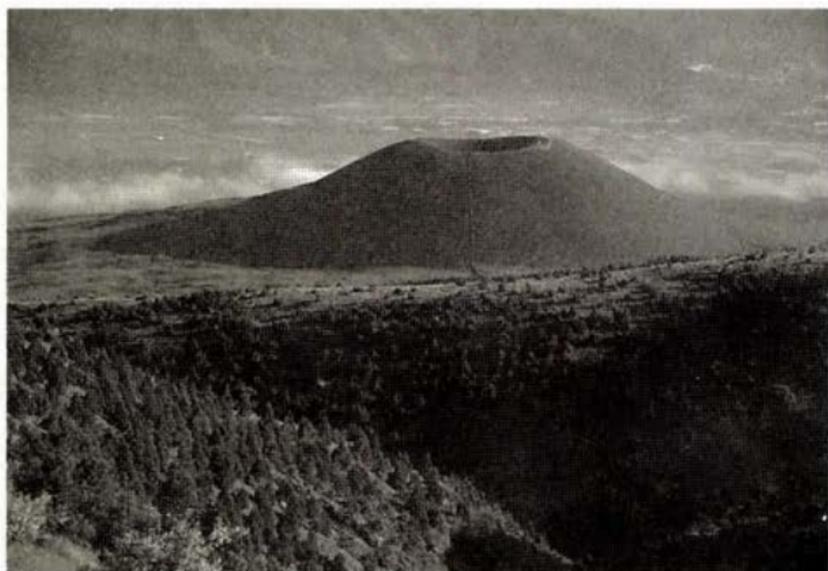
講話

# 若き友らへ語りかける言葉

——「極く<sup>ごく</sup>当り前の日本人」に私はなりたい——

(社)国民文化研究会常務理事兼事務局長

長内俊平



はじめに

牡丹餅

日本はなくなつてしまつた

文明と文化

文明を統御する力

春めくや人さまざまの伊勢参り

郭公が来ないだけでおろおろする人

ああ勿体ない

さいならをいつも忘れず

最後に

はじめに

皆さんのなかには副題をご覧になつて「何だこれは」と、いぶかつてをられる方も多からうと思ひます。

何を今更「極く当り前の日本人になりたい」などと言ふのか、ちゃんと私達は皆「極く当り前の日本人」ぢやないか、と思つていらつしやるでせう。

しかし「極く当り前」といふ位、尊く有難いことではないのです。

皆さんは、ご両親が揃つておいでの方が多と思ひます。そしてそれは「極く当り前」のことと思つていらつしやるでせう。しかし御両親の揃つてをられない方から見れば、その極く当り前と思つていらつしやることが、どんなに羨ましいことか知れないのです。片足でいい、ねたきりでいい、「俊ちゃん!!」と呼んでくれる母上が生きてゐてくれたらなあと思つていらつしやる方がをられるのです。

源實朝の歌に

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬるたづ

とございます。

私が心から尊敬申し上げる方に、吉田弥三と言ふ中學時代の校長先生がいらつしやいました。

中學時代は勿論のこと、中學を卒業してからもよく友人を誘つて遊びにゆきました。そして会社に入つてからも、出張するたびにお邪魔し泊めて頂いたこともございました。

ある晩泊めて頂いた部屋が、校長先生の寢室の隣りの部屋でしたので先生方のお話がきこえて来ます。

奥様が「今日一日有難うございました」と仰しやると校長先生は、「何がそんなに有難いんだい」と答へます。すると奥様が「貴方が今日もかうして無事に勤めからお帰りになつた。こんな有難いことはないぢやありませんか」と言はれますと、校長先生はよくお分りの筈なのに「さういふことか」と答へてをられました。

私は奥様の「今日一日有難うございました」と言はれた美しい言葉の響と共に、「極く当り前の事」のなかにこそ人生の大事がかくされてゐることをほのかながら気付かせて頂きました。

そんな気味合ひでかういふ副題をつけた次第です。



私は若い頃、ある大学生がマルキシズムにとりつかれ、家へ帰るたびに平等世界実現の必要を熱烈に説くのを聞かせられてをつた伯母さんが、ある日「○○さん、金持から金を取って貧乏人に分けてやるといふのはいやしゆうおまつせ、そんなに貧乏人が可愛想やつたら自分で金持になつて、その金を分けてやんなはれ」と言はれ、愕然と眼を睡ましたといふ話をきいたことがあります。

この青年の伯母さんが今日申し上げたいと思つてゐる私がさうなりたいたいと願ふ「極く当り前の日本人」の姿の一つであります。

所謂學問や、さしたる知識も持たぬ小さな料理屋のおかみさんが、見事にマルキシズムのあやまり（うさんくささ）を見抜く慧眼まなこ—智慧—文化力を身につけてをられたのです。

今日は皆さんとそんなことを一緒に考へてみたいと思ひます。

## 牡丹餅

この春、孫達の雛祭りに招かれました。

可愛い、牡丹餅がお雛様に供へてあり、私達もお裾分に預りました。「孫の作った牡丹餅の味は格別だなあ!!」と家内と話し合ひながら頂く傍そばで「おちいちゃん、お萩は春は牡丹の花の様に丸く、秋は萩の花の様に細長く作るのださうね」と言ふ孫の言葉に「それは知らなかつた。良いことを教へて呉れて有難う」と答へつゝ、ほのほのとした気分ひたつたことでした。

丁度その頃、テレビで「近頃の都会の青年達の氣質かたぎ」といふ報道をしてをりました。

それによりますと「鶯の鳴く音」や「風鈴の音」をうるさいと感ずる青年が近頃増えて来てをり、田舎の旅館に泊つたある青年などは「河鹿の声がうるさいから消してくれ」と言つた、といふ信じられないことまで報じてをりました。

私は河鹿の声を聞くたびに戦死した弟を思ひます。弟は二十一歳の折、フィリッピンの戦

場に向ふ途中台湾沖で戦死しましたが、その半歳前、旅順で海軍予備學生として訓練を受けてゐる折に「故郷ふるさとのいで湯にききし河鹿の声こよひは遠き旅順にてきく」といふ歌を詠んでをります。私達が小學生の頃一家六人で山の温泉で一夏を過したことがあるのです。短い生涯だつた弟にとつて河鹿の声は、父母ちちははそして私達兄弟への思慕の情をつのらせるゆかりの声だつたのでせう。

きつとその青年の泊つた旅館は、静かな山間やまあひにあり前には清流が音たてて流れ、河鹿の鳴く美しい声が聞こえて来てをつたのでありませう。河鹿の声は千金に値する自然の恵みでありませう。それを「うるさいから消してくれ」と言ふ人がをるのだらうか。私はその調査を容易に信ずることは出来ませんでした。

しかし考へてみますと、これは他人ひとごとではなく、私自身の問題の様に思はれて参りました。

磯の香がしてくるだけで胸が高鳴り、初雪が降つてくるだけで小犬の様に飛び回つて喜んだ、あのはち切れさうだつた少年時代の純心が、いまの自分に衰弱しきつてゐることに気付かせられたからであります。

## 日本はなくなつてしまつた

そんなことを思ひつつこの合宿教室において下さつた先生方のお話を読み直してをりましてところ今から二十年前、当時内外ニユースの社長をしてをられた長谷川才次先生のお話に出会ひました。(昭和五十二年刊『日本への回帰第十二集』——佐世保——)

そのお話のなかに、明治二十二年帝國憲法が發布されたその日に『日本』といふ新聞を創刊された陸羯南くがつなん先生の次の様な発刊の言葉がございました。

「近世の日本はその本領を失ひ、自みづからの固有の事物を捨つるの極きはみ、ほとんど全国民をあげて泰西たいせいに帰化せんとし、日本と名づくるこの島地はやうやく正に輿地よち圖づの上にただ空名を書けるのみならず」と日本の國情を憂へられ、このままでは、日本はなくなつてしまふ。そこで私は『日本』といふ新聞を発刊して、日本古来の道を説くのだと仰おつしやつてをられることばであります。

私はこの文章を読みながら、今から百年以上もの昔に言はれたこの言葉は、そのまま今の私達に向けられてゐる様に思はれてなりませんでした。

私共から考へますと、明治時代は、國民精神が昂揚し、大和魂がなほ豊かに残つてゐた時代と思はれますが、後に文部大臣までされた森有礼もりありのりが、明治五年、英語を國語にしようとの考へを持ち、その考へをアメリカ言語協会初代会長で当時エール大学教授をしてをられたW・D・ホイットニー氏に糺ただし、次の様な返事をもらつたことなどをみますと、陸先生のご心配はまことにもつとも尤もつともなことだつたと納得させられますと同時に、この便りは今日の私達にとつても胸を突き刺される思ひが致しますので読んでみます。

「世界の歴史のなかで父祖の言語を捨てて新しい言語を採用した國民の例は多いが、大抵の場合、双方は文化面でも政治面でも圧倒的な優劣の差があり、新しい言語を採用した國民は、その言語圏の文化に同化し、その社会の一部に組み込まれてしまつてゐる。日本が英語を採用するといふことは、日本が英語圏の社会の一部となり、その文化に同化することを意味する。……日本國民が日本語自体に低い評価を与へたり、日本語を高貴にし、豊かにし、自らの文化を發展させようとする努力を妨げる様な如何なる計画にも私は反対である……」といふ言葉であります。

私も若い頃西洋を憧れたことがありますので大きなことは申されませんが、今日の我が國をみますと、いまなほ西洋の文明に憧れ、思想から生活様式まで、なかにも日本文化の根源

をなす大事な言葉までも、能率化、合理化を至上とする文明思想に侵されて、現代仮名遣ひや漢字制限などの愚行を始め、カタカナの氾濫は眼を覆ひたくなる現状であります。

立派な車に乗り、冷暖房の利いた家に住み、グルメだの、観光だのと、一見、快的な文明生活をしてゐる様に見えながら、私達は、心の底から平安を得てゐるのであらうか。何か懐しい非常に大事なものを忘れ去つてしまつてゐる様な、そんな不安な気持を拭ひ去れずにするのではないか。そんな気が致すのであります。

## 文明と文化

しからばその不安の原因と思はれる文明の正体は何か、また私達が忘れかけてゐる「何か懐かしい非常に大事なもの」——即ち文化——とは何かについて考へてみませう。

「文明」「文化」といふ言葉は、人によつて使ひ方が大分違つてをります。即ち文明と文化を同義語と捉へる方、文明を精神文明と物質文明にわけ、そのなかの精神文明を文化と捉へる方、文明と文化は全く異質なものと捉へる方と様々です。

この春多くの方々に惜しまれながらこの世を去られた司馬遼太郎さんは、文明と文化は全

く異質なものであるとの考へに立ち次の様に言つてをられます。

「文明とは誰もが参加出来る普遍的なもの、合理的なもの、機能的なもの」であり、之に反し「文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとへば民族）においてのみ通用する特殊なもので他に及ぼし難い。つまりは普遍的でないもの」だと言はれ（『アメリカ素描』）一つの例として「交通信号」と「襖ふすまの明け閉め」を示してをられます。

そのお話をかいつまんで申し上げますと、青は進め、赤は止れ、の交通信号は、どの国にも及ぼし得るし、現に及んでゐる。普遍的であるといふ意味で、交通信号は文明である。之に反し、日本の婦人が襖を明けるとき両膝をつき、両手で明ける様なものが文化である、と言はれ、そのあとを次の言葉で結んでをられます。「立つて明けてもいいという合理主義はここでは成立しえない。不合理さこそ文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感ぜられ、その美しさが来客に秩序についての安堵感を与え、自分自身にも、魚巢にすむ魚のように安堵感を与えるのである」（同上）と言つてをられ、成る程と感心致しました。

私も日頃文明と文化の違いはどこにあるのか、そしてその違いはどこから生れるのだらうかと考へて参りましたが、その違いは生れ故郷の違いから生ずることに気付かせられました。

即ち文明は「人間の頭脳」が生んだものであり、文化は「人の心」が生んだものではないかと気付かせられたのであります。

詳しいことは申し上げる時間がありませんので、今日は人間の頭脳が生んだ文明は「一人歩きが大変好き」だといふ特性を中心にお話したいと思ひます。

「一人歩き」といふことは、それを本来に必要としてゐる人とさうでない人を見分ける力を文明は持つてをらぬと言ふことであります。どこにでも一人で出歩きます。

オウム真理教の信者が大量殺人の為に使はうとして文明の産物であるサリンの製造方法を知らうとしたとき、「君にはその知識を知る資格はないから教へられん」とは決して言つてくれません。

また私が大変お世話になつた方に、文明の利器である電話でお礼を済まさうとしたとき、「俊平君、あれ程心をこめて迎へてくれた方に電話でお礼とは失礼ぢやないですか、ちやんと封書で心をこめた札状を書き給へ」とは決して言つてはくれません。

ことは文明の利器だけに限りません。思想も然うです。

小學生の子供が悪いことをしたので母親が叱らうとしたら「僕にも人権があるんだよ」と言つたといふことが、いまの日本では悲しいながら稀でないと言はれるのも、人権思想が、

一人歩きが大好きな文明の産物だからであります。

今日「人権など」とでも言うものなら袋叩きにでも会ひかねませんが、人権思想が人間の頭脳より生まれた抽象観念であることは、明日最終講義をして下さる加納祐五先生が今から三十四年前、「国民同胞」紙上で紹介下さったアレキシス・カレルの指摘にございます。

即ち一九一二年にノーベル生理・医学賞をうけられたフランスのアレキシス・カレルが、著書『生命の知恵』のなかで、「フランス革命の祖先たちは、人間と市民の権利の实在を眞面目に信じてゐた。…（しかし）実際には人間は権利を持つてゐないが、要求を持つてゐるのである。…人間の権利、市民の権利といふものは、心意の見解すなはち抽象にすぎない」と喝破してをられるのであります。

一寸話はそれますが、これに反し文化は決して一人歩きはいたしません。「君の笑顔は素晴らしい、明日は入社試験があるからその笑顔を一寸貸してくれ」と言はれても貸すことは出来ないでせう。笑顔はその人の身にしみ付いた智慧即ち文化力だからであります。このことは文明と文化の違いの核心であり非常に大事なことなので心に留めて置いて下さい。

今申し上げて参りました様に、文明は、行くべきところを一人で判断する力を持つてをらぬのであります。ですからこれを利用する人はこの文明の欠点を見抜きその行き過ぎを統御

する力即ち智慧（文化力）を身につけておかなければならないのです。

### 文明を統御する力

前にも話したことでありますが、今から百年程前ラジウムを発見してご主人と共にノーベル賞を受賞されたキュリー夫人の御主人のことは「犯罪人の手にかかればラジウムは非常に危険なものになりかねない。……人類は自然の秘密を知つてはたして得をするであらうか。その秘密を利用できるほど人類は成熟してゐるだらうか」と言はれたその「成熟」とは、自然の秘密―即ち文明を代表する自然科学の成果―の一人歩きを統御できる智慧（文化力）を我々人間が果して身につけてゐるか、との問ひかけであらうと思ふのであります。

私が「極く当り前の日本人」になりたいと申しあげてゐるのは、この文明の欠点を見抜き、そのゆきすぎを統御出来る智慧を身につけた日本人にたちかへりたいといふことなのであります。

そしてそのことが、今日程求められてゐる時代はないと信ずるからであります。

春めくや人さまさまの伊勢参り

然らば私が然うなりたいと願ふ「極く当り前の日本人」とは、どんな智慧を身につけた方達でありませうか。これまでも幾分申し上りましたが、時間のゆるす限り素描そびょうを試みてみませう。

「極く当り前の日本人」といふ言葉を口にするときすぐ思ひ浮んで参りますのは「春めくや人さまさまの伊勢参り」といふ芭蕉門下、山本荷兮かけいの句であります。

明治天皇の御製に

草も木も萌ゆるをみれば春風に動かぬものはなき世なりけり（明治四十三年「萬物感陽和」）

とございますが、春は草木が芽ぶくだけではない。人の心の底に住む「をさな心」（まごころ）もうづき出す季であります。

日本人と生れたからには、一生に一度はお伊勢参りがしたいとの思ひが春と共に甦へり、

私達の懐かしい祖先達を、お伊勢様へ、お伊勢様へと向はせる、その弾む様な姿が眼に浮んで参ります。私が慕はしく思ふ「極く当り前の日本人」の姿の原型であります。

### 郭公が来ないだけでおろおろする人

京都の桜守と呼ばれてゐる佐野藤右衛門さんは、「桜の木の下を歩いてゐると花がなびいてくる、その下で寝ころんでゐると、人戀しいと語りかけてくる」(平成八年四月十八日、朝日新聞夕刊)と言つてをられます。その言葉を聞いてあゝ、かう言ふ人になりたいものだと思ひました。

この方を「極く当り前の日本人」とお呼びするのは、当を得てゐない様であります。春の野に堇採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける(「萬葉集」巻八・二四二四)と千二百年前に詠つた山部赤人のおもひは、恐らく当時の「極く当り前の日本人」の誰もが抱いた心のうづきであつたらうと思ひます。

その懐しい萬葉の祖先達の心に通ふ気が致しまして慕はしく思はれるのであります。

一時「自然征服」といふ傲慢な表現が流行りました。

近頃は一見その傲慢さが無くなつたかに見える「自然保護」とか「共生」と言ふ表現がよく使はれる様になりましたが、これも結局人間が生きてゆく為の手段として、自然を保護し、または大切にしようとする文明思想であつて、ほろほろと鳴く山鳥の声を父かと思ひ母かと思ひ、山川を神と敬する私達の祖先達がいただいた文化的心情とは雲泥の差があることに気付かなくてはなりません。

「自然保護」といふ表現には、自分より弱いものをかばふといふ高きに立つ姿勢が伺はれます。自然によつて生かされてゐるのは実は私達でせう。空気や水がなかつたら一瞬も生きてをれないではありませんか。

また「共生」といふ表現は、「法華経」のなかの隨喜功德品にみえることばと聞いてをりますが、それによりますと「共生」ではなく「共生」であります。

生きとし生けるものは、共に生じた（生れた）わが分身であり、兄弟であり、わが友であるとの、一体不二の体感がこの「共生」といふ表現である様であります。

ですからさうした体感が身についてゐる「極く当り前の日本人」は、訪ねて来るべき季が来ても郭公の声なきこえないだけでおろおろする人であります。本居宣長が「人の哀なる事をみては哀と思ひ、人の喜ぶをききては共によるこぶ、是すなはち人情にかなふ也。物の哀

れをしる也」(『紫文要領』)と言はれた「極く当り前の日本人」に通底する体感であります。

### ああ勿体ない

先の戦争に敗れて間もない頃、昭和天皇様は、全国をお廻りになり国民を勵まして下さいました。

その時、国民の間から自づあがった言葉は「ああ勿体ない。天子様は巡禮をなさつてをられるのだ」といふ言葉でありました。

あの敗戦といふ悲しみの極にあつて、初めて天子様と私達国民の心が親子の様に通ひ合ふことが出来たのです。即ちあの時、すべての日本人は「をさな心」「極く当り前の日本人」に立ちかへつたのです。

ですから、当時の日本人はこの天子様のお姿を拝して、「勿体ない」との思ひを皆抱いたのです。

私が慕はしいと思ふ「極く当り前の日本人」は、この勿体ないといふ情感を心深く湛へてゐる方があります。

さいならをいつも忘れず

山奥の小さき校舎にうち集ひ　いとやさしくも物學ぶ　單級の子ら　人の世にかはゆき  
ものの数あれど　よろづに勝りていとしきはこの子らならし　朝まだき始業のベルに  
組々に列をつくりて教室にならび終り　壇上にわれの立てれば　一様に視線そそぎて  
「おはやう」とあいさつをなし　業終へて帰るまぎはも　さよならを皆忘れずに　礼し  
つつ手と手をとりにて　かへりゆく姿のいとかはゆしも　品よき着物は身につけね　品よ  
き靴は足にはつけね　保つ心は神のごと　澄める心はくもりなき　鏡のごときこの子ら  
に幸多かれとわれは祈るも

反歌

さいならをいつも忘れず歸りゆく單級の子らはかはゆきろかも

右の歌は、恥かしながら父が二十歳台に、青森県下北半島の戸数七十戸ばかりの漁村の分  
教場に奉職してをつたときに詠んだ歌です。

別にすぐれたものではありませんが、その漁村で育ちました私にとり、大正の終り頃のその村の人達の姿に「極く当り前の日本人」の原型とも思はれるものを感じて参りました。

悲しい話ですが、青函連絡船から飛込自殺をして、村の浜辺に寄つた若い女性の死体を、村の女性達がそれは大切に取扱ひ、家々から持ち寄つた薪で茶毘に付してあげる姿や、嵐に遭つて帰つて来ない村人の船を待つて浜辺に篝火の列をつくり、幾晩も幾晩も沖に向つて友の名を呼び続けてをつた姿や、村から入營する若者が出ると「祝入營」の幟を何本も立てて村中の人々が峠まで見送つた姿は

松の木の並みたる見れば家人の吾を見送ると立たりしどころ

と詠んだ防人（『万葉集』卷二十）の姿を昭和の御代にみる思ひがしたものでした。

私が生涯のうちで一番の感激が「長内俊平甲種合格!!」と徴兵官から朗々と令達された瞬間であつたことは、この幼い頃の経験と深いつながりがあると思つてをります。

話は一寸それましたが、私は極く当り前の日本人の資質の根幹をなす、敬し合ひ、救け交し、隣へだてぬ同胞感情の自づからの発露が「さいならをいつも忘れず」と父が詠んだこの

「挨拶」であらうと信じてをります。

九二歳でいままほ隅田川のほとりに住み、小唄の師匠さんをしてをられる千紫千恵せんしさんがこの春記者の質問に対し「近頃は、情緒がなくなりましたですよ。いやになるのは、コンチワというあいさつがなくなつたこと。昔は、お彼岸しがんには向う三軒両隣で贈り物をし合つたりしたものです。心のお付き合いがないのは寂しいです」(平成八年三月十六日、朝日新聞所載)と言つてをられた言葉が身に泌みました。

この挨拶といふ文化力がいまの日本で一番衰弱してゐるのではないでせうか。  
明治天皇の御製に

谷川のおなじ流の水くみて鄰へだてぬみやまべの里(明治四十一年「山家鄰」)

さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬まがきの竹のひまのみゆるは(明治三十九年「鄰」)

とございます。

全国の學生諸君が、朝登校の際行き合ふ児童や生徒達に「お早う」と大きな声をかけてやり、店先を掃除してゐるおかみさんや、畑で働いてゐる農家の方に、「お早うございます。

精が出ますね」と朗らかな声をかける様になつたら世の中がどれ程明るくなるでせう。

お国を思ふといふことは決して大袈裟なことではないのです。「おはやう」「さようなら」を欠かさず実行する、さうした行ひのなかにお国の力となるものが生まれてくるのです。

### 最後に

以上短い時間で、私がさうなりたいと願ふ「極く当り前の日本人」の姿をほんのりと描いてみました。最後に

むらぎものこころをたねのをしへ草おひしげらせよ大和しまねに（明治三十七年「述懐」）

といふ明治天皇の御製を拝桶して私の話を終りたいと思ひます。

この大み歌は、私が今夜懇々と述べて参りました、文明の欠点を見抜き、その行き過ぎを統御する智慧―文化力―を我々国民一人一人が身につける様な、心を種とする教育がひろく日本の国内にゆきわたることを心から願はれたものと存するのであります。

この合宿も、この心をたねの教へ草即ち日本人としての智慧、文化力を、何とか若い皆様と共に身につけたいとの念ひから開いてゐるものであります。残りの二日間、その智慧を少しでも身につける研鑽に互に励みませう。ご静聴有難うございました。



講話

# 先人を偲ぶ営み

——慰霊といふこと——

大成建設(株)国際事業本部企画管理室長

(平成九年一月から(社)国民文化研究会事務局長)

山口 秀 範





「慰霊祭」に初めて参加される方も多いかと思ひますので、この合宿教室で何故、毎年「慰霊祭」を続けて来たのか、或いはどんな心構へで臨んだら良いのかについてお話ししたいと考へてゐます。

まづ皆んなで、「氣」を出す実験をしてみませう。(二人一組。一人が右腕を前に伸ばし力を抜く。そして心の中で自分の「氣」が指先からほとばしり出てゐると考へるやうにすると、まう一人がその腕を曲げようといくら力を入れても曲げることが出来ない。全参加者の四分の一程度が、一回の実験で「氣」の存在を実感した。)

私達は日頃、何でも自分でわかつたつもりで生活してゐます。見えないもの、感じられないものは存在しないと決めてかゝつてゐるでせう。しかし今の実験で「氣」が実存することを感じ取つた方もゐる訳で、それと同様に人が亡くなつた後の「靈魂」なども、普段は「そんな不思議なものには有る筈ない」と否定してゐるけれども、私達が氣付いてゐないだけで、実は存在するのかもしれない。現に、お盆や法事で、親しかつた人や先祖をお祀りする時、何となく亡くなつた方々を身近に感ずるといふ経験をした事はありませんか。

今は亡き人を「想ひ出し偲ぶ」といふ営みは、世界中の国々、民族でそれ〴〵の受け継いで来た型に従つて儀式化されてゐます。我々日本人もこの国土で、言葉と歴史を共有して来

た先祖を祭るといふ気持ちで「慰霊祭」を大切にしていたのです。

では、我が国で昔から伝へられた型に従ったお祭りとはどんなものでせう。私は建設会社に勤めてをりますが、機械化が進み時にはロボットも駆使する程の工事現場でも、節目くには古式に則つて「地鎮祭」・「定礎式」等を執り行つてゐます。私がかつて従事したナイジェリアの製鉄所建設工事でも、派遣されてゐた技術者、職人さん達の間で、日本式の「上棟式」もしようといふ気運が盛り上り、にはか俄神主を私が務めました。

「抜けるが如きアフリカの青空の下、工事を進む大和男子やまとものこの技の巧みと意気の高きを、大神達よ見そなはし給へ」と祝詞のりとを上げた事が懐しく思ひ出されます。

こゝで、大成建設が製作した「工事祭典の手引」といふビデオでそれ々の儀式の意味、参加する人々の作法を観てみませう。(ビデオテレビ放映)。

この合宿では、今観て頂いた形式に基本的に倣ひながらも、言はば「手作り」で、毎年心をこめて「慰霊祭」を続けて来ました。今日も皆さんがリクレーションで散策をしてゐる間に、会員の先生方によつて斎場が作られ入念に準備が進められました。(一昨年準備風景ビデオを上映)。

これで、初めての参加者にも概要は理解して頂けたと思ひますが、それでは一体誰をお祭



りし、どなたを偲びながら参加したら良いのでせうか。まづは、身近なご先祖でせう。皆さんのご両親・お祖父様・お祖母様を遡って行けば、十代前までで二千四百十六人、二十代前までだと約二百十万人、三十代前(鎌倉時代)まで遡ると二十一億人以上の方が、あなたのご先祖です。そのうちお一人でも欠けておれば今日あなたは居ない訳で、やはり大切にお祭りしたいといふ気持ちになるでせう。

次に尊敬する英雄・偉人と称へられる方々も、勿論お祭りする対象です。それと共に、目立たなくても家族のため地域のために職責を全うし、それらの本分を尽くして生き、生涯を終へた「名もなき人々」の事も忘れてはなりません。とりわけ、祖国を護るために尊い生命を捧げた戦死者をお祭りし、霊を慰めることは本当に大事にしたいと思ひます。

『正論』（八月号）に小堀桂一郎先生が、柳田国男さんの『先祖の話』（昭和二十年四月起稿）を引きながら、「五十年目のみたま祭に想ふ」と題して次のやうに書いてをられます。

「昭和十六年十二月以降の戦線での死者二百十三万余名……の中の実に多くが、本来持つべき子孫を持ち得ぬままに死んでゆく、若い独身の兵士達であるといふ事実が厳としてあつた。……子孫を残さずに死んでゆく人の霊といふ存在は、必然的に、ではその霊は誰が祭るのか、といふ問ひかけを喚び起す。

（中略）柳田は言ふ。〈国の為に戦つて死んだ若人だけは……無縁仏の列に疎外しておくわけには行くまい〉……若き死者達の近親による霊の祭はやがて絶えるだらう。さうなるとその霊は〈家無しになつて〉（しまふが）それは〈人を安らかにあの世に赴かしめる途ではない〉。」

本来は子孫が祭るべき戦死者の霊は、両親が代はつて祭つたのでせうが、やがて年老いた父母が世を去れば誰も願ふ事がなくなる。それではいけないと柳田国男さんは言ふのです。これに関連して「九段の母」といふ歌謡曲を聴いてみて下さい。（カセットテープ放送）。

一、上野駅から九段まで

かつて知らないじれつたさ

杖をたよりに一日がかり

せがれ来たぞや逢いに来た

二、空をつくよな大鳥居

こんなりつばなお社やしろに

神とまつられもつたいなさよ

母は泣けますうれしさに

(石松秋二 作詞)

戦死した息子を偲んで、年老いた母が東北からはるく靖国神社を訪れる歌です。今ではメロデイも旧く感じられるでせうが、昭和十四年から一世を風靡し多くの人々に愛唱されました。同じ境遇のお母さんも沢山ゐたし、この歌の母の姿に共感する気持ちがある当時の国民の間に溢れてゐたからでせう。二番の最後「母は泣けます うれしさに」のところは聴く度に胸がつまります。息子を亡くしてゐるのだから手放して喜べる筈はないのですが、国のために立派に戦つたといふこと、自分が死んだ後も国が、そして国民みんなが永く祭つてくれるだらうと安心出来る事がうれしいのでせう。現代の私達がその期待に応へてゐるのか甚だ心もとない限りです。先程の小堀先生の文章と併せて汲み取つて頂き、これからの慰霊祭に臨んでみて下さい。

先程、この合宿での「慰霊祭」を「手づくり」と申しましたが、特徴的な儀式を列挙して置きます。

### 一、和歌朗詠

「お祓ひ」の時に三井甲之さんの次の短歌が朗詠されます。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

それ／＼の時代に生きた、多くの先人達の生命がけの意志と行動によつて、今日までわが日本の国は護り伝えられて来ました。平易な三十一文字の中に歴史の真実が表現されてをり、正に民族の絶唱とも言へる歌です。長内俊平先生の朗詠と共に皆さんの心も清めて下さい。

### 二、御製拝誦

「祭文奏上」に続いて歴代天皇方のお歌（御製）が誦み上げられます。幕末の黒船来航以降、近代日本の独立と生気溢れる繁栄の中心には、ご生涯に九万余首の短歌を作られた明治天皇のご存在が常にありました。また未曾有の大戦を戦ひ抜き、戦後復興を成し遂げた激動

の時代には、昭和天皇のお姿が国民の大きな支へでした。「天皇制」といつた議論の前に、遺されたお歌を通じて直接に天皇陛下のお心に触れる機会を大切にしたいものです。

### 三、「海ゆかば」 斉唱

この歌も戦前は広く国民歌謡として、大切な儀式・祭典等の時には必ずと言って良い程歌はれ親しまれて来た曲です。詞は大伴家持の長歌から取られたものですが、実際には『万葉集』以前より歌ひ継がれて来たもののやうです。戦後「東京裁判史観」の蔓延により、戦争の悪いイメージを象徴するものといふやうな誤解を受けてしまいましたが、本当は古来日本人の生き方を映した美しい調べの歌です。この歌を「玉串奉奠」の後、全員で斉唱します。

以上で説明を終わりますが、初めに申し上げた通り、目に見えぬ存在を感じ取り、それと正面から向き合ふといふ、普段の生活では滅多にない経験を、心正して然も楽しんでみて下さい。古臭くて現代にそぐはない、戦争讚美につながるのではないか等、反発・拒絶する前に、昔から日本人が大切にされて来た心持ちと、それを表現した作法——それは皆さん方の三代前……十代……二十代前のご先祖にとつて極く自然に感じられた環境——の中に身を置いてみて下さい。きつと、豊かな阿蘇の自然を通して大きな生命のつながりといったものを感じ

得なさるでせう。では全員で広場の斎場へ移りませう。

### 慰霊祭次第

お祓ひはら（和歌朗詠）

降神こうじん（警蹕ひつ）

献饌せん

祭文奏上もん

御製拝誦てん

玉串奉奠てん

全員拝禮らい（二拝二拍手一拝）

海ゆかば斉唱

撤饌

昇神なほらひ（警蹕）

直会なほらひ

短歌入門

短歌創作導入講義

山口県立下松高等学校教諭

宝 辺 矢太郎



一 はじめに

二 推敲・添削

三 昭和天皇のお歌

## — はじめに

この合宿では短歌を作ることが義務づけられてをり、少々気が重い方もをられるでせう。《歌を作る破目に逢ふ》と思はないで《歌を作る絶好のチャンス》と頭を切り換へませう。人生すべて御縁であります。この合宿に来られたのも、今の大学に入つたのも、御両親の下に生まれたのも、皆んなひよんな御縁があつたからです。歌を作ることになつたのも御縁、何と素晴らしい御縁かと先づは最初に申し上げておきたいのです。

さて、最近こんなことがありました。何を隠さう、私の家内が初めて歌を作つたのです、といふより破目に逢つたのですが。家内は高校で家庭科を教へてをりまして、今年の二月修学旅行で信州の方にスキー実習に行つたのです。余りにも強烈な天候で、息も絶え絶えの体験だつたやうです。余りに生々しい体験は人に伝へずにをれないものがあるやうで、何とか記念になるものを残したいと思つたのでせう、短歌でも作らせようか、と言ふので驚きました。私がときどき生徒に作らせたことがあるので、それを思ひ出したのでせう。

ここに一度も作つたことのない人が、一度も作つたことのない者に作らせるのですから、

人生は面白い。指導は一切なし、それどころか自分も作らなければならぬことに気付き、作つてくれと変なことを申しますので、次の注意をしました。

・ 短歌は「自分の経験」が題材で、自分が作る

・ 「縦書き一行」で「五・七・五・七・七の定型詩」である

そして薄べらながら歌集らしきものが出来ました。短歌とはああいふものだといふ漠然とした知識さへあれば、一応ともかくにも歌らしきものが出来るとは、やはり国語の伝統・日本語の有難さを思はずにはをれません。

従つて皆さんも多少不安はありますが必ず短歌は出来ます。御安心下さい。

それではその歌集から一寸拾つてみませう。上手下手を超えて面白いものです。

人も木も白くかすんで影もなしどこに行くのかわからぬ怖さ

スキー板おまえはなんでいそぐのか止まれずころぶとまるで雪だるま

こけましたたくさんこけて雪まみれ最後までやっぱりこけました

おどろいた猛吹雪の中知らぬ間にほおにできた一本のつらら

お世辞にもうまいと言えないすべり方止まれ止まれと叫んでは人にぶつかる



初めて作つたにしては立派なものです。況してや担任に出しぬけに言はれ、何の指導もないままなら尚のことです。

一寸簡単に見ていませう。一首目はきれいに音数律をふんでゐますが、他は全部音数律が壊れてゐます。字余りは不自然でなければそんなに神経質にならないでいいでせう。ただ五首目の結句の十二字は多過ぎます。しかし字足らずは出来るだけ避けて下さい。どうしても歌のしらべを損ねて仕舞ふのです。

四首目、つららがほほにできるとは論理的に分りません。これは髪の間のお雪が寒さでつららとなりほほに垂れ下つてきたといふことです。

それからどの歌も途中でしらべが途切れてゐます。まあいろいろどの歌にも問題がありますが、それはさておき、どの歌にも人に訴へるものがあるではありません。

せんか。人の心を動かすものがあります。どんな経験も時が経てば忘れ果てます。旅行に行けば写真を撮るでせう、お土産を買ふでせう。しかし言葉に残す努力、それもリズムをもつたしらべに託す努力をして一首をなせば、それはその人にとつて掛け替へのない宝物なのです。十年経つてこの歌集を繙けば、時空を超えて生々しい体験が蘇へるに違ひありません。

## 二 推敲・添削

生徒の短歌は言はば光る原石です。磨く努力をしなければなりません。この努力を聊なりとも実行しなければ短歌を作る意味がないのです。自分の感動に正しい姿を与へるにはやはり努力を要します。何度も指を折るのです。他にもつと適切な表現はないかと言葉を捜すのです。これを推敲・添削と申します。

### (一) 一首一文

短歌では一首一文といふ原則があります。一首は一続きの文章にといふことです。一つの情景や情況を一首の歌にまとめるのですが、そのまとめ方も一つの文章のやうに詠み下すと

いふことです。

先程の生徒の歌は全部途中で切れてをります。一続きのリズムが二つや三つにブツブツ切れて、心の流れが分裂して仕舞ふのでよくないのです。例へば生徒の二首目は「スキー板が勝手に滑つて止めようがなくなつただひたすらころぶだけだつた」等と、何度も一続きの文章になるやうに言ひ直してみるのです。すると段々形が整つてきて嬉しいものです。

次に新聞歌壇から少し引きました。

一と月目に始めて吾兒と湯に入りぬ洗へばいづこもくきくき音す

聞き捨てしはずの言葉がよみがへる夜更の雨のはげしき音に

嫁ぐ日の母の言葉の生き続く温もり恋し七十路吾は

二十年前に納めし母の骨少しずらして父を並べつ

どの歌も途中で切れてゐるやうですが、所謂「腰折れ」と呼ばれるのは一首目で、三句切れになつてゐます。二首目と三首目は倒置法を用ゐてをり、全体としては一首一文になつてゐます。四首目も特に「母の骨を」と言はないでも分ります。

新聞歌壇の歌には腰折れと呼ばれる句切れを大変多く見かけますが、やはり一首一文の歌は統一された一つの姿が示されてゐて、読んで気持のいいものです。ここに御紹介した例はほんの一例ですが、人生の断片にこもるいのちに、読む者も心にさざ波が立つて参ります。新聞歌壇にもいろいろ問題がありますが、無名の人がこのやうなレベルの歌が詠めるといふこと、そしてそれが千数百年死に絶えずに來たとは何と素晴らしいことかと思ひます。

千三百年前に山部赤人といふ人が詠んだ歌

田子の浦ゆ打ちいでて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

一首一文の名歌でありませう。この名歌が名歌たるゆゑんは、歌の姿が雪をかぶつた美しい富士の姿のやうな処にあるのでして、歌は読んで意味が分つたら御仕舞なのではありません。読んで味はふものです。赤人の富士を仰ぐ気持が時間を超えて私達に真直ぐに伝はつて来るではありませんか。

序でながら赤人も推敲添削に没頭したに違ひないのです。この如何にもさらりとした詠みぶりに至る迄、肉を削ぎ骨を削る努力があつたこととせう。

(二) 題材と用語について

すべての感情が題材になります。風景も班の中でのことも、一瞬の心のゆらめきがあればそれが既に題材になります。

用語については出来るだけ文語表現を心懸けて下さい。口語表現は切実な体験を表現するのにどうしても限界があるのです。

一 昨年この阿蘇の合宿教室で、私と同じ班の学生さんが詠んだ

阿蘇の地に不安いだいて来てみたがみんなの熱意我を励ます

といふ歌は、次のやうに直されました。

阿蘇の地に不安いだきて来つれども友らの熱意に励まされけり

どうですか、文語表現にすれば、歌も志であることがよく分るでせう。もう一つ例を挙げ

ます。新聞歌壇からです。

ひと粒も飲んでないのに入れ替えて帰る笑顔の置き薬屋さん

「口語調がかなり甘つたれ気分、ぴりりとした文語体が大切」と、選者の安永路子さんはぴしやつと言はれ氣持がいい。そして次のやうに添削されました。

ひと粒も飲まぬ薬を入れ替えて置き薬屋は笑顔で帰る

何ほどのこともないやうな経験ですが、ニコツと笑つて帰つた富山の薬屋さんが印象的だったのでせう。一瞬の情景に心が動いたら一首出来るのです。こんなことでも歌になるのかと、皆さん少しは楽になつたでせう。

序でながら、仮名遣ひも「替え↓替へ」といふやうに歴史的仮名遣ひにすれば尚良いと思ひます。

(三) 新鮮な感動

駐車場の隅にし咲ける母子草歌よむやうになりて気がつく

この新聞歌壇の歌は、私達が歌を作らうとしてあたりを見廻すときに、ふと感ずることな  
のです。これは歌を作ることを教はつた最高の贈り物と言つていいでせう。何気ない日常の  
一コマに新しい発見があるのです。

詠まうと思へば雑草では済まされない。草の名前も知る必要もありませうし、地名も雲の  
名前も気になつて来ます。と言ふことは世界が拡がるといふことでせう。

母親の後をつけゆく仔馬みて幼き頃の我思ひ出す

これは一昨年 of 参加学生の歌です。合宿で心がきれいになると、何を見ても美しく感ずる  
のです。自分の育ててくれた母親を思ひ出して胸がふるへたのでせう。

(四) 連作短歌へ

山口県は下関市で月一回歌会を催す或るグループがあります。会員の多くは神職の方で、毎月創作短歌を事務局に提出し、まとめたものを水野俊次さんといふ方が講評と添削をなさり、その一部始終が冊子となり、その冊子を元に歌会が催されるのですが、その講評と正された歌の姿に感嘆すること度度です。講評はなかなか辛辣ですが、言葉の道の厳しさと楽しさも教へられます。今日はその添削例を少し御紹介しませう。

靖国神社遊就館

ガラス越し涙で見えぬ真まことなり戦さまの状に胸を打たれぬ

三句切れで所謂「腰折れ」になつてをります。上の句と下の句がうまく繋つてゐない。繋がつてゐないが、非常に共鳴し合つてゐる場合は二首以上に詠み上げる方が反つて作り易いものです。「ガラス越し」を思ひ切つて削つて仕舞ひ、「胸を打たれた」ために「涙」を催したのが順序でせうから、焦点を二つに定めて

若きいのち捧げて果てし戦の真実の姿胸に迫るも

溢れくる涙押へて見入りたり戦没学徒の遺書の墨跡

一首の容量は限られておますので、何もかも詰込うとすると壊れて仕舞ひます。

もう一つ、時間の経過に沿って自分の気持を正確に辿って整理したいいい連作短歌を御紹介  
します。連作にする方が作り易く、いい短歌が出来るものなのです。

雪の朝、二時間かけて長府まで通ふ

凍てし道を怖々おぢぢとしてハンドルを握りて通ふ雪の朝あしたは

(凍てし道怖々握るハンドルに身を固くして雪の上を行く)

遅々として進まぬ道を諦めて迂回したくもその隙間なく

(遅々として進まぬ道を諦めて迂回したきと心あせるも)

坂道にかかれば車止まるなと念じつつ行く渋滞の中

坂道を止まれば車横滑る手に汗握りハンドルを切る

冬用のタイヤにはあれど坂道を横滑りする我が車はや

諦めずアクセルふかし滑りつつもやうやくにして坂を越えたり

五首目の結句「我が車はや」は「私の車よああ」、クライマックスの歌です。雪が凍った坂道を渋滞の中、苦勞して運転する作者の様子がよく分ります。手に汗握る連作です。

さて、水野さんは曾て次の様に言はれたことがあります。「歌としてまとまつてゐないのは、その通りに心がまとまつてゐないからです」。これは実は、恐しい指摘なのです。心の隙がそのまま言葉の隙として表はされる、要するに嘘が詠めない、嘘は必ず言葉のひずみとなつて現はれるのです。また「言葉がそのまま心を表してゐるわけで、言葉はそのまま心であります。言葉を正し言葉を磨くことがそのまま、心を正し心を磨くことになるわけです」との御指摘も重大です。

歌を詠むことを昔から日本人は「歌道」とか「敷島の道」とか呼んで来ました。敷島とは日本のことです。日本人が踏んできた道であつたわけです。

### 三 昭和天皇のお歌

私の家には「昭和六十四年一月七日」とタイトルした一巻のビデオがあります。皆さんは小学生か中学生の頃、元号が「昭和」から「平成」に代はるといふ生涯に何度とない貴重な経験をなさったわけです。

皆さんの誕生日は昭和五十二年前後でせうか、最近では西暦で誕生日を言ふ気味の悪い人が増えて来ましたが、キリスト誕生を紀元としたキリスト暦（いはゆる西暦）は認めるが、天皇の在世を象徴する元号は認めないといふのをかきな話です。

それは兎も角、その日も次の日も、どのチャンネルも特集番組を次から次へと報道したのです。それはもう驚くばかりの量でした。

特に戦後の教育を受け、天皇や皇室について何も知らされてゐない若い人達は、初めて知る歴史の事実には驚いたに違ひありません。

その中でも特に国民の心を打つたのは、「終戦の御決断」「マッカーサーとの第一回目の御会見」、そして「全国御巡幸」ではなかつたかと思ひます。

この御巡幸とは、昭和天皇が「遺族の者らを慰めたい、国民にもう一度立ち上つてもらはねば」との思し召しで、八年半かけて、全行程三万三千キロ、沖繩を除く全国殆どの地方を歩かれたことを指します。

今迄この御巡幸のことなど忘れ去つてゐたお年寄も、何も知らなかつた若い人も、敗戦直後の荒廢した国土の中を歩を進められる昭和天皇の御姿をまざまざとブラウン管を通して身近に拝見したのです。

当時は苛酷なアメリカ軍の占領下で、占領軍もいろいろ計算がありました。

「眼鏡をかけた、近眼で、猫背の小男を見れば、神様ぢやない、人間だといふことが分るだらう」「ヒロヒトのお蔭で父親や夫が殺されたんだからな、石の一つでも投げられりゃいいんだ」

ところが御巡幸が始まつてみると、彼らは仰天するのです。天皇が行かれる所、その御姿を仰いで泣かない民はゐなかつたのです。国民は熱狂して陛下をお迎へし、声を限りに「天皇陛下萬歳」を絶叫したのです。

次の三首の御製（お歌）は、昭和二十年から二十一年にかけて作られたものです。

戦災地視察

(御年四十六歳)

戦のわざはひうけし国民くこたみをおもふころにいでたちてきぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

このお歌に響き合ふかのやうに、『短歌のすすめ』の著者のお一人であられる山田輝彦先生は当時次のやうな歌を詠まれました。

との曇ぐもる五月の海を天皇旗近づき来れば迫るわが胸

うつし世のけぢめことごと消え失せて一つ思ひに叫ぶ万歳

我がいのち貧しかれども息の緒にみかど慕ひて生くべかりけり

鈴木正男著『昭和天皇の御巡幸』によれば、昭和二十四年五月十九日、御召艦「清見丸」で海路北九州の若松に御上陸になりました。

さて、御製一首目の「いでたちて来ぬ」といふ御言葉に、居ても立つてもをられぬ、取る

ものも取り敢へずやつて来た、といふ差し迫つた緊張感が偲ばれます。そして「わざはひをわすれて」出迎へてくれた国民に昭和天皇は心からのお喜びを歌はれ、山田先生は二首目に「うつし世のけぢめ」がことごとく消え失せた、と泣いてをられます。

打ちひしがれて生活してゐた中にも、生きてゆく力の火が灯つた一瞬があつたのですね。

天皇と国民の思ひが打てば響き合ふやうに、真直ぐに通じ合つてゐることが波打つ歌のしらべにはつきりと直覚出来ます。何といふ不思議な国柄であらうかと思はずにはをられません。

敗戦のショックで虚脱し、戦後の混乱で茫然自失してゐた国民は、昭和天皇の力強い御声に接し、「これではいけない」と奮ひ立つたのです。食糧増産、石炭増産など国民は死にも狂ひで働き、信じられないやうな復興を遂げたのです。

それにしても、敗戦国の君主が、その戦争によつて肉親を亡くし、家を焼かれ、ひもじい思ひでさまよつてゐる国民を励まさうと、旅に出かけられるなどといふことが、古今の歴史にあつたでせうか。

また先の鈴木さんの御著書に次のやうな挿話がありました。栃木県にお成りのときのことです。

「僕が自転車から降りて萬歳を唱へたら、陛下はお応へになられた。僕一人に……」

この青年の感激は私の感激でもありません。この青年にとつて、天皇のお歌は自分に下さつたお便りのやうなもので、何度も何度もくり返して読んで違ひないですね。

天皇といふ御方は、僕らが忘れてゐても、いつも御手を振られてゐるやうな方なのです。

「真白にぞ」と赤人が富士山の神々しさに絶句した一瞬、「一つ思ひに叫ぶ萬歳」と山田先生がお詠みになつた一瞬は永遠に伝はるるのではないでせうか。

さて、今から歌を作つていただきます。自分の気持を正確に表した歌は必ず人の心を打ちます。自分の持つてゐる語彙力で十分可能です。頑張つてみて下さい。



短歌入門

創作短歌全体批評

熊本市企画調整局情報企画部情報企画課

折田 豊生



はじめに

批評と添削

をはりに

## はじめに

これから、皆さんが昨日お作りになつた短歌について、私なりに感じたことを述べさせて戴きたいと思ひます。私はもちろん歌人でもなく、短歌を専門に研究してゐる者でもありません。ただ皆さんより幾分短歌に触れる機会が多かつた者の一人として、短歌を作るときのポイントとか留意点について、若干の助言をさせて戴ければと思ひます。

感想を述べる前に、短歌を作る上でなぜ批評が必要なのかといふことに触れておかなければなりません。それは、短歌を作る最も大きな目的が「言葉の修練」延いては「心の修養」といつた、人としてよりよく生きるための根元的な課題に深く関はつてゐるからだと言つていいでせう。この合宿教室の数日間の経験に照らしてみても、皆さんは、すでに、言葉の重みといふものを十分にお感じになつてをられるだらうと思ひますし、言葉を正しく整へ合ふといふことがどれほど大切なことであるかもおわかり戴いてゐると思ひます。そのやうな基本的な観点に立つて短歌創作の意義を見直してみますと、批評は創作と同じ位重要な意味を持つてゐるのであつて、短歌は、作りつ放しでは作つた意味が半減してしまふといふことが、

この後の班別の相互批評においても、よくご理解戴けることと思ひます。

言葉に表現するといふこと、殊に短歌のやうに心のありやうを表現するといふことは、表現のあり方を含めて、心を裸にしてみせることに他ならない訳で、多少、気恥づかしい思ひもするのですが、短歌を作つたら、必ず、誰かに見せて、感想を聴くやうにして戴きたい。それが、心の交流を生み、互ひの修養に繋がつていく機縁にもなると思ひます。

この合宿教室だけでなく、日常の生活においても、ぜひ、短歌の創作を實踐して戴きたいのですが、私の経験では、便りの端に短歌を書き添へるといふのが、最も自然で、無理なくできるやり方であるやうに思ひます。

### 批評と添削

皆さんが昨日お作りになつた短歌は、全部で五〇三首、そのうち二九四首の歌が選ばれてお手許の歌稿になつてゐます。この歌稿は、先生方やスタッフの徹夜に近い作業によつて作られてゐます。皆さんが真剣に短歌をお詠みになられたことも含めて、多くの人の心の籠もつた歌集ですから、心してお読み戴きたいと思ふ次第です。



それでは、批評と添削に入ります。

○

重苦し暗雲立ちこむ阿蘇山を悲しと思ふ姿見え

ぬが

この短歌は、初句、第二句、第四句で切れてゐます。昨日の短歌創作導入講義の中で、宝辺矢太郎先生は、短歌を作る最も基本的なルールの一つとして、一首が一文になるやうに一息に詠むべきだとおっしゃつたのですが、先づ、そのことについて修正を施さなければなりません。また、結句は、「姿見えぬが」では倒置になりませんから、それも含めて、多少、字余りになります。次のやうに直してみました。

重苦しく暗雲立ち込む阿蘇山を悲しと思ふ姿見えねば

これでも、「重苦しく」「暗雲」「悲し」の表現がオーバーであり、「姿」も山を表はす言葉としては余り適当とは思はれません、短歌の表現は、定型の音数律に支配されるだけで、こゝとさらに強調したり特別な言葉を用ひたりする必要は何もありません。普段の会話のやうに実態に即した自然な表現を心がけるべきであつて、決して力んではいけません。そのやうなことを踏まへて、

雨雲に深くおほはれ阿蘇山は望めど見えなくやしかりけり

としてみましたが、いかがでせうか。

○

頂で景色を眺め息を吸ひ心たまらず空を吸ひ込む

この短歌もオーバーな表現が目立ちます。特に、「空を吸ひ込む」は、劇画の「ウルトラマン」に出てくる怪獣のやうで非現実的であり、違和感があります。「心たまらず」も不正確な表現です。

頂で景色を眺め大空を吸ひ込むごとく深呼吸する

としてみても、まだオーバーでせう。この歌は非常な爽快感がテーマだと思ひますが、体験とかけ離れないやうにして詠むと、

おほいなる阿蘇の景色を眺めつつ胸一杯に息を吸ひ込む

といった感じになるのではないでせうか。

○

竹本忠雄先生の御講義を聴きて

雪にしなふ竹の如しと我が国ぶり力強く言ひ表されたり

詠まうとしてゐる題材は非常にいいのですが、音数律の乱れによつて、それがよく活かされてゐません。音数律が整つてゐない理由の一つとして、内容のある題材を一首の歌に詠み込むことの無理が上げられるやうです。

また、「国ぶり」には、「を」を補はないと歌が切れてしまひます。

無理なく詠むために、次のやうに連作短歌にしてみてはいかがでせうか。

雪にしなふ竹の如しと我が国の戦後の様をたとへたまへり  
国ぶりのしなやかなればいつの日かもとの姿に立ち返るべし

○

国のため命くださいし益良夫のたけき姿は胸せまりくる  
松陰の志をば吾が胸にきざみて生きむと我は決意す

張りのある非常にいい歌です。ただし、一首目の「命くだきし」は「命ささげし」か「心くだきし」に、「たけき姿は」は「たけき姿に」にすべきでせう。

二首目の「吾が」と「我は」は内容的に重複しますから、「吾が」を「しかと」としてはどうでせうか。短歌は三十一文字しかありませんから、できるだけ重複を避けなければなりません。重複を省いた分だけ幅広い表現ができることになり、歌全体に広がりや豊かさが出てきます。

○

「大丈夫か」と疲労極まる友を見て名前は知らねと思はず声をかけたる

やさしい心遣ひが表された歌ですが、極端な字余りがリズムを崩してしまひ、よい題材を擱んでゐながら、惜しいことに、歌としての体裁を失つてゐます。

また、「疲労極まる」は主観的であり、漢語表現の固さも気になります。「大丈夫か」と「声をかけたる」の間が開きすぎるのも、文の構成上は好ましくありません。次のやうに添削してみました。

疲れたらむ友の名前は知らねども「大丈夫か」と声をかけたり

○

贄塚にほへにのぼって五岳眺めれば恥かしいのか霧に隠れる

口語で詠まれた短歌です。先づ、これを文語表現にしてみますと、

贄塚にのぼりて五岳眺むれば恥づかしかるらむ雲に隠るる

となります。「恥づかしかるらむ」だと四句で切れてしまひますから、「恥ぢらふごとく」として、一首一文にすべきでせう。

また、この歌は、山について一種の擬人化が採られてゐます。擬人化は面白い面もありますが、どうしても、不自然さを免れることができません。実際は、山が雲の方に隠れに行つたのではなく、雲が流れてきて山が隠れたのですから、先づは、ありのままを詠むことに努

めるべきでせう。大自然の息吹きを感じることに単に擬人化することとは、全く次元の異なる問題であらうと思ひます。

贅塚にのほりて五岳流むれば惜しくもたちまち雲に隠るる

とすれば、より自然な感じになるのではないでせうか。

○

発言に疑問の多き我を見る友の眼差し温かきかな

「発言に疑問の多き」が、わかりにくい表現になつてゐます。疑問を感じてゐるのは、果たして、「私」と「友」のどちらなのでせうか。

「友の眼差し温かきかな」といふ感謝の気持ちメインなのですから、多分、「私は自分でもとりとめのないことばかり言つてゐるのに」といつたやうな意味なのでせう。

さうであるならば、

言ふことの定かならぬに我を見る友の眼差し温かきかな

としてはいかがでせうか。

もし、「みんなに反発を感じてゐるのに」といつた意味が含まれてゐるのでしたら、上一句を、「言ふことの素直ならぬに」としてもいいやうに思ひます。

○

吾の思い伝わぬことのもどかしさ涙あふるが友は目でうなづく

先づ、口語を文語にし、文法的な誤りを訂正してみませう。

吾の思ひ伝はらぬことのもどかしさに涙あふるるが友は目でうなづく

これでも、まだ、すべての句が字余りでリズムがなく、「目でうなづく」も正確な表現と

は言へません。

また、どうしてももどかしいといふことをストレートに言はなければならぬか、といった問題もあります。つまり、その場の状況を詠むことによつて、もどかしい気持ちは婉曲的に表現できるのではないか。さうすれば、重複が避けられ、もつとほかのことを詠み込むことができ、字余りも避けることができるのではないか、といふことです。

たとへば、

思ふこと伝へえずして涙ぐむ吾をやさしく見つむる友は

といふやうな詠み方ではいかがでせうか。

○

緊張と不安を胸に阿蘇の地で仲間の笑顔に心安まる

「緊張と不安を胸に」の後に続くべき「抱き来れども」といふ一句が抜け落ちてゐるため、

文の構成に前後のつながりがありません。字余りを避けるためとはいへ、必要な言葉を省いてはいけません。正確に詠むといふことは短歌を作る上で最も大切なルールの一つですから、先づは、短歌がきちんとした一文を形成してゐるかを確認しませう。その上で、五七五七七の音数律に合はせて言葉を選び、全体を整へていくやうにしていけば、間違ひがないと思ひます。

このとき、歌に詠まうとする主題と関係の薄い説明的な言葉は、詞書（ことばがき）として、歌の前に出すこともできません。

たとへば、

阿蘇の合宿にて

緊張と不安を抱き来れども友の笑顔に心安まる

とすれば、全体に無理がなくなるやうに思ひます。

「野いちご」と友の指さす先見れば草かげの下赤い実ありけり

ふとした体験を濃やかに詠んだいい歌だと思ひます。「赤い」は口語ですから、「赤き」に訂正すべきでせう。

また、「先」を「方(かた)」と、「草かげの下」を「草下かげに」とすれば、さらによくなるのではないでせうか。

○

雄大なる阿蘇の神々に包まれし吾の存在の微々たるがごと

「神々に包まれし」は、どうも不自然です。また、「吾の存在」や「微々たる」といつた漢語表現は、その言葉の響きがとても固い印象を与へます。短歌は単に「歌」とも言ひますが、文字どほり、口に出して歌ふものでもある訳です。できるだけ歌ふのにふさはしい柔らかい言葉を使つた方がいいやうに思ひます。

余り力まないで、普段、誰かに話しかけるやうな言葉を基本にして一文を作り、それを文

語に変へるやうにすると、幾らか、歌が作りやすくなるのではないでせうか。

雄大なる阿蘇の自然に包まれて吾の小さく思はるるなり

と添削してみました。

○

宝辺矢太郎先生の講義を受けて

大君の御歌に言葉つまらせし想ひに我もまた涙する

作者の心の張りがストレートに伝はつてくる感動的な歌です。

ただ、一っだけ気になるのが、「想ひに」といふ表現です。「想ひをしのび」といふことなのでせうが、このままでは相手の想ひを主観的に断定してしまふことになりかねません。二人が一つ心になつてゐる美しい光景なのですが、それでも、それぞれの想ひは全く同じとは言ひ切れないのです。

一つの方法として、状況をそのまま詠むことによつて心が伝はるといふこともある訳ですから、

宝辺矢太郎先生のご講義をお聴きして

大君の御歌に言葉つまらせしお姿見つつ我も涙す

としてみました。

○

贅塚に登りし道の草原に吹く風ほほに心地よかりけり

直前の体験を想ひ出して詠んだ歌です。結句は、「心地よかりき」とすれば、字余りを避けられます。

ただ、このやうな爽快感をテーマにした歌は、回想するよりもその場で詠んだ方がリアルであり、時間がそれほど経過してゐないのであれば、その時点に立ち返つて詠むことも可能

ではないでせうか。

たとへば、

贄塚に登りてくれば草原を渡りくる風心地よきなり

といふやうな詠み方ではいかがでせうか。

○

見はるかす阿蘇贄塚にのほり来てこのよき時を友と分かちぬ

初句と第二句とのつながりが明確ではありません。多分、「遠くに見てゐた阿蘇の贄塚に」といふのではなく、「遠くに阿蘇の山々を眺めながら贄塚に」といふ意味でせう。ところが、さうすると、「阿蘇」と「贄塚」の間で歌が切れてしまひますから、歌全体を一文になるやうに構成し直す必要があります。

また、結句の「分かちぬ」は「分かち合ひぬ」とすべきでせうが、それだと字余りになつてしまひます。

以上を踏まへて、

贅塚ゆ阿蘇の山々眺めつつこのよき時を友と共にす

としてみました。

○

松陰先生への母の手紙

いつの世も子を思ふ母の御言葉は慈愛の心に満ちあふるなり

結句の「満ちあふる」は、正しくは「満ちあふるる」ですが、さうすると、字余りになつてしまひますし、この歌の場合は、動きを表すのではなく、状態を表すのですから、「満ちあふるなり」とした方がいいでせう。

また、詞書は、歌を支へる大切な要素の一つなので、松陰先生の母君のお手紙を「読みて」と丁寧書き添へるべきだと思ひます。

○

風邪の床にて

友がみなレクリエーションに往きにけるを一人床にて寂しかりけり

この合宿教室の裏方を手伝ふため、アルバイトの高校生が五名来てくれてあります。その全員が歌を詠んでくれたのですが、これは、そのうちの一首です。

風邪で体調を崩して息んであるときの詠草ですが、一つのテーマを、短歌の音数律に合はせて、一首一文の形で無理なく表現するといふ基本的なルールが、よく守られてあります。力まずに詠むことの大切さを教へてくれるやうな歌だと思ひます。

をはりに

歌稿の終りの方に、国民文化研究会の先生方の歌がたくさん掲載されてあります。

この合宿教室では、皆さんと同じやうな体験をなさつてをられる訳ですが、どのやうなと

ころに目を向けられ、どのやうに詠んでをられるかに注意してお読み戴きますと、短歌による修養の意味がよくわかり戴けると思ひます。

伊藤哲夫・竹本忠雄両先生をお迎へして

こころざし雄々しく気高き大人二人獅子吼せられきこの壇上ゆ  
若き方も老いも挙りて聴き入りきみこもるその雄叫びを  
今のままの政治・外交・教育の正されざればみ国危ふしと  
同じ憂ひ国内になきにあらざれど要路の人らはいまだ気付かず  
阿蘇の地に集ひしえにしかりそめと思はず進まむ峻しき道を

小田村 寅二郎

母君より松陰先生へ送りたる書簡を読みて

食たちしわが子憂ひてつゞりたる文をし読めば涙こみあく

末次 祐司

母君の祈りこめたるみことばに先生の心いかにありけむ  
年老いて病の身をもかへりみず走らせ給ふ筆ぞ尊き

贄塚に登る

宝 辺 正 久

刈草の小野を登ればそこかしこ撫子咲けり路のほとりに  
鶯が峰のロッククライミングを語る友の声を聞きつつ汗垂り登る  
霧雨の来たりて過ぎつ草山の頂きにして汗拭ふとき  
頂きに生ゆる茅草ちんくさの尖り葉に露おき光る夕立のあと  
阿蘇谷の広き青田を見さけつつ風に吹かれぬ友とならびて  
大阿蘇の根子岳の峰さやけくも空に立つかな夏草の果に

妻への便りのはしに

長 内 俊 平

降りたてる肥後の國原空澄みて阿蘇の群山むらやま浮きたつ如し

友としばし佇ちて眺むる阿蘇山の深き緑の眼まなこに泌みつ

語りあひつ、憩ふしばしをひぐらしの森のかなたゆなく声きこゆ

風のまに山のなだりの草なびき頂さして移りゆくみゆ

いかがでせうか。

先生方の洗練されたお歌を詠ませて戴きますと、強い思ひや深い感慨が如実に伝はつてくるやうな言葉の迫力を感じさせられますとともに、感受性の豊かさや情景が眼に浮かぶやうな優れた描写力を思はされます。短歌の鑑賞についてはここでは触れませんが、一つのお手本として、丁寧を読んで、味はつて戴きたいものです。

さて、皆さんは、これから、班ごとの相互批評に移られる訳ですが、相互批評をするときの留意点について、若干申し上げておきたいと思ひます。

先づ、第一に、批評をし合ふ前に作られた短歌を丁寧に読み、作者の気持ちを十分に汲み取る努力をして下さい。

次に、作者の表現を尊重しながら、みんなが協力して知恵を出し合ひ、作者の気持ちに沿

つた表現に近づけていくやうにして下さい。

この二点を踏まへて、互ひに真剣になつて言葉の修練に取り組んで戴きたいと思ひます。

それでは、これからの時間が、充実した心の交流のひとつときとなりますやうにお祈りしながら、私の話を終はらせて戴きます。

一年の歩み

福岡県立春日高等学校教諭

與島誠央





## 秋・冬の活動

平成七年夏の「第四十回全国学生青年合宿教室（厚木）」終了後、各地区に帰った参加者を中心に平素の学問研鑽の活動が展開された。四泊五日の夏合宿で得た経験を着実なものとしてゆくためには、この各地区での日常の活動が大切な意義を持つのである。今回は特に東日本・西日本規模での合宿が事前から計画され、夏合宿の期間中に早くも参加者への呼び掛けがなされた。

東日本合宿は関東を中心に、北海道、北陸、四国からの学生二十一名と社会人十一名の集ふ賑やかなものとなった。「古典に学ぶ―昔の日本人と心を通はせよう」とのテーマのもと、幕末の志士吉田松陰の遺文を読み味はつたのである。北海道大学一年の服部泰子さんは次の様な感想を述べてゐる。

「今回の合宿は、本当に色々な刺激を与えられました。まず、松陰先生の生き方に触れ、以前にもまして深い感銘を受けました。私は、只今二十才ですが、松陰先生と比べると、頭も心も使い足りません。いつも気が付けば安逸な方へ逃げている様な気がします。だ

からこそ一途な熱い姿勢に心を打たれました。己の道を信じて一途に向うことは難しいことですが、きつとその想いが強ければ強いほどその大変さより、喜びが大きくなるのだらうと思いました」。

先人の人生観を素直に受けとめ、自分自身を振り返らうとする学問の基本姿勢が如実に語られてゐる。常に立ち還るべき学問の初心と言へよう。

またこの合宿では、小田村理事長のご高配により「終戦の詔書」録音テープを拝聴する機会が得られた。参加者の感動は並々ならぬものであつた。内海勝彦氏（国文研会員、日産自動車勤務）の短歌を紹介させて頂く。

おごそかに流れ出でたる「君が代」はいまの代よりもゆるやかに聞こゆ

只今より重大発表ありますとふアナウンスに吾も身のひきしまる

戦陣にたふれし人と遺族とを思はるお言葉聴くも畏し

にはかにもみ声のしらべ切迫し胸内ゆのたまふ「五内為ニ裂ク」

み心に余る思ひのあふれいでなげきとなりしかそのみしらべは

このしらべ忘れてあらめや天皇のみ心ここにありと思へば

同胞の相争ふを一番に戒めたまふみ情尊し

戦ひのいたではあれど将来の建設誓はるる雄心仰ぐも

敗戦は敗北ならず日の本のほこり忘れず生くる限りは

世の人らいふことやめよひたすらにみ声をば聴け詔書をば読め

一方、西日本合宿は今回四回目となり、「戦後五十年——私達はどのやうな時代を生きてきたのか」と題して熊本を中心に企画された。社会人二十名、学生五名が集ひ、占領史、日本国憲法、神道指令、検閲、教育改革などのGHQ政策を史実に基づいて学んだのである。最終日には小田村四郎先生（拓殖大学総長）より「占領後遺症の克服」と題して御話を頂いた。アメリカ大統領ルーズベルトの世界戦略から説き起された御話は、現在の日本の政治家に対する鋭い批判に及び、祖国の真の独立を求める先生の切なる思ひが参加者の胸を強く打った。

これらと並行して、紙面の都合上詳細は紹介できないが次の様な活動が展開されてゐる。

亜細亜大学の東中野修道教授による学生指導（学生による発表、短歌の会、合宿）、正大寮の輪読会（長内俊平先生）、万葉集を読む会（関口靖枝さん）、四士会（飯島隆史さん）、『本居宣長』を読む会（柴田悌輔さん）、防大勉強会（松吉基順先生）、関西信和会輪読・合宿（北村公一さん）、国民文化懇話会（是松秀文さん）、『講孟余話』輪読会（小野吉宣さん）、清風会（末次祐司先生）熊本日新寮輪読会（徳永正巳先生）、熊本大学輪読会（吉村浩之さん・喜多村純君）、川井修治先

生の短歌の会。

これらの活動の一端として亜細亜大学合宿の記録集『翌檜・十二号』から、同合宿に参加した東京大学文学部三年山口花子さんの感想を紹介したい。

「松陰先生の文章は本当に難しく、すごく厳しいことが書いてありましたが、学生の皆様やOBの方々、東中野先生と輪読を進めていくうちに自分にとっての学問と自分にとっての為すべき事というものに関して非常に考えさせられました。また、東中野先生のご講義のなかで皇后陛下の御歌に触れることができたことが今回一番の感動でした。御歌のなかで皇后様はお子様のこと、お母様のこと、そして日本の国のことを、優しく、かつ気高い目で見られていました。私は、皇后陛下のなかに日本女性のあるべき姿を見たといい思いを持ちました。」

現在の大学生活のなかで、このやうな気高い精神に触れる地道な活動がなされてゐることの尊さを思はずにゐられない。

〈地区合宿〉

東日本秋季合宿	平成七年十月十三日～十五日	東京「国立オリンピック記念 青少年総合センター」
西日本秋季合宿	平成七年十一月二十四日～二十六日	佐賀「東原庁舎」
亜細亜大学 比較文化研究会	平成七年十二月二日～三日	東京「武蔵野青年の家」
関西信和会	平成七年十二月十六日～十七日	兵庫「六甲山荘」
亜細亜大学 比較文化研究会	平成八年二月十六日～十八日	東京「東京国際ユースホステル」

春の活動

平成八年の一月、日本大学法学部四年澤部和道君から「全国春季学生合宿」の案内が届いた。前年の秋からあためてきた計画である。幕末の志士吉田松陰の文章に触れ、自分の生

き方を見つめたいといふ呼び掛けは踊るやうに飛び込んできた。日程の詳細は別表の通りで、今回は特に本会会員大塩耕三さんのお世話により松陰が海外渡航を企てた下田に近い静岡県  
の河津での開催となつたのである。参加者は、学生十二名、社会人八名、講師として小柳陽  
太郎先生（本会副理事長）をお招きしての二十一名となつた。

伊豆半島の自然豊かな山腹に位置する「つりばし荘」（大塩さん経営）の周囲には早咲きの  
河津桜が美しく咲き匂ひ、関東、関西、北陸、福岡、熊本、鹿児島  
の友を迎へてくれた。開  
会式後の自己紹介で、ある友は「この合宿に友を得るために参加した」と語り、またある  
友は「全国の仲間と志を語り合ひたい」と呼び掛けるなど、濃密な合宿がはやくも予想され  
た。

その後、澤部君の松陰の生涯についての導入発表、輪読と続き、皆でその潑刺たる精神の  
息吹に触れていった。夜十一時頃になり、一人の友が「自分はなかなか相手に心が開けない」  
と苦しい胸の内を語つてくれた。参加者は彼に各自の思ひをうちつけに語り、励ました。深  
夜二時に及ぶこの語らひは、厳しくもあつたが、その後の合宿の展開をダイナミックにする  
ものであつた。

二日目午前中の小柳先生のご講義は目の醒めるやうな感銘深いものとなつた。「現代では

観念的に世界の平和や人間の命といふものが最上の価値のやうに思はれてゐますが、そんなことより自分自身の人生の内奥を充たしてくれるもつと大事なものであるのではないでせうか。歴史とは、それを追求し、それに対して命を懸けた人の足跡なのです」と語り出された先生の御話は、野山獄での同囚の人々との付き合ひに見られる松陰の真心や『講孟余話』に見られる高きを求める志に及び、朗々としたお声は参加者の胸に沁み通つていつた。

昼食後、宿舎近くの七滝ハイキングコースを散策したのも楽しいひとときであつた。その後短歌創作、夜は二班に分れて相互批評の楽しい時間を過した。夜の集ひでは厳しい時間を経てきただけに心を裸にして、時に爆笑、時に談論風発、時を忘れるやうであつた。

最終日の輪読、感想発表は次の感想文を読んで頂くこととしよう。

日本大学法学部一年 山口 大

「今回初めて合宿に参加したのですが、やはり一番最後の輪読の時間が心に残りました。自分の合宿の感想を述べるときに感極まって泣いたことは、たぶん一生自分の心に残るのではないかと思います。ありがとうございました。」

鹿児島大学法学部一年 西 真佐人

「今回の合宿は、これからの生き方を考えるうえで、とてもためになりました。松陰が

今生きて僕に講義しているようで、複雑な気持ちになりました。

我々を迎へるとき旅館前の色鮮やかな早咲き桜よ」

福井工業大学工学部二年 増村博文

「今回の春季合宿に参加するに当り、東京正大寮の澤部先輩よりお電話を頂き、北陸の田舎に住む自分のことを思つてみて下さつたとジンと来るものがあつた。これだけ氣をかけて頂いたのに参加しないと答へるのは男が落ちる。と、氣合ひを入れて伊豆へきて多くのことを考へ、想ひ、言ふことが出来たと思ふ。松陰大人の書『講孟箚記』のみならず、短歌相互批評、御講義と、どれを取り上げてみても、新鮮かつ強烈に感じた」

元、西南学院大学（現在、マレーシア日本人学校講師） 小島尚貴

「春季合宿が終了した。私の心に、合宿で出会えた素晴らしい友や先輩たちと一緒に、吉田松陰という人物が新しく住まう事となつた。私は、これまでも自分の生き方には自信を持つていた。しかし、歴史上の先人達のあまりのスケールの大きさに圧倒されては、歴史の流れを作り、それを導いていく人物は、自分の全く知らない所から出てくるものだと思つていた。そして、松陰は、最もスケールの大きい人物だった。私は、講孟箚記の文によつて、自分自身を存分に思い知らされた。その結果、私でも歴史の胎動を生み

3月8日(金)	3月9日(土)	3月10日(日)
	起床・洗面 朝の集ひ	起床・洗面 朝の集ひ
	朝食	朝食
	御講義 小柳陽太郎先生	輪読
	討論	感想発表
	レクリエーション (七滝を散策)	昼食
		感想文執筆・閉会式
開会式・自己紹介		解散
導入発表	短歌創作	※合宿終了後、 希望者は、下田 への小旅行を行 った。
輪読	輪読	
食事・入浴	食事・入浴	
輪読	短歌相互批評	
就寝	夜の集ひ	

〔平成八年 春季学生合宿 日程表〕

出すひとかけらの仕事が出来るといふ気がしてきた。  
 「国憂ひ日本を駆けし松陰の真心我も継いでゆきたし」  
 全てを紹介できないのが残念だが、この合宿の勢ひは了解して頂けるものと思ふ。

## 夏に向けて

四月から各大学では新入生を迎へ勧誘が展開された。関東では女子学生による合宿や亜細亜大学での新入生歓迎合宿が行なはれてゐる。私のもとにも教へ子の浦義勝君（早稲田大第二文学部一年）から嬉しい便りが来た。

「五月二十一日新宿にて、山口秀範さん、青山直幸さんが僕を迎えてくださいました。三人で近くの料理店に入り、色々な話が弾みました。身近なことから歴史、文学、環境問題、経済など……その他僕が今後は非目を通しておくべき人物、書物、さらには阿蘇の夏季合宿について紹介して頂きたいへんな収穫となりました。昨日はさっそく図書館にて小林秀雄さんの『私の人生観』という本を借りてきました。今は焦らず一歩ずつ自分の理想に近づける努力をしてゆこうと思います。」

先生、夏に阿蘇で会いましょう。楽しみにしています」

平成八年の第四十一回阿蘇夏合宿は間近に迫つてゐた。

合宿教室のあらまし

熊本学園大学商学部四年

喜多村

純





第四十一回全国学生青年合宿教室は、平成八年八月二日から八月六日までの四泊五日、熊本県の阿蘇町にある阿蘇の司・ピラパークホテルにおいて開催された。合宿会場は世界一の広さを誇るカルデラの真只中に位置し、雄大な阿蘇の山々を臨んでゐた。合宿教室開始の二日前には、国民文化研究会会員数名と学生数名が集合し、最後の準備を行なつた。作業は着々と進み、「友よ」と呼べば「友は来りぬ」の垂れ幕も張られ、開会式を待つのみとなつた。

合宿教室の参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 三九大学) (数字は参加学生数)

亜細亜大学 6、早稲田大 4、東北女子大 4、鹿児島大 3、ライセンスカレッジ 3、日本大 3、福岡大 3、東北女子短期大 3、宮崎大 2、島根大 2、尚綱大 2、福岡教育大 2、拓殖大 1、獨協大 1、九州大 1、福井工業大 1、成蹊大 1、京都大 1、東京大 1、神奈川大 1、防衛大 1、駒沢大 1、熊本学園大 1、東京法律専門 1、同志社大 1、東京工科大 1、長崎大 1、慶応義塾大 1、法政大 1、桜美林大 1、北海道大 1、新潟県立看護短期大 1、熊本大 1、実践女子大 1、武蔵野音楽大 1、中村学園大 1、青山学院大 1、横浜国立大 1、国立音楽大 1。

計六四名(うち女子二八名)

(社会人・教育参加者)

二七名

8月5日(月) (第四日)	8月6日(火) (第五日)
(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ・朝食
(講義) 加納祐五先生	(合宿を顧みて) 與高誠央先生
班別研修	参加者感想 自由発表 感想文執筆及び 第2回短歌創作
	班別懇談
昼食	閉会式
(創作短歌全体批評) 折田豊生先生	(昼食・解散)
班別 短歌相互批評	
地区別懇談会	
夕食 入浴	
班別研修	
夜の集ひ	
就床	

(写真)  
(事務局)  
(国民文化研究会)  
(招聘講師)

総計  
一七八名  
一名  
七名  
七七名  
二名

合宿教室のあらまし

		8月2日(金) (第一日)	8月3日(土) (第二日)	8月4日(日) (第三日)	
第四十一回「全国学生青年合宿教室」日程表	6:30		(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ 朝食	
	8:30		(講義) 伊藤哲夫先生	(講義) 竹本忠雄先生	
	10:00		質疑応答	質疑応答	
			班別研修	記念写真撮影	
				班別研修	
	12:00		昼食	昼食	
	1:00		(歴史講義) 国武忠彦先生	(短歌創作導入講義) 寶邊矢太郎先生	
	2:00	開会式 オリエンテーション	班別研修	レクリエーション	
	4:00				自己紹介 打ち合せ
	5:00		夕食 入浴	夕食 入浴	夕食 入浴
	7:00	(合宿導入講義) 坂口秀俊先生	(輪読導入講義) 小柳志乃夫先生	(講話) 長内俊平先生	
	8:30	班別研修	班別輪読	慰霊祭説明 山口秀範氏	
				慰霊祭	
	10:00			班別懇談	
		就床	就床	就床	

参加者は合宿申込者アンケートに基づいて六名から九名を単位とする班に編成され、事前合宿参加者や過去の合宿参加者、国民文化研究会員が班長となつた。男子学生は七箇班、女子学生は五箇班、社会人は五箇班に分けられた。

## 第一日（八月二日）

### 〈開会式〉

午後二時、全国各地から集まつて来た参加者が一堂に会し、まづ福井工業大学工学部三年増村博文君によつて開会宣言がなされ、第四十一回全国学生青年合宿教室が始まつた。国歌を二度斉唱した後、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。続いて主催者を代表し、社団法人国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授、小田村寅二郎先生が登壇され、「この合宿教室は昭和三十一年に第一回を開催したが、当時顕在化してきた『世代間の断層』を埋めるためのものであつた。ここに集つて来た皆さんも、学校・学年・年齢などの外的差別を乗り越えて、皆が一人の青年としてお互ひに話し合ひ学んで行つてほしい。かつて西ドイツのアデナウアー首相をも動か



した教育勅語は、天皇と国民が共に践み行つていかうとするものだがその深旨が日本人相互の心の中で再認識されるやうになるまで合宿教室を永遠に続けていつてほしい」と話された。最後に参加者を代表して、京都大学総合人間学部三年の庭本秀一郎君が「心から本当に惚れることのできる人と出会ふために積極的に関心を開きませう」と呼びかけた。続くオリエンテーションでは、福岡県立春日高等学校教諭、與島誠央合宿運営委員長が「四泊五日の合宿を通して日本の国の歴史、そして皆んなの御祖先のことをしつかり見つめよう」と話られ、合宿の運営、趣旨について説明をされた。そして、熊本県立宇土高等学校教諭、久保田真指揮班長による細部にわたる注意事項が伝えられた後、参加者一同は心新たにその後の日程に取り組んでいった。

### 〈講義〉

合宿導入講義として、福岡県立門司高等学校教諭坂口秀俊先生が「真の生きる力とは何か——歴史を正確に見直そう——」と題して話された。先生は、現代人が自ら学び、考へ、豊かな人間性を持つためには歴史についての教育が重要だと述べられ、戦前の日本の立場や米軍の占領政策など様々な例を挙げ、「戦前はファシズムで暗い」といつた、単純化された歴史の見方はおかしいと指摘された。そして学生に、心を開き、正確なものを見て正しい歴史認識を持つてほしい、そこから「真に生きる力」が生れてくると力強く語りかけられた。

### 〈班別研修〉

講義の後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ皆で講義の内容を確認し合ひ、続いて講師が一番伝へたかったことは何か、各自が最も感銘を受けたことは何かを中心に討論が行はれた。緊張してゐたこともあり、初めのうちは沈黙が続いた班も幾つかあつたが、やがて心を開き、真剣に語り合ふやうになつていつた。班別研修は講義終了後毎回はなれた。

第二日目（八月七日）

合宿参加者は、毎朝六時半に起床し、各自洗面・清掃を済ませた後、「朝の集ひ」に参加のため広場に整列した。国歌斉唱に合はせて、国旗の掲揚、ラジオ体操を行った。連絡事項の伝達などが行はれ、新たな気持ちでその日の研修に取り組んでいった。

〈講義〉

午前中には、日本政策研究センター所長の伊藤哲夫先生が「激動する東アジア情勢と日本」と題して話された。最初に、所謂「従軍慰安婦」問題に対する我が国の政府の担当官の真実から目をそらせた無責任な発言や、PKO法案が提出された際の政府の逃げ腰的な答弁の例を挙げて「これが自由な独立国の自由な言論でせうか」と述べられ、日本国憲法をきれいな事として、現実問題に正しく対応できない我が国の風潮に対して「裸の王様憲法論」「茶坊主民主主義」と強く批難された。そして、朝鮮半島や中国など国際情勢について話された後、日本さへ戦争を起さなければ国際社会は平和であるといふ馬鹿げた考へ方を、冷静に、か

つ常識的に考へ直し、自分の信念に自信を持ち、国際社会を我が国の理想に合はせて造つていくんだといふぐらゐの積極性を持たなければならぬと話された。

#### 〈歴史講義〉

午後からは、神奈川県立百合丘高校校長で国民文化研究会・常務理事の国武忠彦先生が「明恵上人と現代の学問」と題して話された。

先生は、幼くして仏門に入った明恵上人の求道的生涯をたどりながら、現代人は学問において「理解をすることはよくできても信じることが出来なくなつた」と述べ、資料を元にしながら、主客融和の学問を実践した上人の人生姿勢を説かれ、現実以身を置いて自分のあるべき姿で生きていかうとした明恵上人の生き方を、ほのほのとした感じで講義された。



〈ビデオ上映〉

今回の合宿教室では、シネジャーナル・プロダクションの制作による「世界の中の日の丸・君が代」と題するビデオが上映された。幕末から明治にかけ国際交流が始まるとともに、国旗「日の丸」・国歌「君が代」が制定されてゆくいきさつをたどり、そこにこめられた我が国の成り立ち、理想が鮮やかな映像とともに紹介された。

〈輪読導入講義〉

夜は、(株)日本興業銀行資本市場部課長小柳志乃夫先生が「吉田松陰に学ぶ」と題して話された。先づ『東北遊日記』より七言の長い漢詩を紹介され、その中の「艱を涉り阻を跋み奇を探らむと欲す」といふ松陰の思ひは皆さん一人一人の心の中にもきつとあるのではと語りかけられた。そして『講孟餘話』、書簡「父杉百合之助宛」「回顧録」など、年譜をもとに松陰の足跡と時代背景を丹念に押へ乍ら講義を進めていかれ、最後に小説『宝島』の作者R・L・スティーヴンソンの「ヨシダトラジロー」といふ文章を紹介され、当時の外国人が松陰そして日本人をどのやうに見てゐたかを語られて講義を終へられた。

〔班別輪読〕

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読を行つた。小柳先生の講義を振り返りながら、紹介された吉田松陰の『東北遊日記』の中の漢詩や、父・杉百合之助や妹・千代に宛てた書簡、そして『講孟餘話』を、その一字一句の意味を押さへながら班員皆で声に出して読み、文に込められた吉田松陰の思ひを偲んでいつた。

第三日（八月四日）

三日目の午前中は、筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授竹本忠雄先生が「日本の神聖と現代世界」と題して話された。フランス人は、神と国民との絆を結ぶ仲介の役割を果たし、神靈力によつて国民に癒してを与へ来た「王」をギロチンにかけたことを裏めたく感じてゐるが、一方で人間そのものを「神聖なるもの」となし、自分たちが齎した自由・平等・博愛の思想を世界に伝へようといふ使命感を持つに至つたとフランスのたどつた歴史について話られた後、先生は「現代のフランス人は、今の日本人に比べ、強い使命感と統一感を持

つてゐることを認めざるを得ない。我々は最初アメリカ、二度目は我々自身に負けたのです。今の日本人は、占領軍による鉄の輪のごとき毒化作用によつて政治家の例に見られる如く、事態を真直ぐに見ることが出来なくなつてゐる」と強く警告された。そして、自らの精神生活の内から支へてゐる「神聖なるもの」、天皇・伊勢神宮に見られるやうに連綿たる歴史をたたへてゐるわが国の世界的意義について日本人が本氣になつて考へなければ取り返しのつかないことになりかねませんと説かれ、我々参加者は、「日本の神聖、日本人の使命感とは何か、統一感の源泉はどこなのか」といふことを深く考へさせられたのであつた。

〈短歌創作導入講義・レクリエーション〉

午後からは短歌創作の手引きとして、山口県立下松高校教諭宝辺矢太郎先生が講義をされた。先生は、高校の教諭である奥様がクラスの生徒に作らせら信州へのスキー実習の折りの短歌を紹介されながら、「皆さんも自らの心の動きを新鮮な感動を飾らずにそのままを率直に、正確な言葉で詠んで下さい」と話られた。

その後の散策は、曇り空の中、予定通り「贄塚にへつか」に出発した。途中小雨がぱらつく天気となつたが、丘の上からは雄大な阿蘇国立公園の山並を眺めることができた。初めての短歌創

作に苦勞する者も見られたが、夕食後には各班毎に全参加者の短歌が提出された。

〈講話〉

夕食後、国民文化研究会常務理事兼事務局長長内俊平先生が、「若き友らに語りかける言葉——極く当り前の日本人に私はなりたい」と題して話された。先生は、極く当り前のことの中に人生の大事があると言はれ、多くの人が合理主義を特徴とする文明に侵されてゐる中、文明の行き過ぎを知り、訂正できるやうな知恵を持った「極く当り前の日本人に立ち返ること」が今日の日本で最も求められてゐるものと語られた。先生のお話は、自然や祖先への思ひと感謝に満ち、その「幼な心」は皆が忘れかけてゐた何かなつかしいものを思い出させてくれるやうだった。



〈慰霊祭〉

三日目の夜は慰霊祭が執り行はれたが、それに先立ち大成建設(株)国際事業本部企画管理室長山口秀範先生がビデオ映像や歌謡曲を用ひながら慰霊祭の意義と祭式次第を説明された。その後参加者は屋外の広場に設けられた祭場に整列し、慰霊祭が厳粛に執り行はれた。

まづ三井甲之先生の和歌「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」が朗お祓ひの後警蹕の声と共に一同最敬礼にて御霊をお迎へした。献饌の後、澤部壽孫氏(日商岩井(株)勤務)の祭文奏上、長内俊平先生の御製拝誦と続き、小田村寅二郎先生(本会理事長)の玉串奉奠と共に一同御霊に同御霊に対し拝礼ののち、「海ゆかば」を斉唱した。撤饌の後、再び警蹕の声と共に、一同最敬礼を以て御



霊をお送りした。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

### 祭 文

われらここ火の国阿蘇の秀峰連山の麓に集ひ 第四十一回全国学生青年合宿教室を営みて中日の夜を迎へぬ 今し天つ日沈みて 夕風そよぐこの合宿地のさやけき草原を齋場と定め きよめまつりて とこしへにみ国守ります速つみ祖たち またみ国のために尊きいのちを捧げましし あまたのはらからみ霊を招ぎまつりなぐさめまつらむと み祭り 仕へまつらむとす

願れば過ぎし大御軍の敗れし時に 米国の占領政策がもたらせし東京裁判史観による日本の文化伝統の否定の始りし時より み国の行く末いよいよ激しく危ふき道を行かむとす  
るに ひとへに

昭和天皇 今上天皇の御聖徳に導かれみ国の生命は守られて来ぬ

しかれどもことに口惜しきことに をぞましき自虐史観は教育界を初めとして 官界財界等全国津々浦々にまではびこり 日本教育 外交 国防等に憂ふべき嘆かふべきこ

と打ち重なりみ国を危ふき道に立たしむる様に 胸ふたがれ憂ひかへりみしめらるる

さはあれど四十一年の年をかさねしこの合宿教室に集ひて 諸講義に耳を傾け 天皇の大み歌あるいは古典の言の葉を仰ぎ ひたすらにみ国の守りを乞ひのみまつり 老いも若きももろ共に心を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び 共に世に立つべき友となりなむと 朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ

畏かれどもいましみこと達のみたまの大き導きにより み国の行手を守らせ給へと この合宿教室参加者一同に代はり

謹み敬ひ恐み恐みも白す

澤部壽孫

### 明治天皇

#### 秋夜

いにしへの人のいさををかたりいでぬものしづかなる秋の夜長に

#### 詞

言の葉のみちにこころのすすむ日はひとりありてもたのしかりけり

学問

事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ  
をりにふれたる

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は畏きものぞありける  
くのためにたふれし人をきくたびにおやの心ぞおもひやらるる  
くのために身を心もくさぬる人のいさをたづねもらすな

昭和天皇

あのみかみ  
日御碕にて

秋の果の碕の浜のみやしろにをろがみ祈る世のたひらぎを  
旅

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふ旅ゆく

木

わが国のたちなほり来し年々にあけぼの杉の木はのびけり

伊豆須崎の春

みわたせば春の海うつくしくいかつり舟のひかりかがやく

今上天皇

平和の礎

沖繩のいくさに失せし人の名をあまねく刻み碑は並み立てり

苗

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのばる

第四日目（八月五日）

〈講義〉

四日目の午前中は、国民文化研究顧問加納祐五先生が「人の心を種として」と題して話された。先生は、心を中心に日本の伝統に話を進められ、「古今和歌集・假名序」を紹介されて、紀貫之の歌の道を興さうとする願ひは、「心」を伝へんとする志に外ならかつたことを話さ

れた。そして、「精神」と対比しつつ「心」の特性を説かれ「精神が自分と他者を切り離し、他者を対象としてはつきりつかまうとするのに対して、心は自分と他者を親しく結ぶものであり、心が通ひ合つたときに生きてゐるといふ——いのち——が感じられる。今日では精神が肥大し心は失はれつつある」と指摘された。また最近の日本の問題に言及して「阪神大震災の時には現れたやうに、日本人の心を大切にする伝統は国民の中に必ず生きてゐる。我々だけが日本のことを考へてゐると思ふのは傲慢です」と話られた。

#### 〈創作短歌全体批評〉

午後からは、熊本市役所勤務折田豊先生が、全参加者からの歌を綴ち込んだ歌稿を手に批評をされた。各班から一首づつ取り上げ、時にはユーモア交へながら丁寧に添削していかれた。対象をしつかり見つめて正確な表現で情景を詠んでいくことの大切さを実例をもつて示されたのである。和やかな雰囲気の中にも身の引き締まる思ひがした。

短歌全体批評の後、班別の短歌相互批評が行はれた。各班毎に、一人一人が真剣に取り組む中から、自分自身の感動を適切な言葉に表はし得た時の爽快感は格別なものがあつた。そして感動を共有共感することの意味合ひを各人が確め得たのであつた。

〈夜の集ひ〉

合宿教室も最後の夜となり、「夜の集ひ」の時間となつた。最初に小田村寅二郎先生の音頭により、(社)国民文化研究会理事の坂東一男先輩(株)アサヒビール飲料常務取締役)から今年も届けられたビールで乾杯し、班別・大学別に楽しい出し物が続いた。最後に宝辺正久先生(社)国民文化研究会副理事長)より式典歌「神洲不滅」と行進歌「進めこの道」の説明があり、その後国民文化研究会会員によつて紹介を兼ねて斉唱され、学生・社会人参加者も一緒に唱和し、宴は閉ぢられた。

第五日目 (八月六日)

〈合宿を顧みて〉

合宿運営委員長である福岡県立春日高校教諭與島誠央氏は、四泊五日の合宿教室を振り返り、「各班での生活や討論が生き生きしてゐたと思ひます。残された時間はわづかとなりましたが、話の内容よりも、話しぶりに注目してもう一度班員に向き合つてみて下さい」と語

りかけられた。また合宿を通して、自分の心が懐かしいところに「帰つて行きたくなる」とお母さんの思ひ出を語られ、加納祐五先生が御講義の中で引用された御製について話られ「わが子をいつくしむ親心に何と満ちてゐることでせう」と感想を述べ、最後に合宿教室の無事なる日程消化を参加者に感謝しつつ話を閉ぢられた。

#### 〈参加者感想自由発表〉

参加者は合宿終了直前の様々な思ひを披歴した。最初は緊張からか、発表することをとまどふ様子だったが、時間がたつにつれ、序々に登壇して次々に熱い思ひを話つていった。「先生方の御製を拝誦する姿に感銘を受けた」「まごころを学んだ」「学校では学べない多くのことを学んだ」「極く当たり前の日本人になりたい」「出会へた友とは、生涯のつきあひひである事を信じて疑はない。来年また会はう」などと、二十数名の参加者が発表した。

#### 〈閉会式〉

国歌斉唱の後、参加者の代表して早稲田大学教育学部四年の伊藤佳恵さんは「この合宿で日本の美しいものをたくさん学ばせていただき、日本が大好きになりました」と話つた。続



いて主催者を代表して国民文化研究会副理事の上村和男先生（㈱千代田コンサルタント代表取締役専務）は、明治天皇御製「よき友にまじはりてこそおのづから人の心も高くなりけれ」を紹介され「合宿中に抱いた様々な新たな疑問や思ひを心の中で育んで、友と心を開いて語り合ふ中から自分自身で説明していつて下さい。それが国を存続させていく私達の務めだと思ふ」と挨拶された。次に「神洲不滅」と「進めこの道」を全員で唱和した後、駒沢大学経済学部一年の小早川武徳君が「閉会宣言」を行ひ、合宿教室は全日程を無事に終了した。

いよいよ別れの時が来た。数日前に会つたばかりの友ではあるが名残りはつきない。「元気でね。また会はう！」と再会を誓ひつつ各参加者は阿蘇の地をあとに帰途についたのであつた。



合宿詠草





合宿始まる

全国のあまたの友らと阿蘇の地で出会へることに胸はをどりぬ  
長崎大 教育三 本多康弘

阿蘇の地に学び話らふ友求め出会ひし事は真まことうれしき

福井工業大 三 増村博文

友どちと素直に心を語り合ふ喜び求めて再び来りぬ

法政大 経済二 土生直樹

講義

竹本忠雄先生の御講義を聴きて

早稲田大 政経四 田中裕二

雪にしなふ竹の如しと我が国ぶりを言の葉強く表はされたり

竹本忠雄先生の御講義を聴きて

福岡県立春日高校教諭

豊原晋一

西洋と違ふ日本の国柄を我が生徒らに如何に伝へむ

加納祐五先生の御講義をお聴きして

長崎大 教育三

本田康弘

出征にあたりて先人は「はらからの情忘れじ」と詠みあげしかな

我もまたこの合宿で出会ひたる同胞ともと学ばむ我が日の本を

小柳志乃夫先生の御講義

日本大 農獣医四

安東高明

国のため心くだきし益良夫のたけき姿に胸せまりくる

松陰の志をばしかと胸にきざみて生きむと我は決意す

獨協大 外国語三

斎藤章浩

若人に熱く語りて道示す我師の姿に我動かさる

## 班別討論

実践女子大 家政三

江副和美

はじめてと思へぬほどに親しまるる班友ともとの出会ひうれしかりけり

東北女子短大 生活二 渡辺芳子  
吾が思ひ伝はらぬことのもどかしく涙あふるるに友は目でうなづく

福岡教育大 教育一 廣瀬正美

発言に疑問の多き我を見る友の眼差し温かきかな

駒沢大 経済一 小早川武徳

阿蘇の宿に集ひし友と語りあひ山をし見れば心晴れやか

亜細亜大 法二 高橋雅子

阿蘇の地で多くの友と話らひて人のやさしさ我が身にしみたり

福岡大 大学院一 長府綾子

阿蘇の夏新たな友と交はりて知らない自分に気づく喜び

中村学園大 家政一 藤田明子

阿蘇の地で知らぬ土地より集まりし友らと心を語る楽しさ

(株)多々良 谷岡正秀

あらためて日本に生れしを誇らしとしみぐ思ふ共に学びつ、

朝の集ひ

放送の言葉遣ひも丁寧にラッパも鳴らぬ阿蘇の楽園

防衛大 管理二 城尾和彦

朝もやの阿蘇の大地をふみしめて友と語りし日本の未来

尚綱学園本部 中村敏郎

夜更けまで友と語らふ翌朝の月ほのしろく眼にしみ入れり

尚綱大 文三 吉村みふゆ

日の丸に朝日照りはえ心地よき風にふかれてはためきてあり  
日の丸の清き姿にわが心あらはれてゆく心地ぞしたる

鹿児島大 農一 葉棚奈穂子

レクリエーション

贄塚に登りて

北海道大 農二 服部泰子

雨にけぶる阿蘇の平野を見渡せば稲穂の緑のうつくしきかな

一面に広がる緑を見渡せば故郷の景色を思ひ出しけり

亜細亜大 法三 黒須武士

贅塚でふと横見ればむらさきのいと美しき花咲きたることよ  
日本大 文理一 山内 暁生

友どちととんばに指を差しのべて自然とともにたはむるるなり  
亜細亜大 法一 斎藤 百合香

贅塚に登りし道の草原に吹く風ほほに心地よかりき  
佐野日本大学高校教諭 荒木 敏幸

夏の稲ますぐにのびる水田の広がる阿蘇の道を歩めり  
三井物産(株) 松山 知香子

阿蘇の山見つつ贅塚にのほり来てこのよきときを友とわかちぬ  
宮崎神宮 木村 速穂

慰靈祭

東京法律専門学校 二 浜田和彦

国のため短かき命ささげられし若人ひとのいたつき偲おぼばれて来ぬ

福岡大 教員講座生 小森 誠

国のため殉じられたる方々の御靈祭を阿蘇で行ふ

阿蘇の地を後にしてより過ごす日も御靈と共に吾は生きなむ

合宿終る

ライセンスカレッジ 二 高田信一

日本の誇りも高きもののふの猛まき心を我も継つぎたし

慶応義塾大 総合政策一 松山聡一郎

真剣なる気持は常に持たまほし心の鏡澄さまさんがため

九州大 経済一 石井英俊

各地より集ひ来たりし友どちと共に励はげまむ別れし後も

東北女子短大 保育二 新山美樹  
阿蘇の地で共に学んだ友達と別れることの淋しきに泣く

(社)福岡県中小企業経営者協会 高田 哲  
遅くまで話らふ友の真心にまた会ひたしと心から思ふ

鳥取大 理二 新宮 一  
四日間共に過ごせし友らとの別れ近づき寂しさ覚ゆ

亜細亜大 法二 木内博一  
阿蘇の地に集ひ語りし友だちの言葉を胸に我は帰らん

大学教官有志後援会・国民文化研究会

(社)国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎  
伊藤哲夫・竹本忠雄両先生をお迎えして

こころざし雄々しく気高き大人二人獅子吼せられきこの壇上ゆ  
若きらも老いも挙りて聴き入りきみ心こもるその雄叫びを

今のままの政治・外交・教育の正されざればみ国危ふしと

同じ憂ひ国内くわちになきにあらざれど要路の人らはいまだ気付かず

阿蘇の地に集ひしえにしかりそめと思はず進まむ峻つとしき道を

元・日特金属工業(株) 常務取締役

加納 祐五

合宿にて講義せむとて

わが思ひ若き友らに伝へむとひたにねがへどいとつたなきを

つたなかれど六十とせあまり学びこし思ひますぐにただ語るのみ

○

阿蘇の山けさは晴れつつ友の面輪さはやかに見ゆけふ別かるるに

をちこちにわかれ住むともむすばれしこころのきづなとけずもあらなむ

(株)宝辺商店代表取締役社長

宝辺 正久

贅塚に登る

苜草の小野を登ればそこかしこ撫子咲けり路のほとりに

鷲が峯のロッククライミングを語る友の声を聞きつつ汗垂り登る

霧雨の来たりて過ぎつ草山の頂きにして汗拭ふとき

頂きに生ゆる茅草の尖り葉に露おき光る夕立のあと

阿蘇谷の広き青田を見さけつつ風に吹かれぬ友とならびて

大阿蘇の根子岳の峰さやけくも空に立つかな夏草の果に

伊藤佳恵さん（早大・教・四年）の閉会の挨拶

靖国の神の母達みまからばわれらまつりを継ぎなむといふ

み子ささげし母のてがみを語りつつ涙のごひぬ君もわれらも

大阿蘇の夏草の野を吹く風のさはやかに君はのべをはりけり

元・九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

加納祐五先生の御講義

今日もまた君が教へに導かれすがしき世界にひたるうれしさ

遠き日に思ひを馳せて切々と語りゆきます君がみこころ

生涯のおもひかたむけて語りゆく君がみことばに胸熱きかも

清らかのせせらぎ時に激しつ流れゆくさま偲びつ、聞く

(社)国民文化研究会事務局長 長内俊平

大阿蘇を望む宿舎に営みし合宿教室今終らむとす

集ひたる人かず少なかれ心通ふ合宿なりしとしみみに思ふ  
部屋に廊に礼を互みやに交し合ひし若きらの面影心はなれず  
それぞれの持ち場持ち場を努めりし友らの姿もまた浮かび来る  
壇上に立たれし先生のみ姿も今ははるかなる昔のごとし  
おのおの心にも期するもの一つ抱きて今日を分れ行かむ  
朝夕に仰ぎ望みし大阿蘇に深く礼みやして分れ行かむ

尚綱学園監事 徳永正巳

加納祐五先生の御来講に感謝して

老いの身をはるばるお越し給ひたる師の御姿のいたましきかな  
六十年の念ひのたけをしみじみと語らひ給ひし大人有難き  
一筋の道を究めし六十年の御生命の炎継ぎて行かまし

拓殖大学総長 小田村 四郎

贄塚に向ふ小径の両側に田の面ひろごりあきつ飛びかふ  
緑なす田の面の中を樂しげに若き友らは語らひつつゆく  
高岳に雲のかかりて寝ぼとけの阿蘇の五岳の見えずくやしき

なつかしき汽笛一声ひびきたり此の阿蘇の地に汽車の走るか  
ややありて黒き煙を吹き上げつつ汽車走り来る懐かしきかな  
走りゆく汽車に向ひて手を振れば機関士もこたへて我に手をふる  
幼き日また若き日に亡き父と旅せしことの思ひ出でらる

日照岩井(株)ガス・石炭本部副部長 澤部 寿 孫

合宿三日目、慰霊祭の準備をする

うす雲る空仰ぎつつみまつりの斎場ゆにはしつらふ友らとともに

去年こぞの夏こつぜんとして逝きし友いまなつかしく思ひ出さるる

その友の指揮するままにみ祭の斎場こしらへし二年前は

「おい澤部」と友の呼ぶ声いまにしも聞こゆる心地するがかなしき

大阿蘇の麓のさやけき草原にトンボ群れ飛び蟬鳴きしきる

「全体感想自由発表」

若きらの次々に立ち喜びを語るを聞けば嬉しかりけり

伊藤大人竹本大人に告げまほし若き友らの語りしことを

合宿の火は絶やすまじとこしへの生命にはにふるる場にはにありせば

神奈川県立厚木南高校教諭 山内 健生

伊藤哲夫先生、十一班の班室に來たまふ

思はずも師の來たまへばたちまちに緊張感の部屋内に満つ

学生の間ひに應へて熱をこめ手振りを添へてぞ説きたまへたり

国思ふ深きみ懐ひの自づから溢るるままに伝はりて來る

(株)講談社広告局次長 磯貝保博

ハイキングの折に

悠久のいにしへ思ひつつ眺むれば阿蘇の五岳のおごそかに見ゆ

はるかなる外輪山のふもとまで青田つづきぬ阿蘇の広野は

うつしゑを撮りかはししつづ班友の笑顔を見れば心たのしも

熊本市役所 折田豊生

緑なす阿蘇の国原すみわたる空をあふげば心放たる

思ふこと思ふがまま語りつただし合ひなむはらからのごと

悲しとも思へどうつつにまがごとはさはに起これり国の内外に

不動産鑑定士 松吉基順

大阿蘇に集ひし友ら様々の生きのあかしか語らひつきず  
集ひをはりさかりて暮せど正道を求めはげめや若き友らよ

舞岡八幡宮 関正臣

竹本忠雄先生の御講義を受けて

一人だも落伍者無かりしそのかみをともしと思ふ平成八年に

高千穂商科大學講師 名越二荒之助

いつかしき神の山なり根子岳は雲か煙か流れてやまず

大阿蘇に広がる原野は霧こもり神々の里うつつに偲はる

万葉の昔思ひぬ班員の乙女子我に野いちごくれたり

神聖の國づくりこそ日の本の使命と説かれし言の葉忘れじ

山口県立下松高校教諭 宝辺矢太郎

田村亮子選手を映画に見る

メインポールのまなかにあがる日の丸をあふぐ口もと切りむすびたり  
そだてくれしあまたの人ら日のみ旗にかさなりくるとぞなみだぐましも

日のみ旗あふぎつつきく君が代に日の本にあれし幸をし言ひき

国のためにあらずたのしみてこよといふ人らきけよかしをとめの言葉を  
国背負ふつらさにたへてはげみますをとめををしきただにたたへり

羽後信用金庫 須田清文

鳥海山の山肌緑にかがやきてそびゆるみ姿はるか望みぬ

雲の間そびえたちたる富士の嶺気高き姿望みつ、ゆく

福岡県立春日高校教諭 與島誠央

次々と席に着きゆく学生の中になつかしき教へ子の見ゆ

朝夕は新聞配り睡眠も削るとふ君たくましく見ゆ

「浦君」と声をかくれば吾あに気づき「先生」と応ふるなつかしきかな

ゑまひつつ交はす握手はおのづからうれしきままに力こもりぬ

夏合宿終了

友みななのあつきみ情謝しまつり心の中で手を合はすかも

タマポリ(株)ラミネート営業部 吉川理夫

伊藤哲夫先生、班別研修に参加される

祖父母から気持ちの離るる学問は学ぶ価値なしと師は宣へり

熊本県立菊池高校教諭

川上良尚

宝辺正久先生のお話を聞く

先人の戦ひのさま聞きながら熱き思ひが体に溢るる

湯上がり阿蘇の山なみながむれは一日の疲れ流れ去りゆく

若者のはつらつとした語らひに励まされつつ学び深める

高知市立城北中学校教諭

中川 つぐみ

感じたることは言葉にならずとも友の涙はすべてを語りぬ

あいさつを交はす友らの笑顔にも学びしことのしのばれてくる

わが道を正しゆきたる合宿のためることなきを心より願ふ

コロンビア学院

レイヴィン安希子

わかれゆくことを惜しみて友どちといつかは会はうと約束かはず

合宿を終へて阿蘇路を後にする吾れの心はこの青空のごと

## あとがき

第四十一回合宿教室は、昨年八月上旬の四泊五日の間、熊本県阿蘇の「阿蘇の司・ピラパークホテル」において大学生・社会人一七九名の参加者によつて「学問・人生・祖国・世界平和」を主テーマに真剣な討議がなされました。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にしてその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味讀いただき、人生の栞としてまた、日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今夏で四十二回目を迎へる合宿教室は、八月八日（金）から十二日（火）の日程で、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」を会場として開催される予定である。招聘講師としては、評論家・ドイツ文学者・電気通信大学教授の西尾幹二先生、筑波大学名誉教授・（社）倫理研究所客員教授の竹本忠雄先生をお招きすることに決定してゐる。全国の学生、青年諸氏の御参加を願ひつつあとがきとする。

平成九年三月十日

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

—— 日本への回帰 ——

(第32集)

平成九年三月二十五日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅一郎

発行所

社団法人国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします









大学教官有志協議会編  
社団法人国民文化研究会

